

伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇一九年 第八十八号

名
宮
城
郡

前田村

中田

大野田村

石取川

長町

廣瀬川

官城郡

名取郡

松平政子代官城

仙臺

城

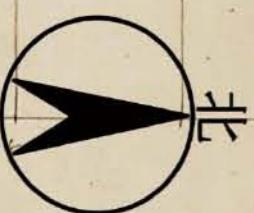
史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇一九年 第八十八号

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No. 88 2019



伊能忠敬研究会

**アメリカ力議会図書館蔵
伊能大図52号部分（仙台周辺）**

会誌86号で松島周辺を紹介したが、忠敬にとつて縁の深い仙台が含まれなかつた。今号で仙台周辺を取り上げる。伊能測量での仙台城下通過は第一次測量の往復路と第二次測量の帰路の三度である。

伊能忠敬の出身地旧下総国と仙台は水運を通じて密接な関係にあつた。忠敬は伊能測量の23年前、妻（達）を伴い松島遊覧をした際 分浜（現宮城県雄勝町）に戻る途中だという秋山惣兵衛と鉢田（茨城県鉢田市・水運の要所）で出会い同行している。秋山は

「：交易のため鉢子、東都（幾度となく往来し：）」と言ひ、忠敬らは仙台城下国分町で名所の案内や飲食の饗応を受けていた（測量日記）。忠敬の後妻（信）は仙台藩医桑原隆朝の娘で義父隆朝は伊能測量のキーマンの一人である。また伊能測量の元締めともいえる若年寄堀田正敦は仙台藩6代藩主伊達宗村の8男で桑原とは旧知の仲であつたと推測できる。

表紙右上に松平政千代居城と記された城が描かれている。政千代とは仙台藩9代藩主伊達周宗の幼名である。政千代は寛政8（1796）年3月2日に生まれたが生母は産後の肥立ちが悪く死去し、同年に祖父と父が死去したため一歳にも満たない政千代が仙台藩主を相続することになった。そのため親戚筋による補佐体制が敷かれ、堀田正敦は後見役を務めている。伊能測量時の政千代の年齢は5歳、6歳（一次、二次）である。

この伊能測量のルートは概ね国道4号線（奥州街道）に沿つていて、伊能大図52号から測線を取り出し、仙台周辺の川、天体観測場所などを参考に測線を国土地理院地図に重ねたものが図①である。

第一次測量は寛政12（1800）年閏4月19日深川を出立、古河城下、宇都宮、白河城下、福島城下を経て4月27日仙台城下国分町に着き宿泊した。

復路は8月9日西別を出立、釧路、函館、三厩、盛岡を経て10月7日仙台城下に着き2泊した。

享和元（1801）年の二次測量の帰路は、一次測量の止宿地と同じ盛岡城下、吉岡を経て11月22日に仙

台城下に着き2泊している。

左の写真①、②は筆者家蔵で恐縮だが、①は十数枚あつた目録の一枚で松平政千代と記されている。

いつどのような目的で出されたものか不明である。

②は拝領品と書かれた箱にあつた漆器の一部で笹雀の家紋が描かれている。当時の仙台は佐原・潮来・

鉢子にとつて身近な存在であったようだ。宮内敏

銘子にとつて身近な存在であったようだ。宮内敏

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）



図①：地理院地図に測線（赤）を加筆



写真①：松平政千代の記載のある目録



写真②：伊達家の家紋笹雀のある拝領品

目次

88号

表紙解説

アメリカ力議会図書館蔵

伊能大図52号部分（仙台周辺）

星埜由尚
玉造功
前田幸子
玉造功
河崎倫代

研究と話題

●伊能大図に記載されている寺社について

●国宝紹介「下利根川沿実測図」

●『量地伝習録』を読む①

●平山郡藏宛て伊能忠敬書状

●天文方御役人巡回表巻 稲舟様より御触留帳

●土佐の伊能測量1 甲浦・赤岡編

●伊能図フロア展に魅せられて 渡辺一郎・井上辰男

資料

●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二十二回

●「伊能忠敬・五國の足跡フォーラム in 笹山領」

●「加賀藩測量の足跡をたどる」（越中2）

忠敬談話室

●「伊能忠敬・五國の足跡フォーラム in 笹山領」

●「加賀藩測量の足跡をたどる」（越中2）

ニュース・会員便り

●石川県支部ニュース

●伊能忠敬・五國の足跡フォーラム in 笹山領

●開催される！

●資料提供 加賀尾宏一

●会津藩校日新館、日新館天文台遺跡訪問記

●室山孝・河崎倫代

●馬場良平

●福田仁

●河崎倫代

●星埜由尚

●玉造功

●前田幸子

●玉造功

●河崎倫代

●星埜由尚

●玉造功

●前田幸子

●玉造功

●河崎倫代

●星埜由尚

●玉造功

●前田幸子

●玉造功

●星埜由尚

●玉造功

●前田幸子

●玉造功

●河崎倫代

●星埜由尚

●玉造功

●前田幸子

●玉造功</

伊能大図に記載されている寺社について

星埜 由尚

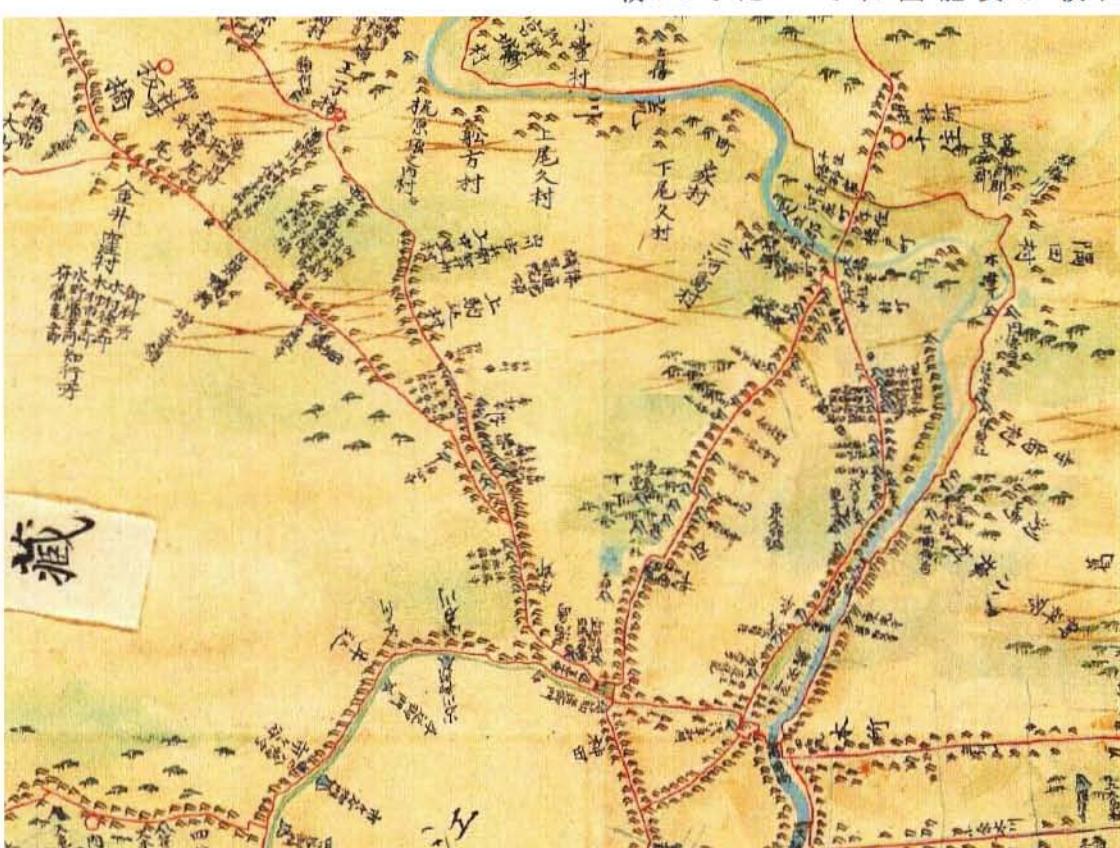
伊能大図には、多数の寺社の名称が記載されている。特に西日本において寺社の記載は多く、測量日記においても地図に表示されている寺社のかにも寺院の宗旨、神社の祭神など詳細に記述されている。何故、このように全国測量の次数を重ねるに従い寺社の記載が詳細になつていったのか、「伊能大図総覽」に収載した伊能大図の検討により、筆者の推測を交え述べてみたい。

伊能大図総覽に収載した伊能大図は、壱岐、平戸、山口など一部の図を除き、文政4年に幕府に提出された「大日本沿海輿地全図」の控図から明治初期に陸軍、内務省などにより模写されたものである。従つて、「大日本沿海輿地全図」の控図

に記載されていた各種の注記から模写の際に誤記、脱字等を生じた可能性があり、また、模写した機関担当者により、注記の採用、筆写などの内容、精粗に差異のある可能性が高い。そのため、「伊能大図総覽」に収載された伊能大図に記載される各種の議論には限界があるが、他に検討するための資料も見当たらないので、「伊能大図総覽」に収載した伊能大図に基づき伊能大図に記載されている寺社について検討してみたい。

伊能大図総覽に収載した伊能大図において記載されている寺院は四八一、神社は五五八、計一〇四〇である。記載

号京都の九二ヶ所で、第162号出雲四三ヶ所、第100号富士山四一ヶ所、第94号奈良四二ヶ所、第133号江戸浅草・本郷周辺(内務省模写・国立国会図書館蔵)

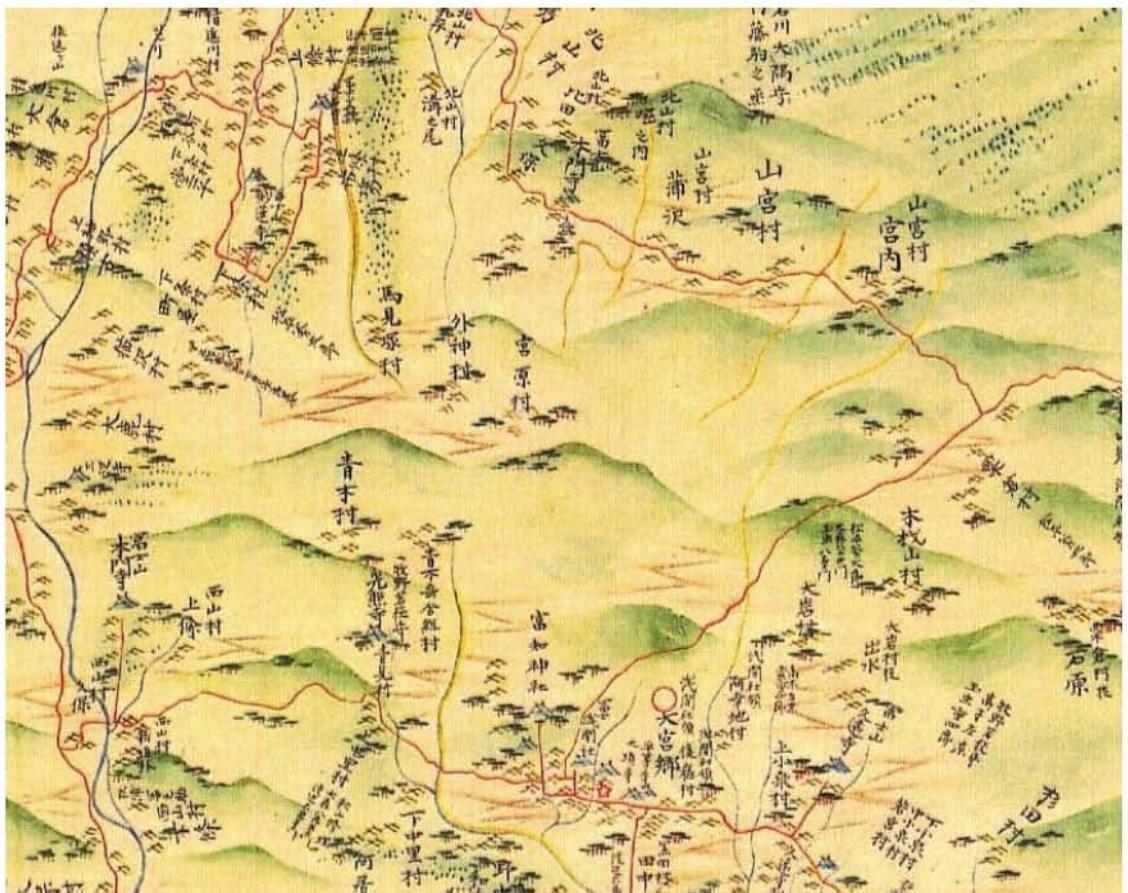


大図第90号江戸浅草・本郷周辺(内務省模写・国立国会図書館蔵)

高崎・秩父四〇カ所と続く。その他寺社数の多い
図幅は、第123号宮津三〇カ所、第88号熊谷・浦
和・川越二八カ所、第191号壱岐二八カ所、第155号
松江・米子二七カ所、第192号対馬二七カ所、第118号
号岐阜・大垣三三カ所、第101号熱海・三島二一カ所であ
る。

江戸の寺社の記載の多い
のが目立つが、江戸の鬼門
に当たる浅草、本郷のあた
りには多数の寺社の名称が
表示されている。現在も、こ
の界限は、寺社の多いとこ
ろである。品川には、品川
寺門前、妙國寺門前、海雲寺
門前、海晏寺門前の町名が
記されている。寺院名の表
示ではないが、それぞれの
寺院の門前町を示してい

京都、奈良の古都の有名な寺社の多くがその名称を記載されており、京都、奈良の寺社名の多いことは常識的に納得がいくが、江戸の市中の寺院名を多数記載したのは、江戸府内図の測量が行われたことによるのである。江戸府内図には六〇〇を超える寺社が記載されている。



大図第100号富十五山(内務省模写・国立国会図書館蔵)

く測量されている。各地の富士浅間社、日蓮宗の富士五山が漏らさず記載されている。これらの寺社を図上に示すため、これほどまでに測線を多数設けたのではないかと思われる。富士五山を巡るようく測線が設定されているように見える。富士五山とは、上条大石寺、北山本門寺、西山本門寺、小泉久遠寺、下条妙蓮寺を指し、いずれも日蓮の高弟日興の門流寺院である。これら富士五山には、すべて測線が延びていて、測線の設定もこれらの寺院の位置を明示することが目的で測量したと考えざるを得ない。

第162号の出雲の図幅と第155号松江・米子の図幅も寺社が多数記載されている。特に神社の数が多い。これは、出雲大社を中心とした「神の国」出雲の特性によるものであろう。出雲大社は、「いざもたいしや」と呼ばれるのが一般的であるが、古くは杵築大社（きづきのおおやしろ）と呼ばれていた。明治四年に出雲大社と改めたが、正式には「いざもおおやしろ」である。伊能大図には、杵築の地名があり、単に「大社」と記されている。注記のある寺院は少ないが、浮根〔浪〕山鰐淵寺は、一時は出雲大社の別当寺としても盛んな古刹であったが、現在は往時の隆盛を偲ぶ静かな伽藍が残るのみである。

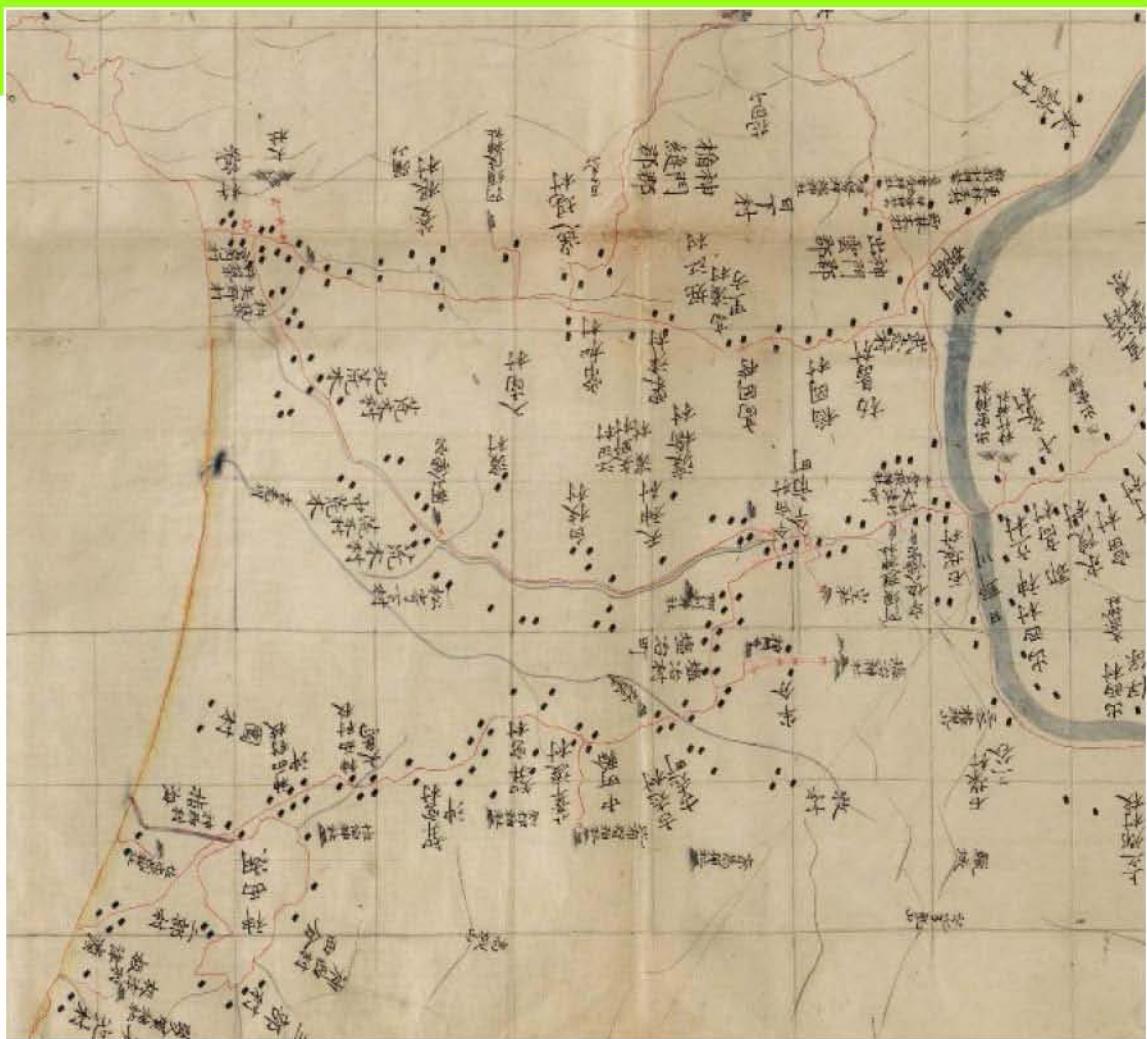
意外に多いのは、第100号

記が見られる。浅学の私にはその理由はよくわからぬが、「魏志倭人伝」に記されるように古代からの大陸との交流や国生みの神話などの影響がある

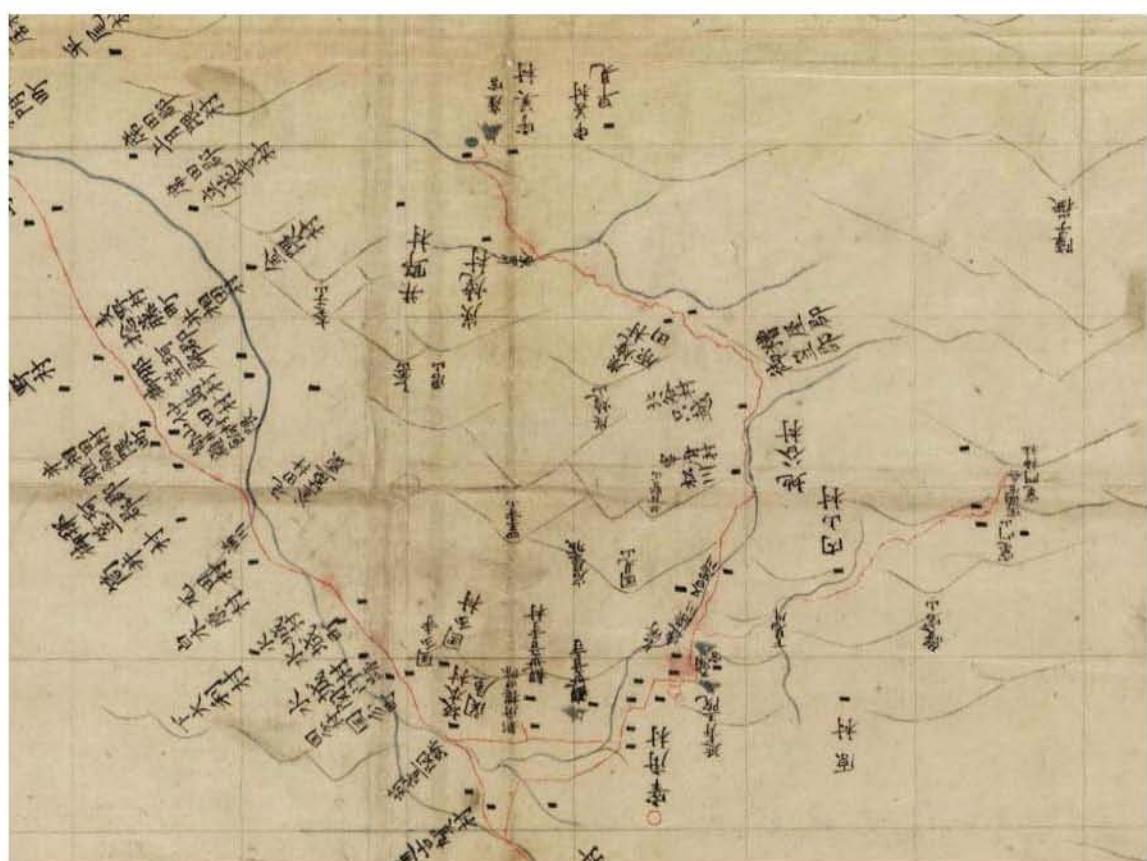
るのであろうか。

第187号福岡の図幅には、宝満宮竈門神社の注記があり、そこまで測線が到達している。現在、宝

満宮竈門神社は、下宮が宝満山山麓に、上宮が宝満山の山頂(八一九ばかり)に鎮座する神社であるが、大図には宝満山の山頂に注記が添えられている。



大図第162号出雲大社周辺(陸軍模写・アメリカ議会図書館蔵)

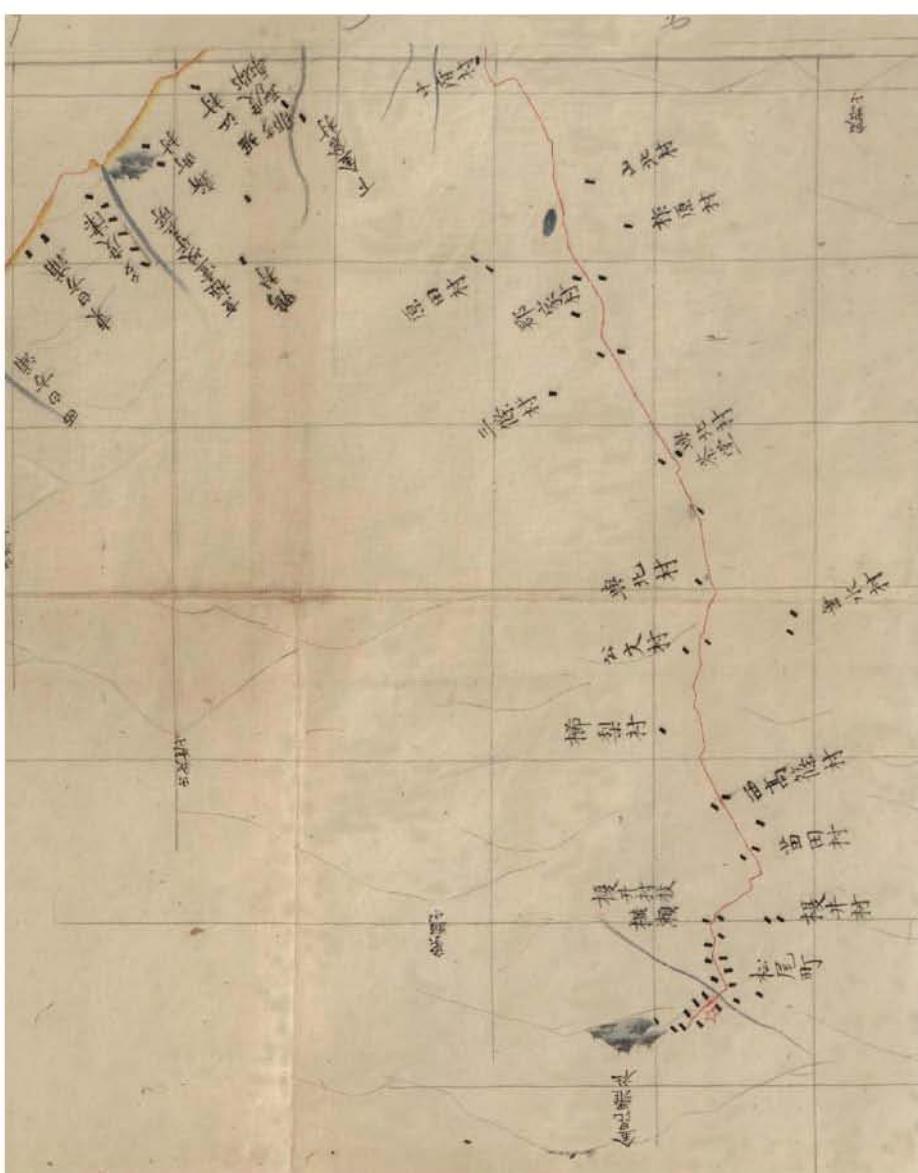


大図187号太宰府周辺(陸軍模写・アメリカ議会図書館蔵)

伊能忠敬自身は宝満山には登らなかつたが、測量隊は山頂まで登り、開放された測線が描かれていく。宝満宮竜門神社は玉依姫命を主祭神とし、伊能測量当時には神仏が習合し、修驗道の聖域として信仰を集めていた。測量日記には、行程が詳しく述べてある。伊能測量隊は、何故宝満山に登つてまで宝満宮竜門神社の測量を行つたのであろうか。比高八〇〇メートルを越える山を登つて山頂の神社まで測量した例は英彦山、高尾山などに見ら

宝満山の位置を地図上に描画したいのであれば、富士山などの顕著な山のように交会法により明らかにすればよい。しかし、導線法により社前まで測量しているのは、神社の位置を明示したかつたからである。伊能測量が幕府直轄の事業となつてから、測量隊の態勢も充実し、作業実施も余裕ができ、元来信心深かつた忠敬は、神社仏閣に參詣する機会も増えたと通説では言われてきたが、それだけであろうか。

伊能忠敬の寺社の測量は、主要な測線から短い距離を派生して測量した場合も多いが、開放した長距離の測線を設けて寺社の門前・社前まで測量している事例も多い。吉野山、当麻寺、播磨一宮、兵庫県香美町村岡の黒野神社、讃岐の金比羅社宝満山の近くの宇美神社など長い距離の測線を門前・社前まで延ばしている。それほどの距離がなくとも、寺社まで分岐した測線は数多くある。このような開放した測線は、本来の測量の目的である海岸線の形を明らかにするためには不必要的測線である。従つて、精度は必ずしもよくないが、対象の寺社の位置を地図に示すことが目的で寺社まで測量されたと考えられる。



大図 152 号金毘羅社周辺(陸軍模写・アメリカ議会図書館蔵)

西日本の測量では、各藩の城下には必ず訪れ、城下まで開放された測線が描かれている例も多い伊予大洲、福井では、長い分岐測線が城下まで到達している。測量日記には、城下には必ず寄り、忠敬が藩の役所に必ず挨拶に出向いていることが窺われ、また、藩からも藩の役人が訪ねてきて藩主からの贈り物などを渡している。藩の協力に謝すとともに藩領の地理情報にも意を配ったことが推測される。

伊能忠敬の全国測量は、回を重ねるごとに測量日記の記載も詳細になり、特に幕府直轄となつた第五次測量以降の西日本測量では、測線密度も増大し、寺社や城下へ向かう開放された測線の測量も増加し、寺社や城下の記載も地図上、測量日記とともに詳細になる。このことは、単に伊能測量隊の測量が詳細になったのみでなく、幕府の意思が働いていたと考えるのが至当ではあるまいか。

「下利根川沿実測図」

玉造功

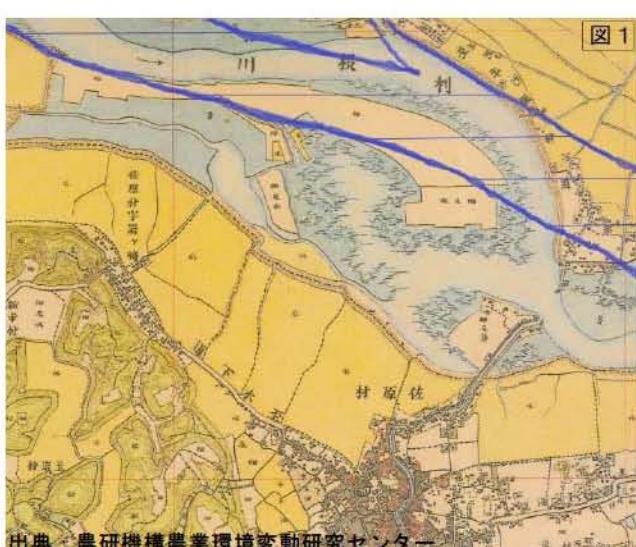
一 はじめに

香取市佐原の伊能忠敬記念館が所蔵する国宝二三四五点のうち地図・絵図類は七八七点で三分の一を占める。国宝地図・絵図類番号五三二の「自飯島村至篠原村下利根川沿実測図」（以下「下利根川沿実測図」と略す）は、伊能忠敬が隠居して江戸に出る前に、佐原の地で実測した地図である点に特徴があり、独自の価値を持つ。

そのために、この実測図は、江戸に出る前の腕試しとか、江戸に出る前から測量の練習をしていた証しとして位置づけられることもあつた。ここでは、この実測図の全体図と細部を紹介するとともに、実測図が作成された背景についても検討してみたい。

なお、この実測図については、会報四二号で佐久間達夫氏が紹介しており、本稿も佐久間氏の論考に負うところ大である。

今回の図版は、国土交通省の利根川下流河川事務所が作成した実測図の複元パネルを用いた。これは十六枚の原図からデジタル処理をして一枚の地図として精密に復元したものである。「道の駅 水の郷さわら」に隣接する「川の駅 水の郷さわら」の二階の防災教育展示の一角落に実測図の複元パネルは置かれており、月曜日などの休館日を除き、いつでも見ることが出来る。



出典：農研機構農業環境変動研究センター

この実測図は縮尺がおよそ一二〇〇分の一で、横幅が220cmというかなり長大なものである。本来は一鋪の地図であつたものがバラバラになってしまい、現在は十六枚に別れて残存しているが、失われてしまつた部分もあると思われる。幸いなことに主要部分が残つており、検討するに支障はない。

実測図の中央に利根川が乙字に蛇行しており、二ヶ所に①「下利根川」の文字が書き込まれている。②「荒川」は現在の横利根川である。利根川の河道は、図1の明治十七年七月の陸軍参謀本部による迅速測図でもあまり変わっていない。明治三十三年に始まる利根川改修工事によって、青色で加筆した現在の河道となつた。

二 「下利根川沿実測図」について

三 実測について

「下利根川沿実測図」の測量方法は導線法によるものである。図2の利根川南岸の佐原村の部分を見ると、
Aから**B**の方位と距離が「申九分廿一間」、
Bから**C**の方位と距離が「午四分十間半」と

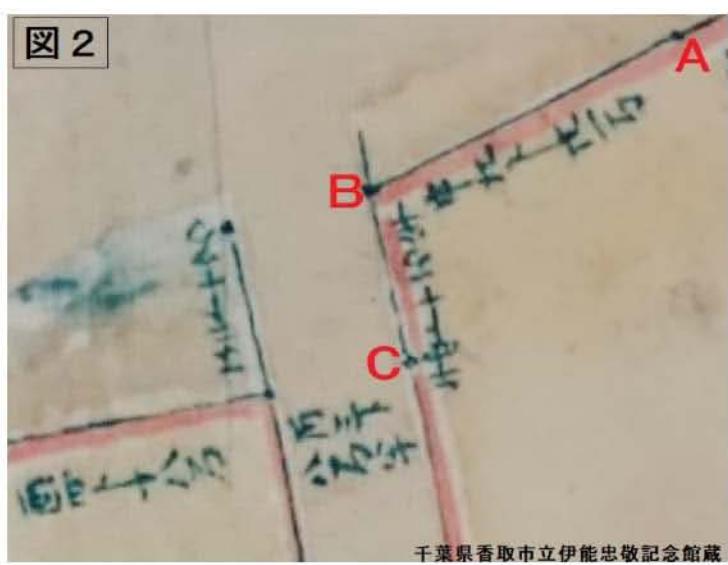


图 2

各区間の方位と距離が記されている。「申」は西南西、「午」は南である。その上、文字の向きが進行方向から書かれているので測量の経路も判明する。方位と距離を記した黒の測線とともに、朱の線が引かれている。これは堤防の部分を示していると思われる。

図3は実測した区間を示している。

⑨牛ヶ鼻の周囲、
 ⑩粉名口の周囲、
 ⑪堤鼻から⑫飯島村境まで
 ⑫篠原村境から⑬津田様御定杭の先まで
 ⑭南和田の周囲、



図3 実測区間

朱線は方位と距離が記録されている
青線は方位だけが記録されている

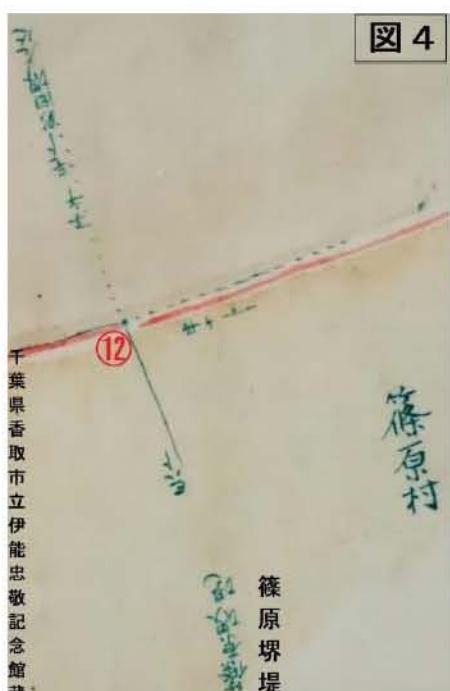
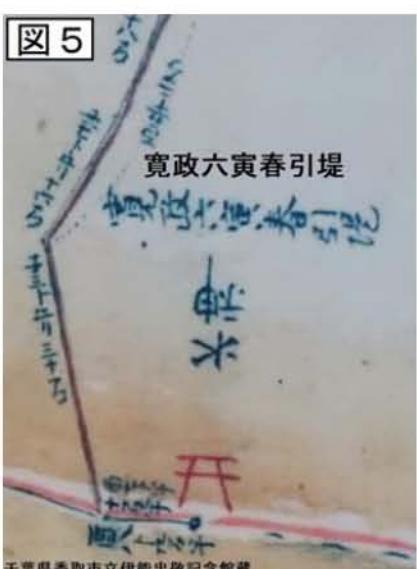


図 4



5

対岸の佐原村新田と篠原村新田の境界に向つての方位は「子午寅分新田堺見込」と記されてゐる。「子」は北、「午」は南である。また篠原村から⑫の方位は「申十分」としてい る。利根川の川幅は測量していないが、青線の三ヶ所で位置関係を確認している。

四 実測図作成の背景について

「下利根川沿実測図」の作成年代について
は、図5の「水神」付近に「寛政六寅春引堤」

と、その北方にも¹⁶「寛政寅引堤場」との記載があることから、寛政六年のことと推測される。

寛政六年（1794）は忠敬が伊能三郎右衛門家の当主であった最後の年である。同年十二月に忠敬は隠居して勘解由を名乗った。翌寛政七年三月には妻ノブが江戸の桑原邸で死去し、五月に忠敬は江戸深川黒江町に居を構え高橋至時に入門した。

この実測図を作成した背景と考えられる出来事が、伊能家代々の功績を記録した『旗門金鏡類録』【注1】の第二巻に記されている。「寛政六寅春引堤」と同じ時期の寛政六年の春二月二十七日、幕府の勘定奉行柳生主膳正の一行五十人程が佐原村に到着した。目的は「荒地起し返し御見分」のためである。「荒地起し返し」とは、放棄された耕地を復旧することであり、荒廃した農村の復興を目指した寛政の改革において、農政の重点であった。その見分のための勘定奉行の来訪である。

翌二十八日の勘定奉行の視察には、忠敬が名主・組頭などの佐原村の村役人をひきつれて案内にあたった。

忠敬の身支度も記されている。青梅嶋の綿入で絹裏を上着に着用し、脇差を帯びたと記されている。贅沢禁止の時代にあって、経糸の綿糸に絹糸を忍ばせた青梅嶋（縞）に絹裏とは、忠敬さんもなかなかおしゃれである。

勘定奉行の一行が先ず船で向つたのは南和田の「川欠け潰れ地」である。「川欠け潰れ地」とは河川の氾濫などで耕作できなくなつた田畠のことである。続いて、粉名口に向か

い「荒地御見分」をして視察を終え、上流側の村に向つた。佐原での勘定奉行の目的地は南和田と粉名口であつた。

五 南和田について

図6の南和田は利根川の水流が直撃する場所であり、利根川北側に広がる新田開発地域にとって水防上の要所である。そのため、南和田周辺には地名や測量データ以外の情報が書き込まれている。南和田の「寛政六寅春引堤」「寛政寅引堤場」の「引堤」とは、洪水対策として堤防を後方に移動して川幅を広くすることである。南和田のBの堤を矢印のようにAの寛政六年の堤まで引堤をすると、その間の帶状の地域は耕作できない「川欠け潰れ地」となり無年貢地となつてしまふ。

伊能淳家文書の『傳家』【注2】には、安永六年（1777）十二月に佐原村など五ヶ村が代官所に宛てた文書があり、南和田について次のように述べている。

南和田は佐原村・篠原村・津宮村・大倉村・岩ヶ崎村の五ヶ村の入会地としてこれまで堤を維持してきたが、「至つて難場」であり、出水のたびに水底より欠け崩れるので、毎年のように引堤などを行なつて防いできた。これまで百姓の住居などで失われたものが凡そ二十軒余りである。このままでは恐れ多いことではあるが年貢を負担する田地が亡失してしまう。また、南和田の堤防が失われると、天

図6 南和田引堤関係

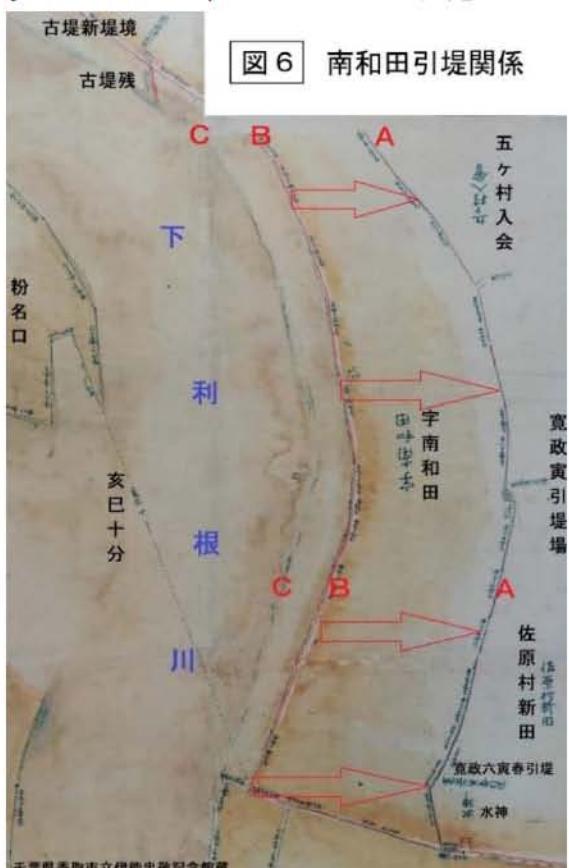
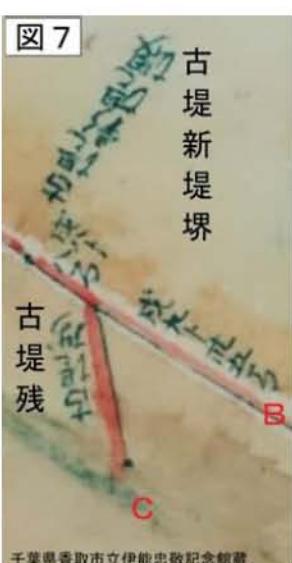


図7の南和田の北端を見ると、方位と距離を「戌九分卅五間」記したBの従来の堤（新）を「古堤残」として示す。西側に並行するCは昔の堤の痕跡と思えるような描写がなされている。



堤（古堤）から昔の堤（古堤）が分岐して一部残存して「古堤残」と記されており、Cは古堤の跡であることがわかる。

南和田の引堤は新田地域を洪水から守るという水防上やむを得ないことではあるが、引堤は潰れ地を生じさせてしまう。それは年貢地の減少という、幕府にとつて負の側面をも意味するものであった。これが勘定奉行一行の南和田の視察の背景であつたのであろう。文政七年八月四日、忠敬の嫡孫忠誨は出水の後で、佐原村新田の土手を見廻った。そして「新田土手即ち南和田へ、むすびにて五斗、十四ヶ村人足へ遣す。」と日記に記している。佐原村新田さらには利根川北岸沿いの新田集落にとつて、相変わらず「新田土手即ち南和田」は水防の要であつた。

六 粉名口について

勘定奉行一行が「荒地御見分」に向つた粉名口は、利根川の土砂が堆積して生じ、所有関係や耕作が不安定な場所であった。図8にも方位や距離が測れなかつた個所が見られる。この実測図作成にあつて忠敬が使用した測量器具は不明であるが、距離については五十間繩が用いられたと考えられる。図8の新堀割川は利根川の曲流部に開鑿された放水路とみられ、直線状の測線が続く。南岸の堤の測量データも「西一分五十間」「申十分五間」「同五十間」「同五十間」と繰返される。直線的な部分では間繩を最大限伸ばして五十間を測つたのであろう。

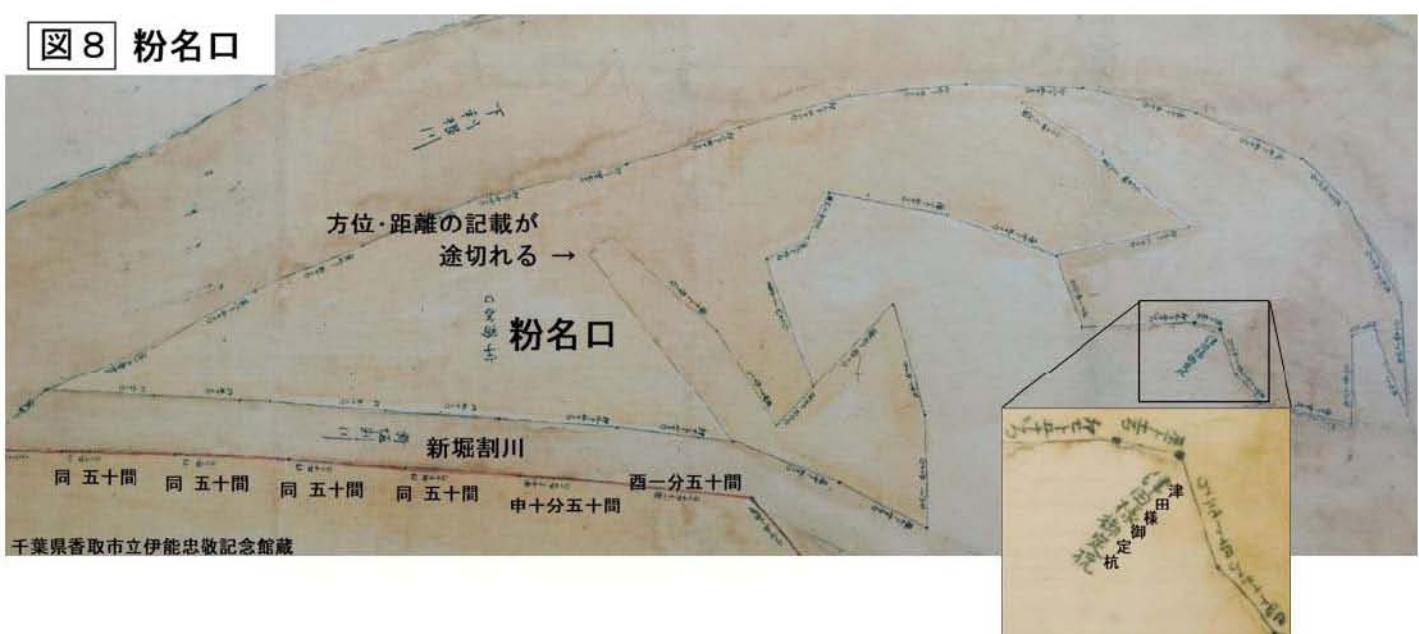


図8の「津田様御定杭」については『傳家』や『旗門金鏡類録』にその経緯が記されている。佐原村が天領から旗本津田家の知行所となつたさい、引渡す側の代官所の手代と引継ぐ側の津田家の家臣の両者が立会つて、粉名口に「御定杭」を打つて津田家知行地の佐原村に引渡した。これに対し、粉名口附洲は三ヶ村入会であるとして篠原村、津宮村が納得しなかつた。名主たち村役人では收拾がつかず、結局伊能忠敬と永沢治郎右衛門が仲裁しておさめた。勘定奉行の見分の十五年前のことである。実測図に「津田様御定杭」を記載することは佐原村としては不可欠であった。この実測図には佐原村の中心部が描かれていないが、それは今回の勘定奉行の視察に關係が無いからである。伊能忠敬が下利根川沿いを実測したのは、「荒地起し返し」を目指す寛政の改革の中で、勘定奉行による「南和田川欠け潰れ地」「粉名口荒地」視察のために準備した実用本位の目的によるものであった。

注1 伊能淳家文書『旗門金鏡類録』については香取五郎氏翻刻の私家版によつた。
注2 伊能淳家文書『傳家』については佐原古文書學習会が解説を進めており、それによつた。解説の成果は『伊能忠敬記念館年報』第九号から掲載している。

内容は元文四年から寛政五年までの伊能家を軸とした佐原村の村政記録であり、『部冊帳』と『旗門金鏡類録』の間をつなぐものである。

『量地伝習録』を読む①

伊能先生地理ノ術ハ天學ノ余力ナリ

前田幸子

はじめに

伊能忠敬の測量法を伝える資料として『量地伝習録』がある。忠敬の高弟だった渡辺慎が自らの体験に基づいて測量機器や製図法等について具体的に解説したもので、伊能流測量技法を記した書物として唯一のものと言われる。名前の通り量地のみで天測については言及がないが、伊能測量を知るために重要な資料である。今号、次号と二回にわたり『量地伝習録』を紹介してみたい。今回は上巻の前半である。

『量地伝習録』の概要

本書は渡辺慎（尾形慶助、頤次、他）（一七八六—一八三六）が門人として習い覚えた忠敬の測量法を書き記したものである。したがって題名を「伝習録」（伝習＝師から教えを受けて復習する）とし、本論である測量技術の解説部分には「伊能東河先生流 量地伝習録」と内題を付し、「渡辺啓次郎慎子言述」（述＝先人の言説を受け伝える）としている。これに対し、序は「渡辺啓次郎慎子言撰」、序文は「渡辺啓次郎慎子言誌」として自身の著作であることを明示して区別している。書名は王陽明の『伝習録』を意識したとも考えられ、自序等も渡辺慎の漢学的素養が感じられる内容となっている。巻頭に付された自序および序文は本書の成立

の経緯を述べる中に、忠敬の人間性がにじみ出でていて興味深い。伊能測量の偉業が技術面だけでは達成できたのではないと感じられる。

成立の事情と経過

序文によれば、この書は忠敬の臨終時の遺言に応えて、忠敬の没後七年目の文政七年（一八二四）に著述したものである。比較的小規模な書物であるが、渡辺慎が普請役として多忙な生活を送るなかでやっと成立させたものである。これが書簡等で知られている。著述にあたっては書きためていた備忘録を基に執筆した。公刊の要請もあったが、渡辺自身が断り続け、写本として伝来した。その後、天保二年（一八三二）に出版が企図されたらしく、新たに自序が付けられた。しかしこの企ては実現しなかったようである。現在この書の刊本は見当たらない。

写本について

現在、本書の写本は多数存在し、それぞれ少しずつ字句の異同があるほか、目次の項目立てや記述内容にも差異がある。多くは上巻（本文下巻（附録）の二巻構成であるが、上巻のみ、あるいは下巻のみ伝わるものもある。ウェブサイトで公開されている写本もあり、国立歴史民俗博物館、東北大学図書館、早稲田大学所蔵のものは自宅で閲覧できる。

そのほか国立国会図書館、日本学士院、東京国立博物館、静嘉堂文庫、明治大学、東京都立中央図書館、山形大学、茨城県歴史博物館、九州大学にも所蔵がある。一館で数種類所蔵する例もあり、需要が多かつたことがわかる。

気象庁旧蔵の写本

多くの写本がある中で今回原本画像として採用したのは国会図書館所蔵の気象庁旧蔵本である。採用理由はこの写本の筆跡が特に美しい読みやすいこと、大谷亮吉が『伊能忠敬』を編著するにあたりこの写本を採用し、かつ論評を加えていること、その来歴から幕府が所持していた可能性があること、の三点である。

この写本は昭和四〇年代に気象庁の図書館の蔵書から『測地度説』等とともに発見されたもので、その経緯については『伊能図に学ぶ』等でも紹介されてよく知られている。「地理局測量課」の角朱印があり、明治政府内務省地理局が幕府から引き継いだ資料である可能性があるが、幕府が公式に所持していたものか、あるいは地理局が他から入手したものかは不明だという。ただし筆跡は明らかに職人の手によるもので、渡辺慎が筆工に清書させて幕府に献上したものか、あるいは幕府自身が清書させて利用していたものであろうと考えられる。

この写本を他の機関から取り寄せた数種類の写本と比較校合してみたところ、筆写された年代が最も早い国立歴史民俗博物館所蔵の写本（天保二年三月筆写で天保二年五月の自序より早く、したがってこの写本には自序が付いていない）と記述がほぼ一致している。後に筆写された写本は書き直されたらしく、文章が長くなっている箇所があるが、その点、この気象学旧蔵本は原著の記述を伝えていると考えられる。本稿では気象庁旧蔵本を基本にしつつ、他の写本の記述も適宜参考にしながら読んでいくことしたい。

◆『量地伝習録』上巻の内容◆

『量地伝習録自序』 渡辺慎撰（原文①）

本書の巻頭に収録されたこの「自序」は天保二年（一八三一）五月に渡辺慎（啓次郎、字は子言）が撰文したものである。文政七年（一八二四）三十九歳で『量地伝習録』を書き上げて序文を付したが、七年後の四十六歳のときに出版の話があつたらしく、そのため再度自ら序文を書いたものと考えられる。

『量地伝習録序』渡辺慎誌（原文②）

書簡によつて知られている。そのような中で『量地伝習録』は執筆されたのである。この書は実用的な技術解説書ではあるが、その背景を知ると単なるハウツー物としては読めない。渡辺慎の渾身の書として読むべきであろう。

戒テ曰」と、忠敬の言葉を「依頼」ではなく「戒テ」すなわち「教導」と捉えている。もし伊能流の技法書を依頼するのであれば、いまわの際ではなくもつと早くに申し渡す筈である。忠敬は学問好きだった慎が学者を諦め、普請役で終ることに心を痛めていたのかもしれない。結果として渡辺慎は貴重な著作を遺すこととなり、忠敬が「世に伊能一流を広めたい」と望んでいた測量法を現代に伝えることとなつた。

【伊能東河先生流量地伝習録】渡辺慎述
ここからが「伊能東河先生流」量地論でよ

『伊能東河先生流量地伝習録』 渡辺慎述
ここからが「伊能東河先生流」量地論でよ

「磁石」（原文④）

測量に使用する間繩の解説である。実際に使われていた間繩には様々な種類があり、湿度や摩滅等による伸縮が問題だったことがわかる。

①【原文】「量地伝習録自序」渡辺慎子言撰

量地傳習録自序
地之於天也。辨九年。我邦之於地也。
粒米耳。自大視小。自小視大。則其所視者各不同也。我邦之幅員不為狹矣。然其限之以江海。障之以山岳。而田野村落。无所不充也。夫岱國之形象者無能於量地也。量地之術自古有之。雖然其法迂遠疎濶而不足用焉。何則。六藝後世數學而已。為長於古。是以算數曆術之徒。日益精矣。量地之屬。亦出於曆術而與曆術相表裏焉。不測天則無得地之理。不量地安能得尽天之文。如雜印之裏黃測天。量地兼用者此之謂真之量地學矣。伊能東河先生者。此學之祖也。寛政中稟命以來十有七八年。天下之海濱官路。無所不測量及圖成也。其郡國之大小廣狹長短遠近可指計而辨矣。实可謂閑闥以來之良法也。余雖從于先生。魯鈍而不能得其要。然耳聞之所存粗記之。備遺忘。竊命曰量地傳習録以藏於家。同志之者。請梓之以公於天下。余再三而不得於是乎言。

天保二夏五

渡邊慎子言撰

天保二夏五

渡邊慎子言撰

天保二年夏五月

渡邊慎子言撰文

【書き下し文】 地の天に於けるや弾丸のみ、我が邦の地に於けるや粒米のみ。大より小を視、小より大を視る、則ち其の視る所の者は各々同じからざるなり。我が邦の幅員は狭しとなさず。これを限るに江海を以てし、これを障るに山岳を以てす。而して田野、村落、充たらざる所無きなり。夫れ國の形象を画く者、量地より能くするはなきなり。量地の術は古よりこれ有り。然りと雖も、その法は迂遠疎濶にして用を足さず。何となればすなわち、六芸、後世ただ数学のみ古より長たり。是を以て算數曆術の徒、日に益々精たり。量地の法たるや曆術に出でて、而して曆術と相表裏す。天を測らざれば、安んぞ能く天の文を尽すを得ん。鷄卵の黄を裹むが如し。(※13頁註) 測天量地を兼ね用いる者、此れこれを真の量地学と謂う。伊能東河先生はこの学の鼻祖なり。寛政中、命を稟けて以来十有七八年、天下の海濱、官路、測量せざる所なし。図成るに及んでや、その郡国の大、広狭、長短、遠近、指計して弁すべし。実に開闢以来の良法と謂うべきなり。余、先生に従うと雖も、魯鈍にしてその要を得ること能わず。然れば、耳これを聞いて存するところ、これを粗記して遺忘に備え、窃かに命じて曰く量地伝習録と。以て家に蔵す。同志の者、之を梓して以て天下に公にせんことを請う。余、之を辞すること再三なれども得ず。是に於いてか言う。

【大意】 広い大地も天と比べたら、ほんの弾丸ほどにすぎず、我が國の国土が大地に占める大きさはほんの一粒の米ほどにすぎない。だから小をみるのと、小から大をみると、それぞれ見方は同じではない。我が國の国土は広く、河や海、山岳で区切られ、田や野原や村落で充たされている。そもそも國土の姿を表すには、土地を測量するのが最良の方法である。測量技術は古くから存在するが、その技法は迂遠かつ粗略で実用には不十分である。六芸(礼・樂・射・御・書・数)のうちで数学だけは昔より現在のほうが進んでいる。それでゆえ算數曆術を学ぶ者たちは日々精密になっていく。量地の技法は曆術から派生し、曆術と表裏の関係にある。天を測らなければ地理がわからず、地を測らなければ天文の法則を究めることができない。鷄卵が黄身を内包しているようなものである(※13頁註)。天測と量地と両方を併せ用いるのを真の量地学という。伊能東河先生はこの真の量地学の創始者である。寛政年間に幕命を拝受して以来十七、八年間、全国の海濱と官道はすべて測量した。地図が完成してからは国々の大きさや遠近を指さして識別できるようになつた。まことに天地開闢以来の優れた技法と言うべきである。私は先生に随従してきたが、頭が鈍いので測量の要点がよく理解できなかつた。そこで耳で聞いたことを忘れないようにメモ書きしておいた。その書き付けに「量地伝習録」と命名して家に保管していた。同志の者がこれを公刊することを請い望んだ。私は再三断つたが、断り切れずに刊行することになり、この序言を述べる。

【註】「渾天如鷄子。天体円如彈丸、地如鷄中黃、孤居於內。天大而地小。天表裏有水。天之包地、猶殼之裹黃。」（渾天は鷄卵のようなものだ。天体は弾丸のように円く、地は鷄卵の中の黄味のようで内部に孤り居る。天は大きく地は小さく。卵の殼が卵黄を包むのに似ている。）『渾天儀』
張衡（後漢の政治家、天文学者、文学者、他）

②【原文】「量地伝習録序」

渡辺啓次郎慎子言誌

量地傳習錄序

項

前テウケテ蝦夷地東海ノ辺ヲ測量シ因成テ後

八夷羽ニ坐リ東ノ御恩ヨリ西ハ已故五島ノ隅

ニ至リ凡ソ海アル國至テ々ト去ヲナレシカノ

テラセ東海東山リノ外諸侯入勤往來ノ諸道

、ノ詩ナリテ十七八年道途ニ刺奇シテソノ

オサムル所ノ術マヌキ微妙ナリ先生終ニ詫テ

吾以刀劍行曰天父營學，名其室曰「九洲」，被

女ヨリシクエレヲ傳フヘシト然レビ吾先生ニ

薩テ其術ヲ學フ久シト茲迄素ヨリ曾々ニレ

テソノ國奥ヲ同ハザレハ分記録又此所ノ傳習

金部詩人畫手稿上題事文
文徵明仲尼傳

淺迦答次郎慎子言誌

文政甲申孟夏
渡辺啓次郎慎子言誌

渡辺啓次郎慎子言誌

※註 筆写年代の新しい写本は(※註)以降の

文政甲申孟夏
渡辺啓次郎慎子言誌

太字部分を左の文言に作る

然レドモ吾、先生ニ從テ其術ヲ学ブコト久シト雖モ、素ヨリ昏愚ニシテ、其門ニ入レドモ未ダ其奥ヲ伺ハザレバ、其習トコロヲ人ニ伝フルコトアタハズ。先生没シテココニ七匝。先生當ニ吾ヲ誘クユエンノ意ヲ思テ、潛然トシテ涕襟ヲ沾シ、終焉之命ニ黙スルコトヲ得ズ。聊聞スル所ヲ錄シテ、以テ其責ヲ塞ト云。

【大意】伊能東河先生の地理の術は、天文暦学の余力である。寛政・享和の頃、幕命を受けて蝦夷地や東日本の海辺を測量し、地図完成後、また日本全国の地図作成の命令が下った。南は大隅・薩摩から北は奥羽まで、東は上総・下総から西は肥前五島の端まで、およそ海がある国々にはすべて行つた。それのみならず東海道、東山道、そのほか諸侯が参勤交代で往来する諸道を測ること計十七、八年間。道路の測量に苦労して測量の技術は次第にますます精妙となつた。先生は臨終に際し、私にこう言われた。「天文暦学には各流派があるが測地術の分野にはまだそのようなものがない。もし将来、私の測量術を習得したいと志望する者がいたら、お前がそれを伝授しなさい」と。(※註参考)しかしながら私は先生に隨従して測量技術を長い間学んだものの、元来暗愚で学問の奥底を究められなかつた。そのため伝習録の記述内容に間違いがあるのは避けられないことと思う。

私にこう言われた。「天文暦学には各流派があるが測地術の分野にはまだそのようなものがない。もし将来私の測量術を習得したいと志望する者がいたら、お前がそれを伝授しなさい」と。(※註參照)しかしながら私は先生に随従して測量技術を長い間学んだものの、元来暗愚で學問の奥底を究められなかつた。そのため伝習録の記述内容に間違いがあるのは避けられないことと思う。

※註 筆写年代の新しい写本は(※註)以降の部

文政七年四月 渡辺啓次郎 慎子言 誌す

分を左の文言に作る

しかしながら私は先生に随従して測量技術を長

かに涙を流し、先生の臨終のいいつけに黙する」とはできなかつた。少しばかり聞きかじつたことを書き記してその責任を果たそうと思う。

文政七年四月 渡辺啓次郎 慎子言誌す

渡辺啓次郎 慎子言誌す

(3) 【原文】間繩

伊能東河先生流量地伝習録

(3) 【原文】磁石

伊能東河先生流量地傳習録

門人渡辺慎子言述

【大意】古來より漆繩、管繩、竹繩、その他様々な間繩があるが、どれも湿度によつて伸縮する。ゆえに朝繩・夕繩の説があるが、その伸縮の度合いはそれぞれ大いに異なり、正しい値をとるのは難しい。そこで先生は鉄の針金を長さ一尺四、五寸程に切つて両端を輪のように丸く作り、内法長さ一尺と決めて六十本をつなぎ十間の鉄鎖繩（一間ごとに印を付ける）とした。これは従来のものに比べ、ほとんど伸縮しない優れたものだつたが、曲折、（つなぎ部分への）砂入、摩滅を免れなかつた。およそ一本の鉄鎖の両端に四毛の摩滅があれば、長さ十間で二分四厘の縮小となる。かつ、重い鎖を引つ張るときには両端の環が自然に楕円形となり、これによつて伸縮が生じる。しかし伸びはするが縮みはない。とはいへ、どうしても推算や作図の過程で細かい誤差が生じてしまう。そこで藤蔓（蘭人持渡りのものが良い）数本をつないで（三寸ほど入れ違いにし三ヶ所錐で穴を開け金引繩を通し固く絡げる）用いると鉄鎖より軽く伸縮も少なく摩滅のおそれもない。また鯨のひれを幅五分ほどに挽き割つて数十本をつき合わせて使うと、朝夕日中と検査しても伸縮がない。実際に「正直繩」というべきである。また周囲五、六寸の竹を長さ一丈三尺に切り、籠（たが）竹のように八分割して両端五寸ずつ入れ違いにつなぎ、適当な長さにして使うこともあつた。これもまた正確で非常に便利であつた。

一 古ヨリ漆繩管繩竹繩ソノ外サマタノ間隔アレビ皆テ濕ニ隨テ各盈縮アリニヘニ朝繩夕繩ノ託ハアレビ其盈縮大ニ不同ニレテ折申シ難レ仍テ先生歎ハリカ子ヲ求メ是サ一天四五寸許ニキリテ木末両端ヲ鍛ノガトク七ク造リ其肉添長一尺ニ定メ數六十本ヲ繫ナ十間ノ鍛鍛印ヨリニトスヲレタ用ヒルニ傳木ノ間隔ニ勝リテ盈縮ノ量モ概ニ似タリサレ此數十里ノ行程ヲ引ケバ石ニ

間繩
伊能東河先生流量地傳習録
門人渡辺慎子言述
一 古ヨリ漆繩管繩竹繩ソノ外サマタノ間隔アレビ皆テ濕ニ隨テ各盈縮アリニヘニ朝繩夕繩ノ託ハアレビ其盈縮大ニ不同ニレテ折申シ難レ仍テ先生歎ハリカ子ヲ求メ是サ一天四五寸許ニキリテ木末両端ヲ鍛ノガトク七ク造リ其肉添長一尺ニ定メ數六十本ヲ繫ナ十間ノ鍛鍛印ヨリニトスヲレタ用ヒルニ傳木ノ間隔ニ勝リテ盈縮ノ量モ概ニ似タリサレ此數十里ノ行程ヲ引ケバ石ニ

間繩
伊能東河先生流量地傳習録
門人渡辺慎子言述
一 古ヨリ漆繩管繩竹繩ソノ外サマタノ間隔アレビ皆テ濕ニ隨テ各盈縮アリニヘニ朝繩夕繩ノ託ハアレビ其盈縮大ニ不同ニレテ折申シ難レ仍テ先生歎ハリカ子ヲ求メ是サ一天四五寸許ニキリテ木末両端ヲ鍛ノガトク七ク造リ其肉添長一尺ニ定メ數六十本ヲ繫ナ十間ノ鍛鍛印ヨリニトスヲレタ用ヒルニ傳木ノ間隔ニ勝リテ盈縮ノ量モ概ニ似タリサレ此數十里ノ行程ヲ引ケバ石ニ

間繩
伊能東河先生流量地傳習録
門人渡辺慎子言述
一 古ヨリ漆繩管繩竹繩ソノ外サマタノ間隔アレビ皆テ濕ニ隨テ各盈縮アリニヘニ朝繩夕繩ノ託ハアレビ其盈縮大ニ不同ニレテ折申シ難レ仍テ先生歎ハリカ子ヲ求メ是サ一天四五寸許ニキリテ木末両端ヲ鍛ノガトク七ク造リ其肉添長一尺ニ定メ數六十本ヲ繫ナ十間ノ鍛鍛印ヨリニトスヲレタ用ヒルニ傳木ノ間隔ニ勝リテ盈縮ノ量モ概ニ似タリサレ此數十里ノ行程ヲ引ケバ石ニ

【大意】 磁石（羅針、方位盤、方針とも言う）見盤、本盤、逆盤等の機器は古来より種々あるが、要するに盤の形のみ長大で羅針の長さが非常に短く、幅がきわめて広いので、方角を正確に測るのが困難である。平地では使えるかもしれないが山や坂、険阻なところでは盤を据えるのは難しいだろう。たとえ据えたとしても地面が平らでないと正確な測定はできない。そもそも

木ハ鉄氣ヲ避ルトテ帶刀ノオニテ用ヒルセノ育リコレハ実驗ヲ不知モトナリ羅針ヲ用ヒルトキサク鉄トテモ懷ニスベカラズ兼ニスベ羅針ニ感テ必危ヒアレモナカリセシ差ハサル羅針ハツルニアリテ用ニ立タザルナリザルニヨリテ帶刃ハ銅刀カ竹刀カヲ用エベシサル同ノトキナーサキ合セ被マスリヤツトノ鉄針ナドヲ持セヘシコレハ羅針ウケ針ノサキマクレテ羅針ノスワリハサキヤナハ一日ニイク度モトギナホスベレトキシ頃則モ低ク刺ヒテ試ルヘシ針毛ヲク大ムトキハ音ノセスセノニテ音ノスルウチハ未ダナリ度量トゼテセラサササレトキニハサキナリカニベシテ諸子オサヘニシブミタル見通ナハシムトキモリノ臺トニサマスヨアニスベレサシニガムト方達ハ合スモナリ朝夕トモニ見道ヲ改ムベシ世ニ長崎製ノ羅針ヨロシキトテ遠方ヨリ求シテ用ユ一セリナリ其參ナ見レニウケ針ヲ真鍔ニテ造シヘコケテオクレ早レソレヲ知ラテ用ユルニヘ裏ヨリ帝テモ惑セスハ理ナリ又早ラ居ル羅針ヲ善ト称スルモノコレモマタ一同ノ誤ナリ羅針ハ遙ク居リトイツマテモ針ノフレエリオナニ見エルヲ最エトス

も粗雑な機器を用いて日数を費やして測定できたとしても、図面を引く際にきちんと合うかどうか覚束ない。そこで先生は古今の資料を考究し、西洋の曆学書の機器を参考にして便利で正確な諸機器を製作した。

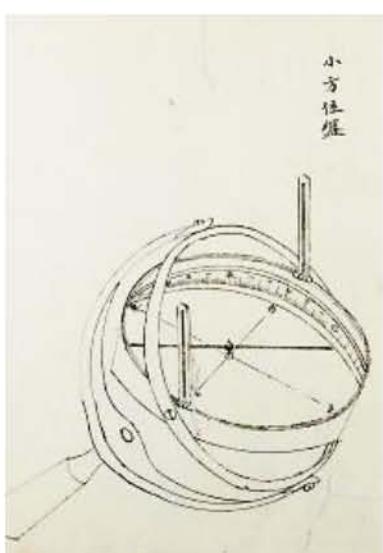
一、小方位盤、別名杖先羅針

その形は円形で直径四寸ほど。彎窠（回転羅針）作りで地面の凹凸にかかわらず自然に水平を保つものである（真鑑製）。その指南針（朱色が南）の長さ三寸二分を限度とする。針先より少し（二、三厘で可）隔てて台を作り、それへ天度三百六十度の目盛をとる。一周で十二支なので一支が三十度にある。この小方位儀は逆盤であり、南を向こう側にして北の見通しから南の見通しを貫き、左右へ自在に廻して遠山あるいは梵天を見通すのである。そのまま針の搖れがおさまるのを待つて南方の針先でその方角を計ればよい。測量時には専らこれを用いた。

一、大中方位盤（本名を地平径儀という）も円形でその芯のところから遠眼鏡を仕掛けて遠山を計るのに最もこれを用いる。これは本盤であつて、盤を南北に合わせ目鏡を廻して計る。半円盤は大中盤を半分に切つたもので、いたつて便利でよい。各対角線の目盛である。

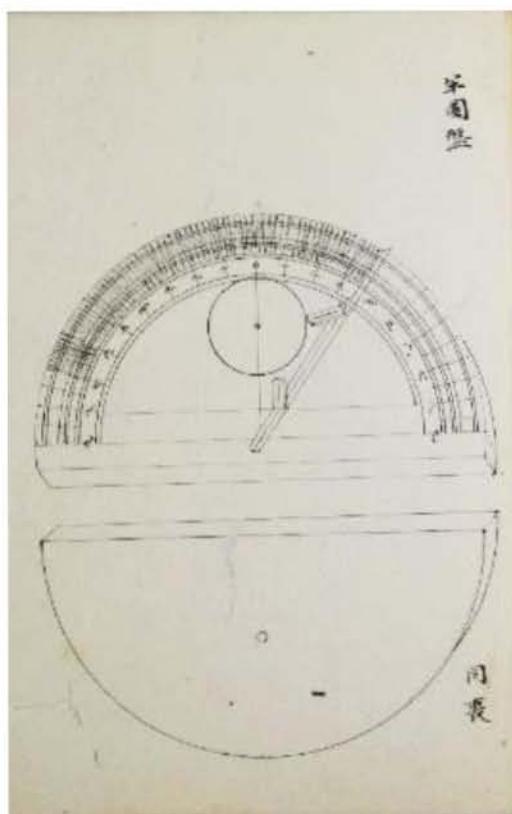
羅針に鉄を近づけてはいけないことは、よく知られていることである。しかし朴（ほお）の木は鉄氣を避けると言つて帶刀のまま羅針を使う者がいるが、それは実際を知らないのだ。羅針を使う際に寸鉄でも懷にあれば、羅針が動いて必ず方角がずれるものである。もしもそれが平らでないと正確な測定はできない。そもそも

銅刀か竹刀を用いるべきである。ところで、測量の際には小さい合わせ砥石、ヤスリ、ヤツトコ、鉄、針などを携行するとよい。これは羅針の受け針の先がまくれ（めくれ）て羅針の据わりが早いとき、一日に幾度も研ぎ直すのである。研いだら硬い紙を刺して試す。針先がよく尖つているときは、刺しても音がないものであつて、音がするうちはまだだめである。何度研いでも直らないときは、受け針を換えるべきである。また、ガラス押えに仕込んだ「見通し」を嵌めるときには目盛の台に対して歪ませるようになるとよい。少し歪んでいると方位が合うものだ。朝夕ともに見通しを検査するのがよい。世間では長崎製の羅針が良いと言つて遠方から取り寄せたまま使つている人がいる。その羅針を見ると、受け針を真鑑で作つてあるので、ことさら「まくれ」が早い。それを知らずに使うから本物の刀を近づけても羅針が感知しないのは当然の理である。また、早く静止する羅針を良いという者、これもまた同じ誤りである。羅針はなかなか静止せず、いつまでも針が震えているように見えるのが最上なのだ。

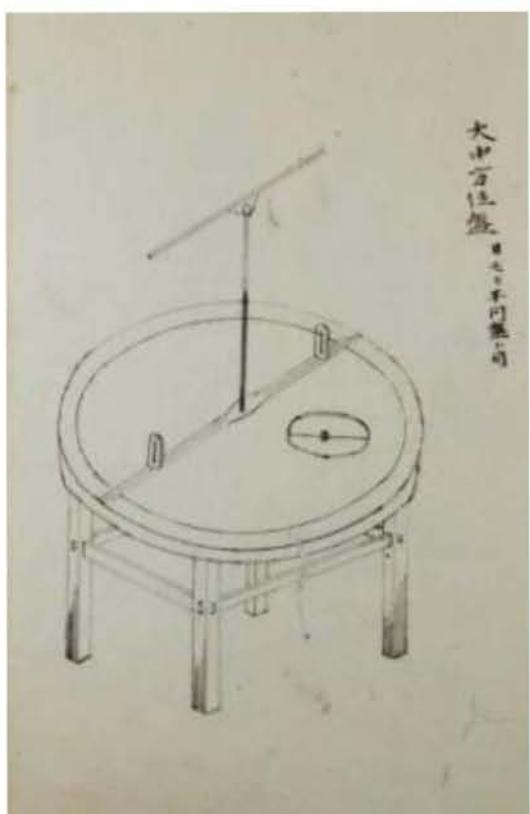


小方位盤

半円盤

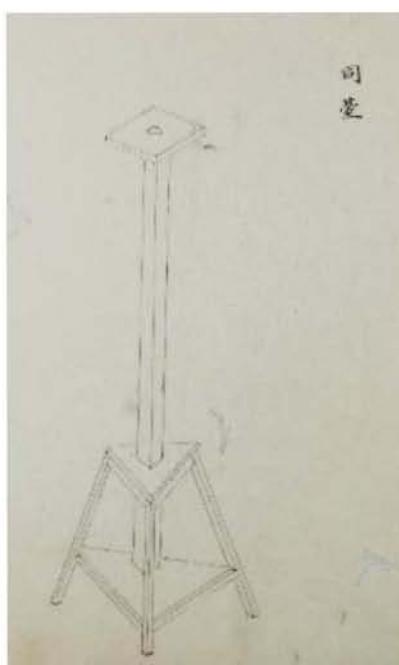


大中方位盤 目モリ半円盤ト同

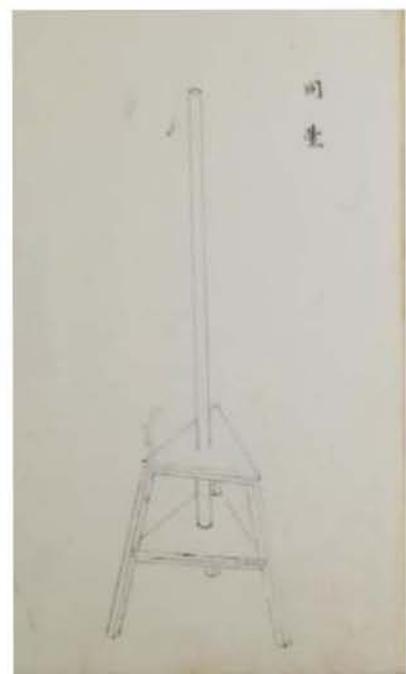


同裏

半円盤の台



大中方位盤の台



同裏

【参考文献】

- 『伊能忠敬』 大谷亮吉
『伊能忠敬の科学的業績』 保柳睦美
『伊能図に学ぶ』 土屋巖 東京地学協会編
『地理学評論』 50・(5) 土屋巖 古今書院
『敷内清著作集』 第三巻 天文学史一 朝倉書店
『中国古代天文学思想の研究』 前原あやの 関西大学

平山郡蔵宛て伊能忠敬書状

玉造功

て紹介するとともに、淡黄色の背景色の部分に大意を示した。

一 はじめに

大正十年に千葉県香取郡役所が刊行した『香取郡誌』には伊能忠敬が平山郡蔵に宛てた書状が二通、平山郡蔵の書状が一通紹介されている。忠敬の書状はいずれも第五次測量の直前の時期のもので、幕府事業となつた第五回測量の準備の様子など興味深い内容があるので紹介したい。

この書状は『香取郡誌』では郡蔵の子孫の所蔵としているが、現存するか否かについては不明である。そのため『香取郡誌』という二次史料に依拠せざるを得ない。

『香取郡誌』は大正天皇即位の大典の記念事業として、千葉県下で編纂された十二の郡誌の一つである。全国的にも郡誌編纂事業が進められていた時期にあたる。なお、『香取郡誌』は国会図書館デジタルコレクションや千葉県立図書館の電子ライブラリーで公開されている。

『香取郡誌』所収の書状の翻刻は、図1のように句読を切つておらず読みやすいものではないので、淡青色の背景色の部分に訓読されている。

図1 香取郡誌

利介方江御状今日相居致披見候愈御前御清安珍重の御事に候此方無異御安慮可給候然は貴子取急ぎ御出府御手傳被成候様度々申遣候所檀林地圖仕立並に桑原三万圓等にて急に御出府被成兼御差支之段被仰遣致承知候桑原仕残は御出府にても間に合可申候得其檀林地圖には御こより可被成候

一 平山郡蔵宛て書状 その一

利介方へ御状今日相届き、披見致し候。いよいよ御揃ご清安珍重の御事に候。此方異無く、ご安慮給わるべく候。

然らば、貴子取急ぎ御出府、御手伝い成され候様、度々申し遣わし候所、檀林地圖仕立て並びに桑原三万圓等にて、急に御出府成されかね御差支の段、仰せ遣わされ承知致し候。桑原仕残しは、御出府にても、間に合い申すべく候えども、檀林地圖にはお困りなさるべく候。しかしながら、この度の遠国御用は、御銘々弟子へも御手當下され候儀故、御出府御延引にては浅草へ対し甚だ気の毒。浅草高橋公、間氏よりも度々御尋ねに付き、大いに困り入り申し候。さりながら三四ヶ年も相かかり申し候事、檀林地圖も御残しなされ兼ね申すべく候はば、昼夜に御片付け成され、是非に当正月二十五、六日迄にも御出府なされるべく候。

下拙佐原下向御暇願い、今日中差し出すべく候も、二十日後出立發足と存じ候や。佐原下向仰せ付けられ候はば、早速御地に申し遣わすべく候。

さて、貴方様には取急ぎ御出府し御手伝いなされますよう、度々申し上げてきましたが、檀林地圖仕立てと、桑原氏から依頼された「三万圓」等があり、急には出府できないとのこと承知しました。桑原氏から依頼された仕事の仕残しは、御出府してからでも、間に合うとおもいますが、檀林地圖にはお困りのことと思います。しかしながら、この度の遠国御用は、内弟子へも御手當が出来ますので、御出府が延びてしまつては浅草天文方に對し立場が苦しくなります。浅草天文方の高橋景保様や、後見の間重富氏からも度々御尋ねがあり、大いに困っています。そうはいっても今回の測量は三四ヶ年もかかることですので、檀林地圖も残したままに出来ないのであれば、昼夜に御片付け成され、是非にこの正月二十五六日迄にも御出府なさつてください。

私も佐原へ下向する御暇願いを今日中に提出しますが、二十日以降の出立になると思っています。佐原下向が許可されれば、早速御地南中村に連絡します。

※一通目の書状は、江戸の忠敬から香取郡南中村の郷里に帰っている郡蔵に宛てたものである。

最盛期には千人近い学僧がいたといわれる。大谷亮吉は『伊能忠敬』七五五頁に日本寺の境内実測図が平山家に現存していると記している。ただし現存してかどうかは不明である。

※ 「桑原三万図」は不詳。時期的には文化元年八月に「日本東半部沿海地図」を上呈したのちに、桑原隆朝が郡蔵に作成を依頼した地図ということになる。桑原を通して依頼する人物としては若年寄堀田正敦の可能性が高い。

国立国会図書館蔵の「伊能日本実測小図一」は堀田正敦の旧蔵、文化元年上呈小図の副本である。「三万図」が「三分図」誤記誤読ということであれば、一里を三分に縮尺した小図となり平仄が合うのであるが、原文書で確認できないのが残念である。

※ 内弟子への手当については、大谷亮吉によると、高橋景保御用日記に一ヶ月に付き金二両三分との記載があるという。

※ 幕臣は公用や墓参などを除いて外泊は出来なかつたので、前年九月に御家人に登用された忠敬は佐原に帰るにあたつて「御暇願」を申請する必要があつた。

一、権兵衛と旧冬より申し込み候今一人右両人の儀は先日も申し遣わし候佐原儀助などの儀も御座候間、今日の儀には申し遣わしかね候。先ずは當てにならぬものと思し召され候。それとも自分脇合いの内にて入用も候はば、近々申し遣わすべく候。

一、道中発足の儀は來一月二十一日頃と存じ候。当春は三四ヶ年長測量の出府に候えば、出立前混雜にこれ無きよう致し置き候。出立前五日ばかりは何にもせぬ様に静かに致し、出立申したく候。これにより少々も早く御出府、測器御差図、測量などの仲間打合せも致し申したく候。

一、村松町一件につき手少、支度にも差支え申すべくにつき、御母堂様御上せくだされべく候由、大いに忝く存じ候。もはや縫女一両人相頼み、その外白木屋にて仕立て申すべく候あいだ、どうか間に合わせ申すべく候。御安意下さるべく候。御深志御母堂様に宜しく頼み申し上ります。

一、村松町一件のため人手が足らず、支度にも差支えがあるところ、御母堂様が上京なされるとのこと、大いにかたじけなく存じます。もはや裁縫する女性を一人一人頼み、その外に白木屋で仕立て、なんとか間に合わせたいと思います。御安心下さい。御深志御母堂様に宜しくお頼み申し上ります。

※ 第五次測量は内弟子と天文方下役との混成であるだけに、「測器御差図、測量などの仲間打合せ」など、経験豊富な内弟子リーダーの郡蔵にかかる期待は大きい。

※ 「村松町一件」は不詳。「小綱町一件」であれば、測量の準備を支えてくれたはずの盛右衛門・稻夫婦を勘当したことを意味するのであるが。

一、手少、支度にも差支え」という文面から、文化八年十二月十七日付の妙薰宛の書状で、忠敬が「朝暮之丹誠、旅支度ノ心配」について繰返し感謝し、「此度ハ衣服も十分」と書き送っていることが想起される。

※ 忠敬の嫡孫の忠誨が文政六年四月十日の日記に「白木屋は先祖より永々取引いたし候」と記しているように、伊能家は呉服商の白木屋の得意先であった。

一、寛平・伊兵衛両人の儀、此方より申し遣わし次第、御のぼせなさるべく候由仰せ遣わされ承知致し候。今日、横がし・中宿出府相談申し候ところ、下向は利介の外二三人江戸にて雇い入れ致し、木下にて迎えられ、それより舟にて佐原へ下り、川口より迎えの人足を呼び、佐原より江戸帰りの節、その地寛平・伊兵衛相連れ候とも、又は、佐原より送らせ候とも、追つて仰せ遣わすべき由申し候間、先づ急に遣わされ候に及び申さず候。以上

正月十六日
平山藤右衛門殿 勘解由

尚々、大作儀承知、其の代りは佐原儀助と存じ候。これも今一応かけ合い下されるべく候。何れにも、絵図急に御急ぎ御片付け、一日も早く御出府、何角御世話成されべく候。御延引相成り候ほど、浅草に対し、大いに気に相成り候。以上

尚々、大作のことは承知しました。その代りは佐原儀助と存じます。これも今一応掛け合つてください。何れにしても地図作りを急いで片付け、一日も早く出府して、なにかと測量隊の準備の世話を下さない。遅れるほど、浅草暦局に対し、大いに心配になります。以上

から江戸に帰るときに、多古の寛平と伊兵衛を連れていくにしても、又は、佐原から送らせるにしても、追つて連絡させるとしているので、先ず急いで出府させるには及びません。以上
正月十六日
平山藤右衛門（郡藏）殿 勘解由

※ 小坂寛平は多古藩領民。内弟子扱いで第五次測量に参加した。測量日記によると測量業務とともに荷物宰領も担当している。第五次測量から帰府後に郡藏とともに破門された。

※ 佐藤伊兵衛は第五次測量当初は下僕であったが、供侍の門谷清次郎が市野金助と共に大阪から江戸に帰つてからは供侍として測量を手伝つた。測量日記ではそれまでの「伊兵衛」から「佐藤」に表記が変わる。



※『香取郡誌』ではこの書状を「文化元年正月十六日付」としているのは誤りで、第五次測量直前の文化二年正月十六日付の書状である。
河岸から木下茶船で佐原へ向うものであり、江戸と佐原を結ぶ最短時間の経路となる。

二 平山郡藏宛て書状 その二

一筆啓上致し候。いよいよ御堅固成されるべく御座珍重に存じ候。我等異無く、二十三日朝四ツ時當着、昼後より牧野・寺宿廟參致し、二十四日、本宿・新宿諸親類知音相回り、天王・諏訪參詣。二十五日香取參詣、津宮へ相回り候。二十六日南中村へ罷越し、暮合に帰宅致し候。中村表御母堂様には、二十四日に佐原に御越し、二十五日御帰家に御座候。白升・吉田兩人、二十六日に中村へ罷り出で候様申し合わせ、昨日中村へ罷り越し、承合いに相成り候。吉田は人柄・手跡など一覽致し候ところ、白升は親元遠国不承知につき変替申し合わせ、昨日中村へ罷り越し、承合いに相成り候。是は出府に御談し、その上にて、何れとも勘弁致すべき趣き申し残し候。

一、佐原にも弟子がおり、その中にも測量隊に参加希望の者もいます。これについてもよく吟味し、追つて出府したときにお話しします。

一筆啓上致します。いよいよ御健勝のことと存じます。私も変わりありません。二十三日朝四ツ時に佐原につき、昼後から牧野村の観福寺と寺宿の浄国寺に墓参し、二十四日には本宿と新宿の親類や知人を挨拶まわりし、天王社と諏訪社に参詣しました。二十五日には香取神宮へ参詣し、津宮村へ廻りました。二十六日には南中村の平山家へ出かけ、夕暮れ時に佐原に帰宅しました。南中村の御母堂様には、「二十四日に佐原に御越しいただき、二十五日に御帰りになられました。白升・吉田の両人については、二十六日に

※ 津宮村には友人の久保木清淵が住む。

※ 「諏訪」は図3の諏訪大明神のこと。
諏訪神社は小野川西側の新宿の鎮守である。

※ 「牧野」は図3の牧野村の①観福寺のこと
で、伊能三郎右衛門家の菩提寺である。

※ 「寺宿」は図3の②の日蓮宗の浄国寺のこと
で、忠敬の妻ミチの母タミの墓がある。

※ 「天王」は図3の③の牛頭天王社のこと
で、伊能三郎右衛門家の菩提寺である。

※ 「牧野」は図3の牧野村の①観福寺のこと
で、伊能三郎右衛門家の菩提寺である。



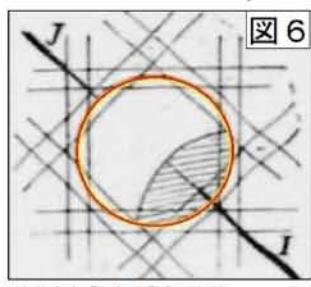
一、鎖繩四通り御仕立て成され候様、先日申し遣わし候。鎖の〇は大き候方、折り候にも引き候にも宜し候様に覚え申し候。弥三郎方諸器、二十日頃迄に出来候様御心添え成されるべく候。

ネジ道具も仕立て候様、又は御手練の様になさるべく候。四丁の杖先羅鍼出来候はば、駒形みの屋にて硝子一面に二枚ずつすりこませ申し候様になさるべく候。その他、長持ち両がけ、象限儀入り明ケ荷など御三人仰せ合せられ、早く出来候様、合羽トウユなども御仕立てなさるべく候。我等合羽は大いに短く覚え申し候。十分に長く、秀藏仕様よりも二寸も長く仰せ付けらるべく候。

「ネジ道具」は不詳。忠敬の測量器具の中でネジによる調整が大きな役割を果たすのは図5の測蝕定分儀である。日食や月食を観測する際に望遠鏡の接眼部に装着した。

※ 第五次測量から幕府の事業になつたとはいえ、測量器具の作成から長持ちや明荷にいたるまで、経験豊富な忠敬側の主導で準備されたことがわかる。

図6のよう、中央に太陽や月が位置するようにし、
鎖繩を四通り作製するように、先日指示
しました。鎖の〇は大きい方が、折っても
引いても良いように思います。大野弥三郎
が作製する測量器具は二十日頃までに出来
るよう注意して下さい。ネジ道具も作
製し、又熟練するようにして下さい。四丁
の杖先羅針が出来上がつたら、駒形の美濃
屋でガラスを一面に二枚ずつりこませる
ようにして下さい。その外、長持ち両がけ
や象限儀を入れる明荷など、御三人で御相
談して早く出来るようにして下さい。桐油
合羽なども仕立てておいて下さい。私の合
羽は大いに短く感じます。十分に長く、秀
藏の仕様よりも二寸も長くさせてください。



大谷亮吉『伊能忠敬』に加筆

図5

千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵



図8 『人倫訓蒙図彙』から合羽師

※ 「合羽トウユ」は和紙に桐油を引いた油紙を使って仕立てた合羽で、防水性が高い。

図7 『江戸買物独案内』



国立国会図書館デジタルコレクション

※ 「駒形みの屋」は浅草駒形町の美濃屋平六という御眼鏡所のことであろう。文政七年に刊行された『江戸買物独案内』には図7のように掲載されており、輸入品を扱っている。

一、寛平・伊兵衛給金の儀、三ヶ年分借用申し候趣き、かねて御相談なされ候由、御袋様・御伯母様御漸に御座候。内弟子奉公人は一ヶ年に致し、暮れに佐原より相渡し候様にと存じ候えども、貴殿右の趣き、拠ん所なく御かけ合いの様に承り候。左候えば、是は貴子の御引請けものに御座候。さて貴子・秀藏その外とも、浅草より一ヶ年ずつ相渡り候様に仰せ付けられ候。御承知に存じ候えども、念のため申し進め候。然しながら、一ヶ年の御當の外、少々の儀、また致したくもこれ有るべく候。これ出府の上、御漸申し入るべく候。

一、御母堂様、来月十日頃、飛脚と御一同に御出府の積りに御座候。御母堂様御出府に候えば、貴子御立ち帰り及ばず候筋につき、あらかた御相談取極め申し候。これも貴面に申し聞くべく候。

一、我等出立の儀、天気なれば二十九日出立、不天氣なれば朔日未明立ちに相なり申し候。何れ二日暮れ合い着の都合に御座候。なお貴面に申し入るべく候。以上

正月二十七日 勘解由

平山藤右衛門殿
伊能秀藏殿
大川治兵衛殿
猶よし女へも宜しく

一、寛平と伊兵衛の給金については、三ヶ年分前払いということでかねて御相談なされたり御袋様や御伯母様のお話にあります。内弟子や奉公人は一ヶ年分前払いにし、暮れに佐原より渡したいと考えていましたが、あなたが三ヶ年分前払いをやむを得ず決めたどうかがいました。そういうことで、寛平と伊兵衛はあなたが身元保証人となります。

さてあなたと秀藏その外のものも、浅草暦局からは給金は一ヶ年ずつ渡すといわれています。御承知のこととは思いますが念のため申し添えます。然しながら、一ヶ年の給金の外にも少々支給したいと思います。このことは出府の上、御相談します。

一、御母堂様は来月十日頃に飛脚と御一緒に御出府のおつもりです。御母堂様が御出府になればあなたは南中村に立ち帰るには及ばなくなるので、あらかた御相談し取決めます。これもお目にかかるお話をします。

一、私の出発は、天気であれば二十九日に出発、天気が悪ければ一日の未明に出発することになります。どちらにしても、二日の暮れに江戸に到着する状況です。お目にかかるお話ししましょう。以上

正月二十七日 勘解由

平山藤右衛門殿
伊能秀藏殿
大川治兵衛殿
猶よし女へも宜しく

※ 第五次測量の仲間奉公人の給金について
は、早稲田大学図書館所蔵の大川治兵衛宛の伊能忠敬書簡（文化四年六月十一日付）にも記されている。この書状では第六次第四国測量に向けて仲間奉公人の採用と給金について協議している。その前提として第五次測量の給金が次のように示されている。
去る丑年（文化二年）の南中村の仲間三人の給金は一ヶ年金三両、支度金一両一分、わらじ・煙草代合せて四両二分であった。第六次測量ではそれ以外に日々の働きぶりによつては月々少々でも褒美を出したいとしている。さらに支払方法について、給金の前貸しは少なくし、江戸風にしたいと述べている。

この『香取郡誌』所収の書状によると、忠敬としては浅草暦局と同様に一年分ずつ前渡しするつもりであったが、結果として郡藏が南中村で集めた三人の仲間奉公人については三ヶ年分前払いとなってしまった。それを踏まえて、第六次測量では江戸風つまり浅草暦局と同様にしたいというのである。

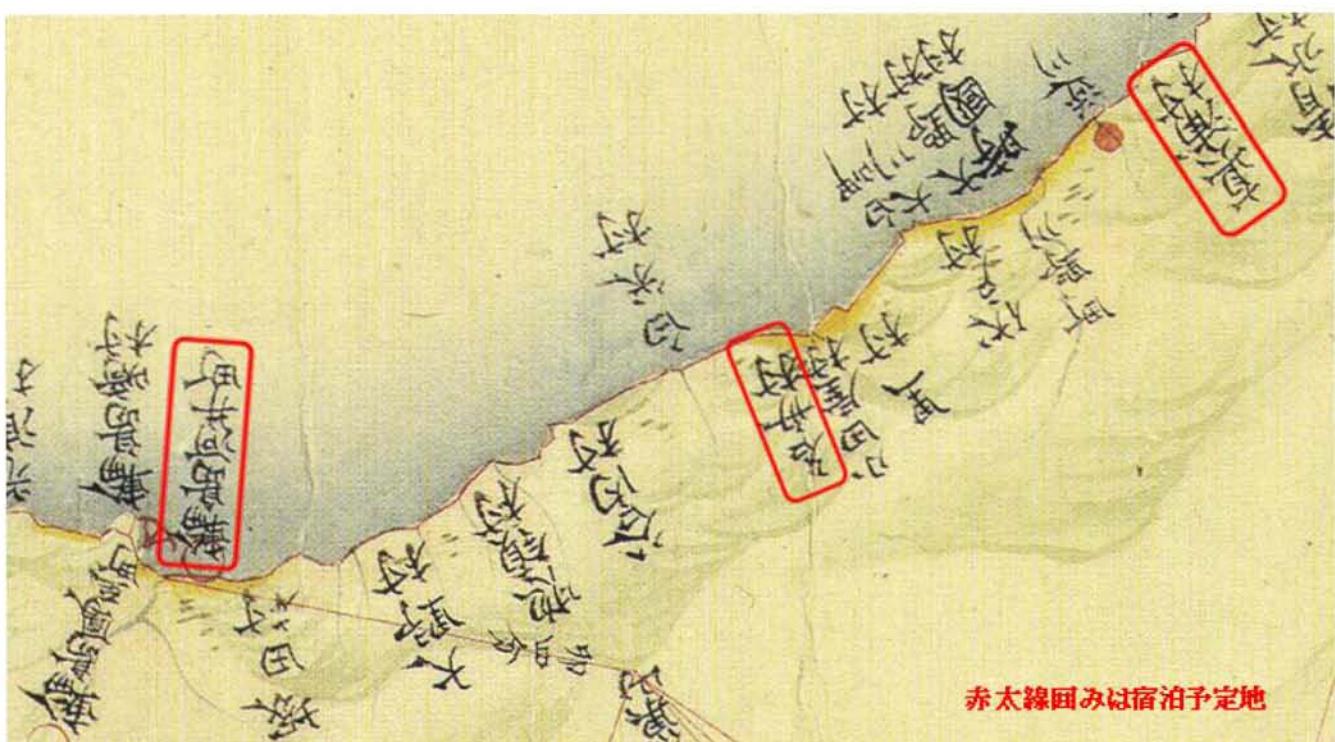
早稲田大学図書館所蔵の大川治兵衛宛書簡は早稲田大学図書館のHPの古典籍総合データベースで公開されている。『伊能忠敬未公開書簡集』に全文が翻刻され、『会報』三六号の安藤由紀子「大川治兵衛宛化四年六月十一日付け書簡X5」に関係部分の写真、翻刻、訳文が紹介されている。

史料紹介 「天文方御役人巡回壹卷 稲舟様より御触留帳」

奥能登に測量隊を迎えるにあたって八度の御触を出した十村

河崎倫代

石川県輪島市鳳至町住吉神社の「住吉神社文書」の中に、伊能忠敬測量隊に関する文書が十点ある。今回はその中の「天文方御役人巡回壹卷 稲舟様より御触留帳」を紹介し、「幕府御用」測量隊を迎える直前の緊迫した様子を追つてみた。



赤太線団みは宿泊予定地

享和三年

天文方御役人御巡回壹卷
稻舟様方御触留帳

亥七月 鳳至町役所

綱羽織・袴・半股立を取、足中二而出迎候旨、聞

合之者方申送り候間、其用意可有之、尚更前宿

之様子追而可申渡候、

一、休泊所宿為見分手代指出候間、用意出来次第

案内可有之候、

右之通被得其意、夫々指支不申様可被相心得候、

尚追々可申渡候、披見之後早々相廻シ落着方可

被相返候、以上

一度め之御触

天文方御役人今浜ニ而御手分ケ有之、外浦江者
平山郡藏殿等三人巡行、弥当十日鉄地泊り之旨
申来候間、休泊り所用意方之義、先達而申渡候
通り、夫々指支不申様可被相心得候、尚更聞合
之者指遣置候間、罷帰り次第夫々可申渡候、

一、道案内役人并先払・測量手伝人足・荷物人足
等別紙帳面之相廻候間、日限相決シ次第、休泊

り所江相詰可被申候、尤人足之義、髮・月代等
不見苦様ニ支度致相出候様、可被申渡候、

一、輪嶋大川尻仮橋弥入用之旨申来候間、夫々致
手当可被申候、

一、輪嶋・名舟二而駕籠壹挺・馬壹疋用意可被致
置候、是ハ決而入用与申ニ而者無之候得共、為貯
用可被拵置候、

一、輪嶋崎・名舟二而舟三艘宛、外でんま式艘宛
用意致可被置候、多分渚通之様子ニ相聞候間、
手入可有之候、捍立拵申ニ不申候、

一、村役人布羽織と申談候得共、口郡塵浜村役人

亥七月九日 笠原藤太

輪嶋崎・鳳至・河井・塙田・久手川・稻舟・大

野・惣領・谷内・白米・のた・名舟・尊利地・

小田屋・里・渋田

右村々肝煎・組合頭中

天文方伊能勘解由殿御越之節手配

一、先払 河井町 喜助

一、但輪嶋御泊りより真浦迄相勤可申事

一、道案内役人 河井町肝煎 弥三郎

同断

谷内村肝煎 与三右衛門

(追筆)
〔伊せや源七
善右衛門内三太
林屋七郎右衛門
△鳳至町八人
内、七郎右衛門・宗次郎・真浦迄行、
残り六人、名舟村方相帰ル、〕

(追筆)

〔追懸増し人 立野や久次郎
はなノ次助
下ノ伝九郎〕

但輪嶋方名舟村迄、

道案内役人 凤至町組合頭 佐次兵衛

輪嶋崎村組合頭 四郎兵衛

測量手伝人足 西脇村 理右衛門

谷内村 与兵衛

名舟村 清四郎

小田屋村 長次郎

測量手伝人足

西脇村 市兵衛

鳳至町 惣次郎

同町 平右衛門

輪嶋崎村 伝藏

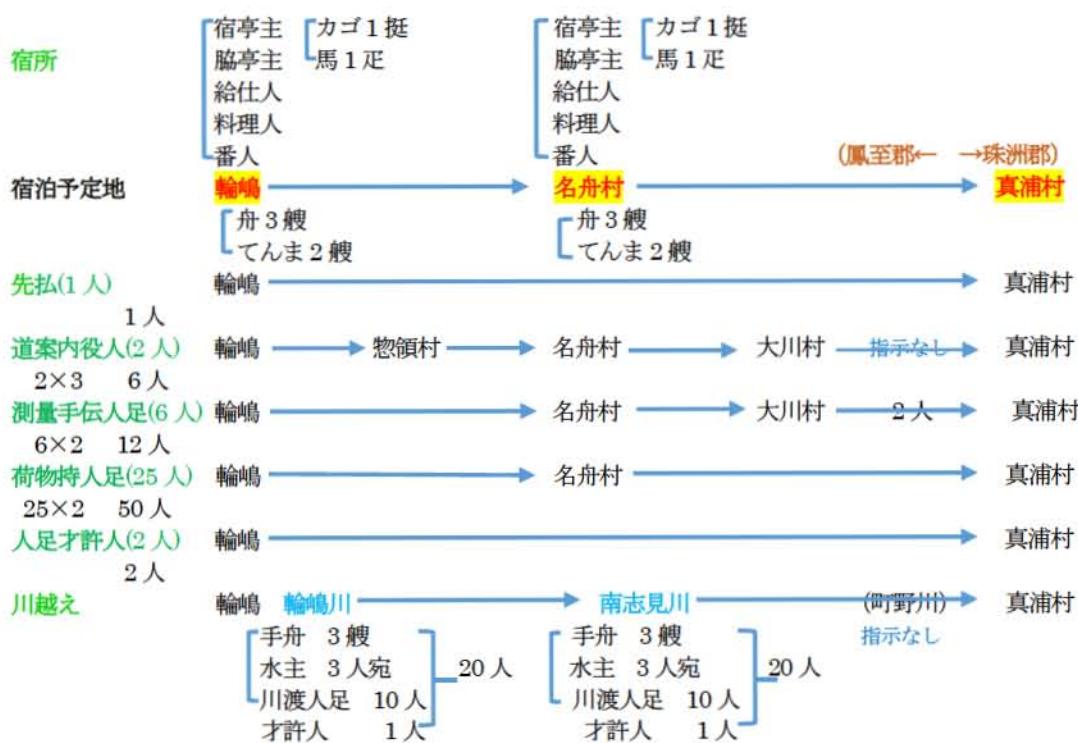
惣領村 九郎右衛門

△六人

但名舟村方大川村迄、

※「稻舟様方御触留帳」に指示された手配人足等を表にした。大川村(真

※『稻舟様方御触留帳』に指示された手配人足等を表にした。大川村・真浦村の道案内役人・測量手伝人足の手配と町野川の手舟等の手配がなしい。大川村までが加賀藩領、時国村は幕府御預地だった。ただし、測量手伝人足は2人出している。町野川は奥能登で最大の流域面積・長さを誇る川であり、『測量日記』にも、「能州一ノ川」と記されている。



さと村 名舟村 十三郎	与兵衛
但輪嶋 <small>カタツチマシ</small> 名舟村迄、 但名舟村 <small>カタマボシマチ</small> 真浦村迄、	六人
測量道具持人足 一、三人	鳳至町
但輪嶋 <small>カタツチマシ</small> 名舟村迄、 但名舟村 <small>カタマボシマチ</small> 里村	里村
輪嶋 <small>カタツチマシ</small> 名舟迄相勸可申事 輪嶋詰荷物持人足	
一、四人 一、四人 一、三人 一、四人 一、武人 一、八人 一、式拾五人	惣領村 大野村 稻舟村 久手川村 塚田村 鳳至町
内、	
拾七八人斗御役人御入用、但駕籠入用之 節者惣領村之人足を用也可申事、残り分 貯用、	
右人足才許人 塚田村 次郎左衛門 大野村 宗左衛門	
名舟 <small>カタマボシ</small> 真浦迄相勸可申事、	

名舟詰荷物持人足
一、六人
一、三人
一、四人
一、四人
内、
十七八人斗御役人御入用、
田屋村之人足ヲ出可申事、
右人足才許人 小田
尊利
(解説①)「稻舟様」とは、鳳
至郡の十村(大庄屋)笠原
家のことで、稻舟村(輪島
市稻舟町)に居を構えて、
代々「藤太」と称した。石
川県支部で数年前に跡地
を訪れたが、かつての屋
敷跡は藪となっていた。
羽咋郡塵浜辺りまで測
量隊の様子を問い合わせ
て、先払・道案内役・人足・
カゴ・馬等の手配、宿所で
の準備を進めさせていた
ことが分かる史料であ
る。





※笠原家墓地には立派な墓石が立ち並んでいたが、二〇〇七年三月の能登半島地震で倒壊し、その後復元されることなく、草に埋もれていた。

是より二度め之御触

測量御用口郡聞合并馬組取扱方之儀、廻文有之

ニ付左ニ記候事、

一、川之仮橋之様子身請候所、鉄くさり引申通筋
ニ懸不申候而者相弁シ不申、左候得者都而不手廻
之様ニ見請候ニ付、鈎地川・阿岸川者残り候故、
仮橋懸不申段、膝江懸り申川筋者舟橋と而申事
といたし候者可然段申来候、

但輪嶋川・南志見川共舟ニ而も可然哉、勘弁
可有之候、

一、手舟三艘、石碇式つ宛、慥成水主三人宛、

才許人 輪嶋崎村 藤木衛

名舟村 甚九郎

但布羽織着用、

一、惣而岩石等ニ而山道と申義者相弁シ不申、往来
難成所者舟ニ而鉄くさりを引申様子ニ候、

一、口郡ニ而者何茂相尋申儀無之、見当ニ可成高山
并村名者村毎相尋申由ニ候、

一、御通筋村毎役人相出し不申、村中締り可仕事
一、先払

但脚半・甲懸、杖を持、道案内役人ら四五拾
但脚半・甲懸、杖を持、道案内役人ら四五拾

間斗先ニ立、旅人等不作法無之様除置可申事、
一、道案内役人

但装束等、先達而之通、脇指帶可申事、
一、泊り・昼村役人

但先達而之通り、
一、宿亭主

但右同断、半股立・足中ニ而迎送共先ニ立可申
事、

一、脇亭主

但惟子袴ニ而物每相弁、慥成者相立可申事、
一、給仕人袴

一、御宿床ニ刀懸

一、かいげ新出来

一、泊所宿始終夜高灯燈

一、宿隣家店屏風廻・番人、先達而之通り、

一、御通り之節者、前江出、平伏可仕事、夜中高灯燈

一、宿駕籠式挺用意、馬者入用無之事

一、川渡人足拾人斗

一、但才許人老人、布羽織・脚半・甲懸・脇指帶可
申事、

一、測量手伝人足之儀、舟ニ而通路之所者舟ニ為乘
置可申事

一、米相場白米壹升ニ付六拾文

一、金六拾三匁四分

一、錢拾貫五百文

一、口郡直段、

但鈎地ニ而者米相場前宿直段者壹文通り高下

可仕旨申来候、

一、御宿式台前盛砂可仕事

一、御宿近辺空地之儀、平山郡藏殿手合ニ而ハ入
用無之事

一、御預地足輕宿、壹軒人数三人

五日夕 慶浜獻立

向 指身（ぼら・白藻・より天・辛子酢）
汁 すまし（巻きす・ミやうかの子）
平（玉子・あんかけ・わさび）

焼物（一塩鯛） 御飯 香之物

平（かき貝じぶ・山椒之粉） 小皿（鰯付や
き） 御めし 香之物

後席 西瓜
但式ふ□□ 如此

六日朝 同 夜食八寸二

平（かき貝じぶ・山椒之粉） 小皿（鰯付や
き） 御めし 香之物

平（かまほこ・くわい・京麸） 烧物（鰯筒
切） 香之もの

右者、鈎地村理助口郡ニ而見聞之事、右之通り
申來候間、夫々用意可有之候、尙前宿聞合帰り
次第可申渡候、披見之後早々相廻シ落着可被
相返候、以上、

笠原藤太

輪嶋崎・鳳至・河井・塙田・いな舟・大の・惣
領・谷内・白米・名舟・小田屋・里・渋田

右村々肝煎・組合頭中

申様可被相心得候、以上、
七月十日 筠原藤太

一、式つ とうひん
但式升入位茶入テ、

一、五つ 茶碗
一、壱つ 茶づき

七月六日 大念寺新村泊り

追而通筋村方江耆最寄々を以可被申伝候、以上、
河井・鳳至・惣領・名舟

外二、
一、三枚 うすまぐり

同 七日 福浦
同 八日 富木
同 九日 笹波

釣地江御移之図

(解説③) 測量の進展で、十日釣地泊の予定が縮まり黒嶋村泊になった。差支えのないように用意を。

右之通り申来候得共、七日・八日之雨天ニ而逗留難斗由、雨天或者海荒ニ而手舟立不申節者、逗留有之由、

四度め之御触

同 十一日 道下
同 十二日 皆月
同 十三日 赤崎
同 十四日 輪島
同 十五日 名舟

右之通りニ候、日限延ぢみ追而可申渡事、

一、明十一日黒嶋村出立、海辺通り致測量致し、左之泊り順ニ罷越候條、浦付之村々案内致し、御用指支無之様、且宿用意可給候、以上、

伊能勘解由門人 平山郡藏 印
七月十二日 黒嶋村
七月十三日 泊り輪島湊

右、明後十四日、天文方御役人中輪島出立、名舟迄御越被成候道中入用ニ候間、慥成人足ニ為持、右御役人之少し跡ち付添參候様ニ可被致用意候、以上、

笠原藤太
鳳至町組合頭中

(解説⑤) 現在の八月下旬の屋外作業なので、お茶と敷物を用意させた。

六度め之御触

天文方御役人只今御昼所鵜入村江着候様子ニ候間、立見遣置可被申候、尤今之内御越ニ候間、鵜入江立見可被遣候、少も油断有之間敷候、以上、

七月十三日 笠原藤太

追而申入候、右海辺通難處之義ニ候得ハ、大風雨之節測量相成兼候間、及滞留、天気次第出立いたし候、以上、

両町肝煎・組合頭中

(解説⑥) 支隊の平山郡藏からの泊触である。予定より一日ずつ早まっている。
相場や金錢の相場にも触れている。また、宿泊にかかる米の

三度め之御触

測量方御役人、今十日釣地星、黒嶋泊ニ相成、一日ぢ々まり申旨申来候間、夫々用意方指支不

五度め之御触
覚

(七度め之御触)
申談御用有之候間、此状着次第早速拙子旅宿迄可

被罷出候、披見後可被相返候、以上、

七月十三日

稻舟 藤太

鳳至・輪嶋湊

右村々肝煎・組合頭中

追而両所共組合頭之内壱人可被罷出候、以上、

おわりに

(解説⑦) 申し伝えたいことがあるので、この書状受け取り次第すぐに、私の宿所まで来るよう。笠原藤太の宿所、伝えたい内容は不明である。

加賀藩は「百姓身分」の伊能忠敬に対しても「軽き扱い」で良しとして、藩士はもちろん十村も挨拶に出さなかつた。しかし、十村たちは宿所に出入りして、自ら測量隊の言動を掌握し、案内役の村役人たちに細かい指図を出してはいた。

(八度め之御触)

天文方御役人弥明十五日朝七つ半輪嶋町御出立候間、兼而申渡置候通り、夫々懸り合之人々輪嶋町止宿角太兵衛方迄、無油断為相揃可被申候、一、先達而申渡置候役付之人々、是又七つ半為揃可被申候、披見之後先々急速相廻シ留可被相返候、

七月十四日申刻

稻舟村 藤太

塙田・河井・鳳至・海士・輪嶋崎

メ 右村々肝煎・組合頭中

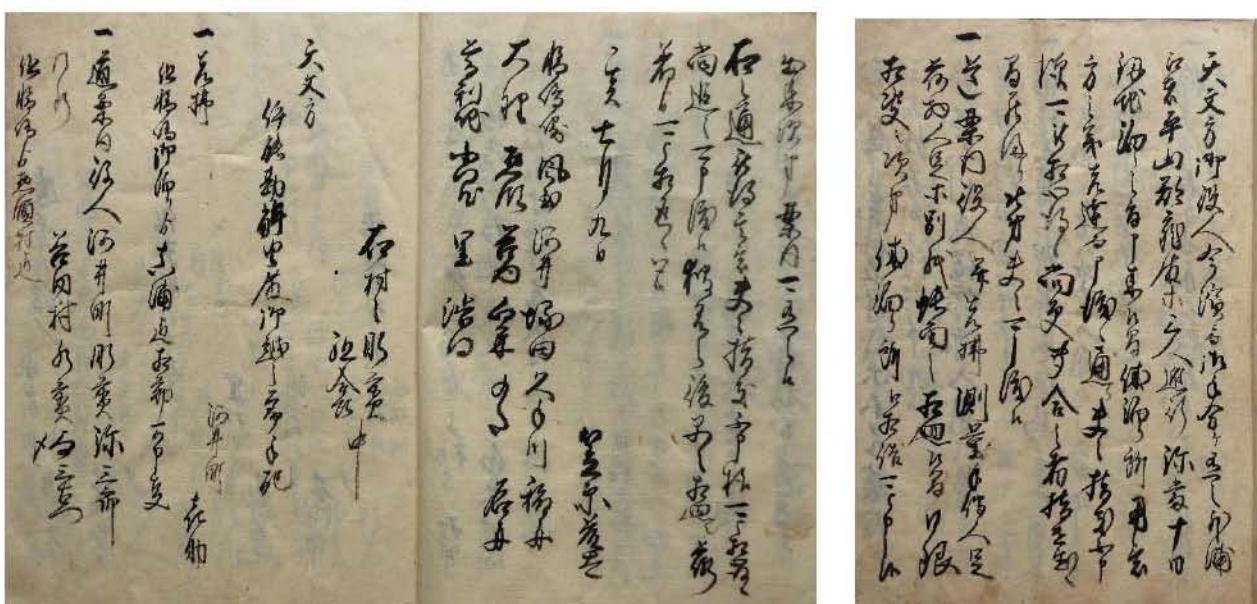
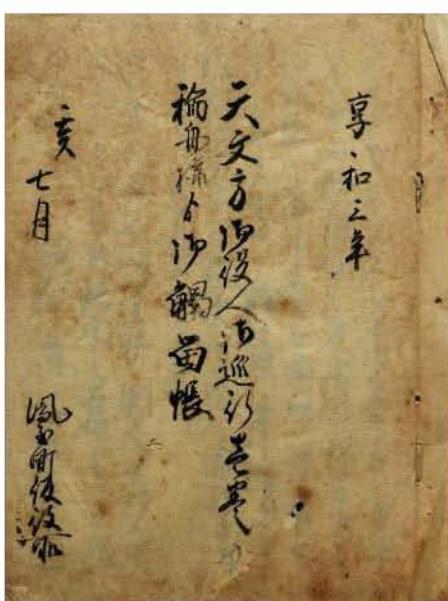
追而輪嶋崎江申入候手舟用意可有之候、兼而申渡し置候通り、少も油断有之間敷候、以上、

(解説⑧) いよいよ明十五日七つ半(五時頃)、測量隊は輪嶋を出立するので、係りは止宿先の角太

兵衛方に出来たように、先達で申し渡した役付きの人々も七つ半に揃うこと。少しも油断があつてはならない。

今回の史料は『加能史料研究』5号(一九九三年)に紹介したのだが、改めて人足の手配状況などを分析してみた。輪島市河井町から珠洲市真浦町までおよそ二〇キロメートル、丸一日間の測量に、延べ九〇人が配置された。「貯用」人足や手舟の用意など、実際は使用されなかつたものもあつた。しかし、十村は手落ちがないように万全の準備をし、何度も何度も御触を出して「油断なきよう」と念押している。残念なのは、測量後の報告書がないことである。

あんなに緊迫して準備したからには、測量作業は万事スムーズに進行し、引き継ぎの真浦村では若干の感謝の言葉もいただいたと思いたい。



「天文方御役人御巡回表卷 稲舟様方御触留帳(部分)」(輪島市住吉神社文書 撮影:室山孝氏)

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二十二回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第八次測量】(九州第二次)久留米・島原 自文化9年10月10日 至 文化9年11月10日

宿泊日・旧暦 文化9年10月 (1812)	(西暦) (1812)	宿泊地		現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
		11 *	10 *				
止宿中食 【支隊】	(14)	小休	小休	【支隊】	【支隊】昼休	(13)	上野町
福嶋村宮野町	上佐木村	横溝町	小犬塚村字新茶屋	盛徳村	相川村		
同 八女市	同 大木町	同 大木町	同 久留米市	同 築後市	同 久留米市		
油屋助七 大庄屋才助	大庄屋富松善右衛門	源助	折助	文藏	伊八	田川儀七	
薩摩街道盛徳村、福嶋街道追分繫石より 石人入口を歴て石人前まで測る。入口よ り前津村、鴻ノ池村字庚申堂、福嶋村古 松町を歴て矢部道を宮野町を歴て唐人 町人家限りに打止。古松町より花宗川を 渡り酒井田村を歴て柳瀬村界川、本名川を 部川を渡り北田村境まで測る。	上野町制札より田川村字田川町の右七 町、高三瀬村庄屋茂一郎、比翼鳥鳳鳥所持 町、横溝村、八町牟田町、上木佐木村止 宿入口を歴て測所打止。	津福村界より国分寺村字八軒屋を歴て 上津荒木村字二軒茶屋久留米街道恵比 須石まで測る。それより無測 覧。	大隈村より柳川街道測、津福村、安武本 村、大善寺村字橋本を歴て高良玉垂社へ 打上、宮本川神幸橋渡、橋杭石柱一本、 傘橋といふ。石華表惣門、樓門まで測。字 橋本より上野町制札を歴て測所打上。そ れより無測一里余行、長峰石人石櫃一 覧。	一八八	一八八	一八八	一八八
一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八

14			13 *	12 *	(西暦) (15)	宿泊日・旧暦
(17)	昼休	小休	(16)	【支隊】		宿泊地
柳川城下瀬高町二丁目	北町	新船津町	柳川城下瀬高町二丁目	瀬高町	小保町	現・市町村名
同 柳川市	同 柳川市	同 柳川市	同 柳川市	同 瀬高町	同 大川市	宿泊宅
本陣別当相浦専内 用聞古賀茂三郎 油屋伊三郎 用聞古賀茂三郎 本陣別當相浦専内	用達堤九左衛門	別當中村元藏	本陣別當相浦専内 用聞古賀茂三郎 油屋伊三郎	鐵屋茂治平 平島屋喜惣右衛門	別當吉原正右衛門 一向宗淨福寺	特記・天体観測
渡、矢留町、市中池ノ端組南町、吉富村、よ り北町制札前に終る。それより無測。	沖端道を枝光村、古賀村界に打止。古賀村より字孫六 町逗留測。瀬高門前より柳川市中測、新 橋手前まで測る。辻町より中町を歴て上 町木戸、井手橋渡繋ぐ。新船津町木戸にて 分碑より下久末村字三津橋、下百町村を 歴て藤吉村柳川城門、瀬高門口に打止。 恒星測定。	一木村枝新田より川縁に添、小保村住吉 町を歴て住吉渡、石塚渡。住吉町より小 保町止宿測所を歴て幡保村茶屋に繋ぎ 終る、それより無測にて柳川城下。 【支隊】瀬高町上庄村字出口柳川街道追 跡。木戸、井手橋渡繋ぐ。新船津町木戸にて 打止。	界川端より山下町、小田村、本吉村を歴 て清水観音打上。本吉村より朝日村を歴 て薩摩街道上小川村追分碑に繋ぐ。それ より無測。	上木佐木村止宿入口より牟田口村字金 屋町、矢加部村を歴て柳川村外町井手ノ 橋に繋ぎ新船津町木戸、枝光村字三軒 屋、大坂井村を歴て幡保村茶屋打止、そ れより無測にて小保町。恒星測定。	大図番号	
一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	

宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
19	18	17*	(20) 大野嶋村	庄屋幸治	
(22) 諸富津	(21) 小保町	昼休	【支隊】昼休 深倉村 南新開村新田	百姓孫次 定右衛門 一向宗円光寺	
佐賀県佐賀市	同 大川市	同 大川市	同 大牟田市 みやま市	大牟田市海辺より大牟田川尻を歴て御料所柳川領界土橋まで打上げ。大牟田川尻より深倉村、黒崎村を歴て南新開村新田堤まで測。	
本陣大和屋善兵衛 紀伊国屋半兵衛 大和屋兵十 大和屋兵十	別当吉原正右衛門 一向宗小保山淨福寺	百姓六郎治	柳川領大野嶋村、佐嘉領大詫間村界より左周、止宿入口を歴て測所打上。また止宿入口より柳川領佐嘉領界まで測。それより乗船。恒星測定【支隊】南新開村中嶋川新田堤より江浦村を歴て嶋堀切村中嶋川新渡口に繋ぎ終る。それより無測。	浜武村枝南分字海道沿海より久々原村、木村枝紅粉開を歴て枝新田番所に繋ぎ終る。無測にて大野嶋へ渡る。恒星測定。	
【後手】住吉町石塚渡より筑後川測。小保川を斜めに渡り向嶋村を歴て若津町へ打上る、向嶋村より筑後川一流になる所の先にて打止る。それより大中嶋へ渡り一周を測る。それより乗船。【先手】石塚渡口船番測遠旗印より諸富村止宿測所前を歴て大堂村佐賀江川舟渡、蓮池町を歴て神崎町通曲角に終る。恒星測定。		一八八	一八八	一八八	一八八

										宿泊日・旧暦 （西暦）
										宿泊地
										現・市町村名
23 *		22		21		20		【後手】昼夜 （23）		宿泊宅
支隊	(26)	昼夜	(25)	【先手】昼夜	(24)	早津江村	(23)	大多久間村	同佐賀市	伊助
郷司給村枝住江分	六角中郷村字六角町	山口村枝郷松	快方村枝久富	本庄町	住吉村	早津江村	大多久間村	島、肥前大詫間界より左周、同断国界に繋ぐ。 塚村、寺井村字浮盃を歴て用水川端を寺井本村へ打上、又川尻へ出。即用水巾十里渦にて渡り兼測遠術にて求む。それより枝弟子丸を歴て早津江村止宿測所迄打上。それより崎ヶ江村船渡場打留。恒星測定。	同佐賀市	同佐賀市
同小城市	同白石町	同江北町	同佐賀市	同佐賀市	同佐賀市	同佐賀市	同佐賀市	同佐賀市	同佐賀市	同佐賀市
百姓松兵衛 右衛門	本陣七兵衛 三郎兵衛	九兵衛	利助右衛門 八右衛門 十右衛門	本陣治右衛門	喜右衛門	本陣平治兵衛 清右衛門 利右衛門	本陣勝之丞 善治郎 貞兵衛	伊助		特記・天体観測
恒安村より永田ケ里村枝住江分六角道追分、住江川 繋ぐ。	前より下小田村枝仏津、六角川舟渡中郷 村に繋ぎ六角中郷村字六角町止宿前迄測る。恒星測定。	郷司給村枝住江人家前六角川海辺川堤 追分より川堤通を大戸村字深通を歴て 中郷村地先六角通多良越長崎街道迄測 る。伊万里六角追分、山口村枝郷松人 家前迄測定。	【後手】下飯盛村大野村界より高太郎 村、今津川尻を歴て高太郎村中原村界に 繋ぐ。それより嘉瀬川尻渡、快方村、恒 安村を歴て快方村枝久富止宿前迄測る。 【先手】高太郎村中原村界今津川本庄江 端より中原村枝新村、有重村枝徳善院、 本庄川渡を歴て佐嘉城下市中、長瀬町長 崎街道繋置石迄測る。恒星測定。	【後手】崎ヶ江村渡場より犬井道村を歴 て犬井道村小篠村界迄測る。【先手】犬 宿打上測所迄測る。止宿入口より下飯盛 村大野村界迄測る。恒星測定。	【後手】下飯盛村大野村界より高太郎 村、今津川尻を歴て高太郎村中原村界に 繋ぐ。それより嘉瀬川尻渡、快方村、恒 安村を歴て快方村枝久富止宿前迄測る。 【先手】高太郎村中原村界今津川本庄江 端より中原村枝新村、有重村枝徳善院、 本庄川渡を歴て佐嘉城下市中、長瀬町長 崎街道繋置石迄測る。恒星測定。	【後手】崎ヶ江村渡場より犬井道村を歴 て犬井道村小篠村界より下飯盛村を歴て止 宿打上測所迄測る。止宿入口より下飯盛 村大野村界迄測る。恒星測定。	【後手】乘船大多久間島へ渡、筑後大野 島、肥前大詫間界より左周、同断国界に 繋ぐ。 塚村、寺井村字浮盃を歴て用水川端を寺 井本村へ打上、又川尻へ出。即用水巾十 里渦にて渡り兼測遠術にて求む。それよ り枝弟子丸を歴て早津江村止宿測所迄 打上。それより崎ヶ江村船渡場打留。恒 星測定。	島、肥前大詫間界より左周、同断国界に 繋ぐ。 塚村、寺井村字浮盃を歴て用水川端を寺 井本村へ打上、又川尻へ出。即用水巾十 里渦にて渡り兼測遠術にて求む。それよ り枝弟子丸を歴て早津江村止宿測所迄 打上。それより崎ヶ江村船渡場打留。恒 星測定。	島、肥前大詫間界より左周、同断国界に 繋ぐ。 塚村、寺井村字浮盃を歴て用水川端を寺 井本村へ打上、又川尻へ出。即用水巾十 里渦にて渡り兼測遠術にて求む。それよ り枝弟子丸を歴て早津江村止宿測所迄 打上。それより崎ヶ江村船渡場打留。恒 星測定。	島、肥前大詫間界より左周、同断国界に 繋ぐ。 塚村、寺井村字浮盃を歴て用水川端を寺 井本村へ打上、又川尻へ出。即用水巾十 里渦にて渡り兼測遠術にて求む。それよ り枝弟子丸を歴て早津江村止宿測所迄 打上。それより崎ヶ江村船渡場打留。恒 星測定。
一九〇	一九〇	一九〇	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	大図番号

26	25	24*	宿泊日・旧暦 (西暦)
(29) 音成浦村	(28) 鹿島村	昼夜 【支隊】 塩田町枝原町 築切村	宿泊地
同 鹿島市	同 鹿島市	同 嬉野市 同 白石町	現・市町村名
百姓太兵衛 与右衛門 百姓太兵衛	本陣徳人屋忠右衛門 諸國屋茂平 小間物屋庄五郎	徳兵衛 百姓庄太郎 太平治	宿泊宅
<p>【後手】鹿島村止宿入口より横沢川、中牟田村、馬渡分村を歴て浜町、浜川尻迄測る。此より沿海、西葉浦村、塩屋浦村を歴て音成浦村海辺堤に打止。 <small>【先手】</small>深浦村塩田川手前より塩田川を渡り井手方村、小船津村横沢川渡、神水川板橋を歴て八木本村、浜川渡、浜町街道に繋ぎ終る。御用状佐嘉より相届。</p>	<p>室島村止宿前より室島峠、深浦村枝百貫川堤脇を歴て枝長浜郡界塩田川舟渡、土井丸村字殿橋、塩田鹿島追分を歴て塩田道を塩田町枝原町の三辻、塩田嬉野街道追分迄測る。又字殿橋より鹿島村止宿入口を歴て止宿打上。 <small>【支隊】</small>築切村海辺より戸ヶ里村廻里川を渡り室島村王を歴て深浦村塩田川手前沿海内止。それより塩田川縁を深浦番所字百貫、街道に繋ぎ終る。恒星測定。</p>	<p>六角道追分より沿海順測、二十路村を歴て築切村海辺迄測る。</p>	<p>六角町止宿前より吉村、辺田村を歴て稻佐神社へ打上る。辺田村より古賀村枝今橋を歴て室島村止宿前迄測る。恒星測定。</p>
二〇一	一九〇	一九〇	大図番号

30 *			29 *			28 *			27			宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号			
【支隊】	【支隊】昼休	【支隊】小休	(3)	【支隊】	(2)	【支隊】	亀浦村	田古里村枝津ノ浦	亀ノ浦	【支隊】昼休	(12. 1)	北多良村	利右衛門	百姓太兵衛	百姓太兵衛門	要八				
湯江村	長里村	小河原浦村女島	田古里村枝津浦	小河原浦村	長崎県諫早市	同 太良町	同 太良町	同 太良町	同 太良町	同 太良町	同 太良町	本陣江右衛門	音成浦村土手より矢ノ浦村、飯田村、北多良村枝谷分止宿測所を歴て南多良村迄測る。恒星測定。	音成浦村	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号	
同 講早市	同 講早市	長崎県諫早市	佐賀県太良町	長崎県諫早市	同 太良町	同 太良町	百姓丈太夫	百姓佐兵衛	百姓貞吉 宅助	百姓九郎助	百姓丈太夫	利右衛門	音成浦より道法凡六里無測。	雨天逗留。						
五郎兵衛門 治郎右衛門	阿蘇社拝殿	女島大明神拝殿	本陣貞吉 宅助	次兵衛	田古里村枝今里より遠武村字釜分、井崎 村枝築切兎島渡口を歴て兎島に渡り一 周測。又渡口より小河原浦村迄測る。 前より枝今里に繋ぎ止宿打上。恒星測定。	亀ノ浦村打止より田古里村浅宮社前迄 測る。此より竹島へ渡り一周測。浅宮社前迄 止。入口より測所打上。恒星測定。	音成浦より道法凡六里無測。													
湯江村 湯江川尻渡り打止。	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	汐入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て	小河原浦村より長里村枝河内、河内川尻 を歴て入渡り金崎村、宇良村宇良川尻を歴 て
一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一		

												宿泊日・旧暦 (文化9年11月) (西暦) (1812)	
										宿泊地 現・市町村名 宿泊宅		特記・天体観測 大図番号	
4		3		2		1	*			長崎県諫早市	百姓五郎兵衛		
(7)	【先手】昼夜休	(6)	昼夜休	(5)	【支隊】昼夜休	昼夜休	【支隊】昼夜休	(12.4)	昼夜休	湯江村	百姓太治兵衛		
愛津村	森山村枝田尻	森山村枝唐津 枝田尻	伊牟田村	諫早町田町	栄昌宿	船越村枝梅津	西長田村字宿分	深海村	東長田村枝正久寺	長崎県諫早市	百姓文左衛門	会所預庄屋喜右衛門	
同 雲仙市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	同 諫早市	長崎県諫早市	百姓文左衛門	百姓太治兵衛	
本陣庄屋深浦九郎左 衛門	百姓清次	百姓富蔵 百姓九兵衛 百姓九兵衛 隱居	本陣百姓和七	百姓清四郎	酒屋藤兵衛	酒屋宇兵衛	酒屋市兵衛	源右衛門	正左衛門	湯江村より小江村枝打越、大田尾村字観 音崎、深海村、東長田村枝正久寺を歴て 西長田村字宿分迄測る。	西長田村字宿分迄測る。	四里余無測。恒星測定。	
後手】川床村打止より有喜村諫早長崎 街道追分を歴て唐比村それより愛津村 にて海辺街道と合測。是より沿海愛津村 内字土井を歴て止宿へ打上、また西海辺村 へ横切、字釜床に打止。【先手】井牟田村 渡り愛津村にて合測。島原領主より被贈 より森山村枝田尻を歴て枝唐津、板谷川 国産持参。恒星測定	【後手】松原にて大雨に付打止。【先手】川内町不 止打留。村小野村界より伊牟田村内にて大雨不 止打留。	【後手】船越村枝梅津人家前より川床村 にて大雨に付打止。【先手】川内町不 止打留。	無測一里半、小野村河内町村界海辺より 繋ぐ。又船越村枝梅津より諫早町入口を 歴て田町止宿へ打上、入口より新町三ツ 辻にて合測。【支隊】西長田村枝宿分よ り小豆崎村迄沿海、本明川尻渡り打止。 又小豆崎村より本明川縁打上。諫早岡 町、栄昌道島原道追分を歴て栄昌道を栄 田村枝栄昌宿、長崎街道大村街道追分 迄測る。栄昌道島原道追分より島原道を 本明川を渡り下町三辻を歴て新町にて手 て合測。本明川を渡り下町三辻を歴て新町にて手 て合測。	二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一									
二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	二〇一	

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測								
					【後手】昼休	【先手】昼休	【後手】小休	【先手】小休	【後手】昼休	【先手】昼休	【後手】昼休	【先手】昼休	
7	6	5											
(10)	【後手】昼休	(8)	【後手】小休	【先手】小休	【後手】昼休	【先手】昼休	【後手】小休	【先手】小休	【後手】昼休	【先手】昼休	【後手】昼休	【先手】昼休	
島原城下古町内堀町 内中町	島原村今村名字新湊	島原城下古町内堀町 内中町	三会村中原名	湯江本村池田名	神代町	西郷村栗林名	伊福村枝松江名	山田村牛口名	同	雲仙市	同	雲仙市	同
同 島原市	同 島原市	同 島原市	同 島原市	同 島原市	同 島原市	同 雲仙市	同 雲仙市	同 雲仙市	同	雲仙市	同	雲仙市	同
町乙名木田伝左衛門 本陣町年寄中村孫右 衛門 町乙名古賀源左衛門 木田伝左衛門	船問屋若松屋政治郎	町乙名古賀源左衛門 木田伝左衛門	庄屋出田栄五郎 本陣町年寄中村孫右	庄屋菅宗之允 本陣町年寄中村孫右	別当半之丞	庄屋宮崎五兵衛	庄屋本多権右衛門	林田唯武					
逗留測。【後手】門谷他3名 宇下町より海辺市中追分を歴て有馬町 内新町大手前に至。それより止宿本陣測 所前に至り三ツ辻を歴て今村名字湊船着 場に至る。今村名は大変に人家損亡、此 湊は新に人家出来なり。字湊より沿海測 字新湊迄測る。又字湊より沿海逆測、島 渡口を歴て汐入橋を渡り有馬町内船津 人家前に打止。それより汐入測量、汐入 橋奥より手前に繋終る。 【先手】永井他3名 島、馬島、恵美須島、平島、岡高山 島、島中島、一小島渡 周測。それより乗船帰宿。恒星測定。	【後手】西郷村字土井口より野井村枝船 津名を歴て山田村枝牛口名字船津に繋 ぐ。それより三ツ島へ渡海、大島、中島、 沖島を測る。【先手】枝牛口名字船津よ り夏峰村枝サヤ崎、伊福村枝松江名、西 村字船津を歴て止宿打上。恒星測定。												
一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六

土佐の伊能測量1 甲浦～赤岡編

福田仁

測量協力者の子孫だった！

「うちの（）先祖の家に、伊能忠敬が泊まつたらしいよ」

親戚筋から、そんな話を聞いたのは3年前。笑つて聞き流したが、少しだけ気になつて後日、ネットをのぞいた。「伊能忠敬 e 史料館」で検索したら、本当に先祖の名前が出てきたので驚いた。筆者の母方は「上岡（かみおか）」姓。土佐の西端に近い大津村（現土佐清水市大津）の上岡庄屋から江戸期に分家した。元タレントの上岡龍太郎氏も同族である。

忠敬の大津宿泊は文化5（1808）年6月8日。忠敬日記には「本陣＝大津郷浦庄屋代、上岡弁之丞」と記されている。上岡庄屋本家に問い合わせたところ、伊能隊受け入れに関する言い伝えは皆無だった。筆者は「高知新聞」に勤務。歴史に関して全くの素人だが、わが先祖とのつながりに深く思いをはせ、忠敬没後200年を迎えた昨年、一連の企画を紙面で展開した。第1弾で伊能隊の宿泊先一覧を掲載。この後、読者から「一覧表にある○○屋は、わが家の屋号」「△△庄屋は、うちの先祖です」など、さまざまなお話を頂くこととなつた。

企画のメインとなる連載「伊能図を巡る」（全8回、5～12月）では、東洋町から宿毛市まで、土佐における伊能隊の全宿泊先を回つた。

測線、つまり海岸線を厳密にたどることは現実的に不可能なので、「自転車を利用し、最も海岸寄りの舗装路を走行する」ことを原則とした。

8回とも見開き連続2ページ（ワイド版）の中央に伊能図（大図、中図）を大きく据えた。

「大図」は「InoPedia をつくる会」が作製した「平成の復元伊能大図」を提供していただきた。「中図」は許可手続きを行い、徳島大学附属図書館の「大日本沿海図稿 南海」を掲載。同図書館ホームページでは、その「高精細」画像データを無料で公開している。本稿を読み進めるに当たつて、パソコンやスマートホンで同図をご覧いただければ、四国の地理の概要をご理解いただけるかと思う。

忠敬の名前は、もちろん高知県内でも広く知られている。ただ一般的に、彼の業績に関する知識は、教科書に記述されたわずか数行の範囲を出ない。かくいう筆者も3年前までそうだった。紙面をみた読者からは「伊能図がこれほど美しいものだったとは」「歴史に残る測量と天体観測が、私の自宅近くでも行われた事実を知り感動した」「江戸時代を身近に感じた」といった反響が寄せられた。

土佐の伊能測量については、忠敬本人の日記のほか、測量隊員の柴山伝左衛門、伊能隊に随行した土佐藩役人、奥宮正樹の日記が残されてい。3人はほぼ同じ行程をたどりながら、視点が微妙に異なるところが面白い。読み比べることによって、土佐の伊能測量が立体的に浮かび上がる。



本陣となった「超願寺」



「東股番所」跡の碑

作の旗をリュックに張り付けて、東から西へ。走行距離は、通算でおよそ720kmに達した。

【東洋町】

徳島との県境を高知県側へ越えると、東洋町甲浦（かんのうら）の小さな港町に出る。忠敬が土佐入りした文化5年4月19日の日記に「土州（土佐）の入口番所の地を甲ノ浦の東股と云」と記した。その跡地に今日、「甲浦東股番所跡」の碑がある。

忠敬日記によると甲浦での本陣は「超願寺」で、「この夜曇る。雲間に測る」とある。南に開けた小さな谷間に、今は無人のお堂と墓地があるのみ。すぐ東に脇宿

の「万福寺」があり、住職にお聞きしたが、歴史的な経緯については詳細不明のこと。郷土史家、原田英祐さん（東洋町野根）によると、これら2寺の位置は、伊能測量の時代から変わっていないとみられる。

土佐藩役人、奥宮正樹の日記（4月3日）には、「この度測量の用にてつかはるる人足四百人ばかり」が甲浦西方の河内村に派遣され待機したとある。測量隊受け入れの規模の一端が分かる。

土佐に入った伊能隊は、

まず甲浦で1泊。翌4月20日朝から測量に取りかかり、間もなくトラブルが発生する。以下、奥宮日記を現代語訳した。

野部（のぶ）の鼻で、測量隊の人々が、われわれ土佐藩の役人に對して激怒した。「これは幕府直轄事業である。事前に通達しておいたのに、測量用の道を付けていないのはなぜか？ これでは先に進めない」。われわれは説明を試みた。「このような（海岸線ぎりぎりで険しい）場所を通行なさるとは予想もできず、道はこちら側（陸寄り）に設けてあります」

原田さんが、野部の鼻に案内してくれた。南の国道脇から海岸に降りる小道があるが、少し進めば岩だらけで、もう先に進めない。



ゴロゴロ海岸のゴロゴロ石



「海の駅」から望む「野部の鼻」

甲浦—室戸間の国道55号は、おおむね直線的に海岸に沿っている。原田さんによると、昔の道は、海岸からいったん海と逆方向の谷沿いに上り、そこから別の谷に降りるといった、迂回（うかい）を重ねるルートが多かったという。それほど急傾斜なのだ。国道を自転車で走行すると、右手に連なる急傾斜の山地が、左手の海へ「すとん」と落ちていく印象を

受ける。

東洋町野根の海岸沿いに、「ゴロゴロ」という地名がある。周辺に人家はない。国道脇に、お遍路さんらが利用する「ゴロゴロ休憩所」がある。再び奥宮日記より引用する。

「ころころ石」など、あやしき名つきたる地もあり。鞠（まり）の大ささした丸石（まるいし）の、波に磨かれて、いと美しきが、差し引き波に鳴る音の「ころころ」という。

忠敬も目にしたはずの「ゴロゴロ石」は、現在の海岸でも数多くみられる。摩耗が進んで昔よりは幾分、小さくなつたのだろうか？ 周辺を自転車で走行中、左下、つまり海岸からかすかに地鳴りのような重低音が聞こえた。のぞき込むと、波打ち際の「ころころ石」が「差し引き波に鳴る音」なのだった。

野根の宿泊先は忠敬日記によると本陣「五郎左衛門」、脇「忠三郎」。地元では本陣「野根郷庄屋・川村家」、脇宿「野根浦庄屋・安岡家」との言い伝えがある。川村家は現在の野根郵便局、安岡家は隣接する野根地区公民館の位置にそれぞれあつた。



ゴロゴロ海岸を通る国道55号

【室戸市】

佐喜浜（現室戸市佐喜浜町）での伊能隊の宿泊先は、忠敬隊の宿泊先とも「井筒屋」。

一方、奥宮日記には「御泊り大庄屋・寺田六兵衛」とある。



室戸・佐喜浜の「緯度観測之処」石碑

羽根（はね）現室戸市羽根町）の止宿は「代増屋（よますや）」。紙面をみた子孫の松本博子さん（同町）から連絡を頂いた。「土

に入った小道の脇に、昭和52年に建てられた「伊能忠敬緯度観測之処」の石碑がある。位置は、寺田庄屋の敷地入り口。5月3日の忠敬日記の記述から、寺田庄屋（六郎右衛門）はここ佐喜浜から高知城下まで長期にわたり「付添案内」を務めたことが分かる。

伊能隊は、土佐入り初日に藩役人から「土佐国海辺測量險難の儀」を告げられた。筆者は今回の寄稿に当たり、徳島県側の一部（伊座利—宍喰）を車で通行した。地形は急峻かつ複雑に入り組んでおり、「險難」の度合いは土佐の東海岸（甲浦—室戸岬）を上回る。島々も多い。伊能隊はこうした阿波の難所を次々と越え、雨にも苦しめられた末に土佐に入った。慣れない土佐藩側の対応に、つい、いらだつたのだろうか。なお奥宮ら現場の献身的な対応によって、以後の土佐測量はおおむね円滑に進んでいる。

室戸岬から西は、山地と海岸の間に平地があり、地形的な様相はそれまでとは違つてくる。室津の本陣「津照寺（しんしょうじ）」は四国靈場第25番札所。甲浦—高知間の伊能測量ルートは、おおざつぱにいって

「四国八十八カ所」

の遍路道とほぼ重なつていて。

羽根（はね）現室戸市羽根町）の止宿は「代増屋（よますや）」。紙面を

佐藩主や伊能忠敬が宿泊した家だと、幼少時に聞かされました。やつぱり母が言つてた通り」。松本邸は地区で最も大きかつたが、昭和36年の台風で高波をかぶつて流失し、同じ場所で建て替えられたという。羽根村史は松本家について「代増屋と号し回船を持ち、豊富な木材を上方に運んでおり…」と記している。



「岡御殿」の裏庭

【田野町・安芸市】

田野の本陣・脇宿は岡家。今日、岡邸は「岡御殿」として知られる観光スポットで、内部の見学も可能。現存の建物は伊能測量の36年後に建て替えられた。

郷土史家、山本武雄さん（室戸市羽根町）が「土佐史談」219号（平成14年）で紹介した、「北川西谷村名本新井来助日記」を以下に引用させていただく。

海の際へ六十間あるといふ紐を引き、所々へ印の竹を立て、何やらいう事分からず、合点いかず。夜は米屋（岡家の屋号）の裏庭にて台をすへて北の星を見る。誰も合点いかず。これは日本の地図を見て絵図を書くこととなり（文字を一部読みやすく改変）

ここ岡邸で、伊能隊は天測を公開した。近隣から集まつた人々は興味津々で見守つたが、忠敬らが手際よく進める作業の意味については、さっぱり理解できなかつた。土佐のあちこちで、また全国で、このような光景がみられたのだろうか。

【香南市】
手結（てい）周辺（香南市夜須町）では、忠敬と地元勢の何気ない問答から、藩上層部を動かす「アワビ騒動」に発展した。藩の機密

藤純子さん（同市本町2丁目）から「升屋はうちの屋号です」と連絡をいたしました。伊能隊受け入れについては言い伝えがなく、高知新聞の企画で初めて知ったという。升屋は酒造業で栄えた。本町1丁目の「スウェイングビル」を含む広大な一画が、かつて升屋の敷地だった。現存する蔵の一つは、伊能測量の時代には既に存在していたのではないか、と須藤さんは推測する。隣接する蔵は老朽化が著しく近年、解体された。その際に発見された棟札に「享和元年」と書かれていた。つまり伊能隊が通過した時には築7年で存在した。須藤さんが案内してくれた淨貞寺（同市西浜）の墓石には「須藤幸平」とあり、文政4（1821）年に60歳で死去。「升屋幸平」と同一人物とみられる。升屋の酒の銘柄は「松がゑ」。安芸出身の三菱財閥創業者、あの岩崎弥太郎も愛飲したという。



「享和元年」と書かれた棟札



升屋の現存する蔵

安芸（安喜）の脇宿は「升屋幸平」。子孫の須藤純子さん（同市本町2丁目）から「升屋はうちの屋号です」と連絡をいたしました。伊能隊受け入れについては言い伝えがなく、高知新聞の企画で初めて知ったという。

升屋は酒造業で栄えた。本町1丁目の「スウェイングビル」を含む広大な一画が、かつて升屋の敷地だった。現存する蔵の一つは、伊能測量の時代には既に存在していたのではないか、と須藤さんは推測する。隣接する蔵は老朽化が著しく近年、解体された。その際に発見された棟札に「享和元（1801）年」と書かれていた。つまり伊能隊が通過した時には築7年で存在した。須藤さんは案内してくれた淨貞寺（同市西浜）の墓石には「須藤幸平」とあり、文政4（1821）年に60歳で死去。「升屋幸平」と同一人物とみられる。升屋の酒の銘柄は「松がゑ」。安芸出身の三菱財閥創業者、あの岩崎弥太郎も愛飲したという。



伊能測量の旧記念碑があった場



赤岡の本陣「長木屋」

赤岡（香南市）での本陣・脇宿は「長木屋」。ろうそくの製造販売で栄えた。子孫の池田亞弥香さん一家では、忠敬宿泊について代々語り継いできた。忠敬が泊まつたと思われる古い建物は、40年近く前に撤去したという。旧街道に面して現存する建物は、築250～260年と伝わる。伊能測量当時には既に存在したようだ。今日の赤岡の景観を象徴する、重厚な建築物だ。赤岡小学校の南に、香南市教委が平成19年に設置した「伊能忠敬緯度観測記念碑」がある。赤岡町史によると、もとは道路を隔てた東側に、測量地を示す「標準点石」（青石）が置かれていた。明治末、全国測量を実施した陸軍が青石の代わりに御影石を設置。それが戦後の道路舗装の際に撤去され、行方が分からなくなつた。伊能隊に関連する高知県内の石碑は室戸・佐喜浜と、こ

事項を含め、伊能測量の裏話が充実しているのも、奥宮日記の魅力だ。アワビ騒動については、後の回で詳しく触れるにしよう。

なお奥宮日記は高知市の大久保朝子氏らが翻刻され戸村茂昭氏が84、86号で全文を紹介

こ赤岡の2カ所である。

町史によると、伊能

隊の「従者」が「平島屋」

に分宿した。詩人で郷

土史に詳しい野村土佐

夫さんによると、平島

屋は地元住民の間で

「伊能隊ゆかりの旅館」

として知られていたが、

昭和50年ごろ取り壊さ



赤岡「平島屋」の跡地。

れた。

近所の「こんなにやく屋の登志（とし）おばば」
（明治生まれ、故人）から、野村さんはこんな話を聞いた。

「浦人たちが珍しがって、（伊能隊の）後について
て行つた」「平島屋に見物人が集まつた」「（器具類
を）運搬してくれと頼まれたので、皆で面白がつ
て運んだ」

野村さんによると、西へ約3キロ離れた物部
(ものべ)川の河口まで、赤岡の住民たちが伊能
隊の後を付けたという話も伝わっている。野村さ
んは「昔の人の話やき、確証はない。けんど赤岡
では、そんなことが言い伝えられてきた。浦人は
伊能忠敬が何者かも知らんが、なにさま測量が珍
しかつたがじやろう」と推し量る。

伊能測量に関する地元側の記録や言い伝えは、
高知県に関しては（奥宮日記は別格として）意外
に少ない。最大の例外がここ赤岡町。商都として
栄えただけに、好奇心旺盛、かつ生活に余裕のある
人々が多かった、ということだろうか。（続く）



伊能中図：「大日本沿海図稿 南海」部分（室戸周辺）

徳島大学附属図書館蔵

主な地点の緯度・経度（伊能隊の計測値と地理院地図を対比）

場所	北緯 (伊能隊の計測値)	北緯 (地理院地図)	東経 (電子国土Web)
「甲浦東股番所跡」碑		33度33分0.50秒	134度18分4.43秒
甲浦脇宿「万福寺」		33度32分56.43秒	134度17分48.02秒
甲浦本陣「超願寺」	33度33分半	33度32分58.56秒	134度17分44.46秒
野部の鼻		33度32分15.74秒	134度17分31.14秒
野根郷庄屋・川村家跡(野根郵便局)	33度31分	33度30分17.40秒	134度16分3.85秒
国道55号ゴロゴロ休憩所		33度29分12.27秒	134度15分28.45秒
佐喜浜「緯度観測之処」碑	33度24分半	33度23分38.34秒	134度12分22.22秒
室津本陣「津照寺」		33度17分18.14秒	134度8分53.50秒
羽根「代増屋」跡	33度22分	33度21分42.64秒	134度3分49.71秒
田野「岡御殿」	33度26分半	33度25分36.35秒	134度0分33.84秒
安芸脇宿「升屋」現存の蔵 (安芸の本陣の現在地は不明)		33度29分58.93秒	133度54分32.25秒
赤岡分宿「平島屋」跡		33度32分28.56秒	133度43分36.84秒
赤岡・旧測量記念石があった場所	33度33分	33度32分28.59秒	133度43分33.15秒
赤岡・平成の伊能測量記念碑		33度32分28.77秒	133度43分32.63秒
赤岡本陣「長木屋」		33度32分31.07秒	133度43分21.99秒

「高知新聞」ネットで閲覧可能です。

高知新聞「忠敬没後200年記念」企画の各記事を、高知新聞HPでご覧いただけます。

「伊能忠敬土佐を測る」(1月5日朝刊)、連載「伊能測量 土佐の足跡」全5回(5月)、「伊能図を巡る」全8回(5~12月)など。

会員登録が必要です。無料会員は毎月10本まで記事閲覧可能(新聞購読者の場合は同20本まで)。

「高知新聞Plus」(有料登録)では、全ての記事の全文と、紙面イメージもご覧いただけます。

詳細は高知新聞HPか、お客様窓口まで フリーダイヤル (0120・3154・54)

※ 浅学をかえりみず投稿させていただいております。

お気づきの点は筆者へメールでご指摘いただければ幸いです。 ioribaiwa@live.jp

伊能図フロア展に魅せられて

伊能忠敬研究会 馬場良平

〇〇〇年）二月、「歴史街道を歩く会」を主宰する河島悦子氏の「唐津街道を歩く会」に参加してからです。

一、歴史街道との出会い
私が初めて『街道』に興味を抱いたのは、地元の地方銀行に入行してから間もない、昭和四十六年（一九七一年）一月より、週刊朝日で連載が始まった司馬遼太郎の「楽浪の志賀」に始まる『街道をゆく』を読み、琵琶湖周辺の歴史や文化に魅力を感じ、「歴史のロマンを感じる『街道』に深い興味を覚えたことに始まります。『近江』というこのあわあわとした国名を口ずさむだけでもう、私には詩がはじまっている。この書出しによって、私は近江の国、琵琶湖周辺に異常なほどの興味を覚えました。

しかし、当時は高度成長期、仕事を終えて家に帰るのはプロ野球ニュースが終る頃で、二十歳代の後半にただ一度「楽浪の志賀」に魅せられて「河西のみち」の風景を追って、近江・琵琶湖周辺の街道を散策しただけで、興味ある「街道歩き」を継続的にする余裕はない時代でした。

そんな私がふたたび、「街道歩き」に興味を持ち始めたのは、ちょうど五十歳になる数ヶ月前、職業人としての先行きが見え始めた平成十二年（二



司馬遼太郎の「街道をゆく」ほか参考図書

そのような中、古街道愛好者から長崎街道と唐津街道を結ぶ塚崎往還（唐津往還）を歩こうと云う機運が高まり、平成十四年（一九〇二年）十月『中世の風景が広がる歴史道』をキヤッチフレーズに「塚崎・唐津往還を歩く会」を発足しています。

二、伊能図との出会い

平成十二年（一九〇〇年）「唐津街道を歩く会」に参加した当時、九州では長崎街道を中心とした参考図書が発行されていましたが、九州での「街道歩き」のバイブル書的存在は、伊能忠敬研究会会員であられる河島悦子氏が執筆・発行された「伊能図で甦る古の夢 長崎街道」「大里から博多へそして唐津へ 唐津街道」の一冊があげられます。河島悦子氏が『疎開して、いじめに泣いた幼い日、土地の古老に教わった「殿さん道」を辿り始めて五十余年が過ぎました』とあとがきで記されていますが、自身の五十年來の古街道調査を基に、伊能忠敬の足跡を辿ることで出来たもので、伊能忠敬測量日記や街道を通った旅人の日記や紀行文なども盛り込まれており、一万分の一という地図が街道を歩く者にとってはありがたい使いやすい参考図書であります。拙宅は長崎街道沿いにありますが、河島悦子氏の「伊能図で蘇る古の夢 長崎街道」を手にして歩かれる人々を数多く見かけ

たものです。

平成十四年（一九〇二年）に発足した私たちの「塚崎・唐津往還を歩く会」は、例会資料として、一万分の一の地図とそれに対応した説明資料を配布しています。第一回目の例会からは、『伊能忠敬測量日記』の中の地元測量部分も配布し、それを踏襲しながら今日まで継続して来ています。

平成十六年（一九〇四年）九月には、街道を介して知り合った福岡の「図書出版のぶ工房」の遠藤薰氏の案内で伊能測量隊の足跡を辿る道探しに参加しました。この時、遠藤薰氏が用意して下さった伊能大図の写しと現在の地図を符合させて歩くと、伊能測量隊の測量道が現在の地図と見劣りしない正確さで残つております。その測量技術の高さをあらた



浜崎海岸の松並木として残る伊能道

めて感じました。また、随所に古道の面影を残す草道や石造物が残っており、新たな発見をした感動で胸が高鳴ったものです。特に浜崎海岸沿いの伊能道には感激して、地元佐賀新聞の投稿欄「ひろば私の主張」に「伊能図で行く藩政期の道」と題して投稿し、松並木として残る浜崎海岸の伊能道の保存を呼びかけました。

平成十六年（一九〇四年）十一月、私にとつて大きな転機となるイベントが福岡市で行われました。「アメリカ伊能大図里帰りフロア展」です。河島悦子氏や遠藤薰氏のお誘いを受けて会場に足

を運んだところ、その大きさ、美しさ、正確さに圧倒されてしまいました。その上、河島悦子氏の推薦により来賓として会場にお見えになつて、推奨により来賓として会場にお見えになつてい



アメリカ伊能大図、博多・福岡周辺



里帰りフロア展を見入る河島悦子氏

た渡辺一郎伊能忠敬研究会代表（当時）より伊能忠敬研究会への入会許可を得て、福岡の國重正樹氏、遠藤薰氏そして佐賀の私の三名が入会することになったのでした。

この時の伊能大図との出会い、そして伊能忠敬研究会入会は、その後の私の活動に良い意味で大きく影響を与えるものでした。しばらくして渡辺一郎夫妻が九州の旅をされた時、伊能忠敬研究会九州支部の歓迎会が行われ、その席で近く展開される伊能大図フロア展に準備中の伊能大図第九号の部分図をいただき、大変感激し、ますます伊能図の魅力に惹かれるようになつたのです。

三．完全復元伊能図全国巡回フロア展

佐賀県域に張り巡らされた江戸時代の主な街道や往還は、基本的には戦国時代に利用されていた街道や往還を継承、整備したものと考えられていました。

ます。この佐賀県域の主な街道や往還、そして海岸線を縦横に歩き廻り、大きな足跡を残した人物が伊能忠敬です。

「塚崎・唐津往還を歩く会」の例会は、唐津から塚崎（武雄市）までの塚崎往還（塚崎から唐津へ向かつては唐津往還と呼ぶ）を中心に、主に佐賀県内西部地区に繋がる街道や往還などを歩いていましたが、沿道の人ひとの支えや街道や往還歩きに興味を持たれる人々の後押しを受けながら、佐賀県全域の歴史街道に足を延ばしてきました。

「塚崎・唐津往還を歩く会」を継続していく中で、伊能図に出会い、そして何よりも各地に繋がる街道や往還を歩いていくと必ず伊能忠敬が足跡を残していることを強く意識するようになり、おのずと伊能忠敬に興味を抱きました。

伊能忠敬に対する興味が大きくなり始めた時期に大きなニュースが入つてきました。

各地で発見された伊能図を最新のコンピューターグラフィックで色彩を復元、伊能忠敬が創った美しい伊能図を巨大なフロアに広げ、実際に地図の上を歩くことが出来る体感型の「完全復元伊能図全国巡回フロア展」が平成二十一年（二〇〇九年）四月東京・深川会場を皮切りに始まつたというニュースでした。

当時、伊能忠敬研究会事務局より「完全復元伊能図全国巡回フロア展開催基金」募金趣意書なるものが送られて来て、大いに賛同して少額ではあるが寄付した処、フロア展招待券をいただきました。趣意書に「二〇〇年前の日本はどのような姿で、どのような地名で呼ばれていたのか。完全復元図を身近に観て、触れて、学んでいただくことにより、大いなるエネルギーを得ただけだと

思います。明日を担う青少年にはぜひ観せてあげたいと念願しています。」とありました。また、フロア展開催地として、全都道府県各一ヶ所以上での開催を目標とし、終了予定は平成二十三年（二〇一一年）十二月と記してありました。

この趣意書を読み、私の胸のなかで「何とか佐賀県で開催できないものか、伊能忠敬測量隊の肥前国測量から二〇〇年の節目に是非開催したいものだ。」と熱いものが湧いてきました。

平成二十一（二〇〇九年）十一月十五日、佐賀県立図書館の多々良友博先生が関与した「二〇〇年前の佐賀を歩こう！」十六畳の大地図初公開」と題した「BOOKマルシェ佐賀二〇〇九」の一環として、江戸期の肥前国一円の伊能大図（アメリカ大図）が公開・展示されました。



200年前の佐賀を歩こう！会場風景

四．九州での巡回フロア展

平成二十二年（二〇一〇年）九州で初の巡回フロア展が福岡で開催されることになり、真夏の太陽が照り付ける七月三十日～八月一日までの三日間、福岡市の中村学園大学で福岡県土地家屋調査

士会の主催で開かれました。会場での案内役を伊能忠敬研究会九州支部のメンバーにより交代でやることになりました。そこで、私も半日、フロア展会場で来場者と共に伊能図を堪能することができました。「フロア展を佐賀で！」とようやく重い腰を上げるきっかけになつたフロア展でした。この時、案内役の目印としていた『伊能忠敬研究会』の黄色い帽子が、その後、大いに役立つのでした。

佐賀県での開催を市町村や教育関係などに呼び掛けたため、まず一人で動き初めました。まもなく平成二十二年（二〇一〇年）八月三十一日には、忙しい日程を割いて伊能忠敬研究会代表（当時）渡辺一郎氏が佐賀に来て下さいました。佐賀開催への行動開始です。平成二十四年（二〇一二年）八月三日～五日まで開催された「完全復元伊能図全国巡回フロア展 in 佐賀」について、伊能忠敬研究二〇一二年第六十六号「各地のニュース」にて「佐賀フロア展が開かれました」と題して、渡辺一郎氏より詳しい報告がなされておりますので、ここでは割愛いたします。佐賀会場での巡回フロア展は、全国で二十番目の開催でした。平成二十一年（二〇一〇年）七月全国で七会場



平成22年7月30日～8月1日福岡会場

目となつた福岡市での開催後、九州・沖縄地区では、平成二十三年（二〇一一年）十月福岡県八女市、平成二十四年（二〇一二年）八月の佐賀市、平成二十五年（二〇一三年）十一月には沖縄県那覇市と鹿児島県指宿市、平成二十六年（二〇一四年）には福岡県飯塚市で開催されてきました。指宿市では、フロア展とあわせて開催された「沖縄・鹿児島文化交流祭」に中央実行委員会のメンバーと一緒に御一緒に参加させていたただきました。この間、私の歴史街道歩きの師匠である河島悦子氏とは、沖縄を除く各地の会場に足を運びました。来場されるお客様が伊能図に描かれたふるさとの地名や川、山などをご覧になり、感激される様子を嬉しく思ひながら、あらためて伊能忠敬の偉業と大いなるエネルギーを感得しつつ、会場案内の手伝いをさせていただきました。



指宿会場「沖縄・鹿児島文化交流祭」に参加

五、全国二十八番目のフロア展 in 唐津

来場者とのそうしたやり取りの中から、もう一度佐賀の人伊能図を見てもらいたい、伊能図の上を歩いて、ふるさとの変わらぬ姿を見ていただけといふ想いが生まれてきて、唐津市での開催に向けた行動を実行するようになりました。折しも、平成二十五年（二〇一三年）四月『中世の



長崎へ移動中、桃川郷土史家と渡辺氏

風景が広がる歴史道から佐賀の歴史街道を歩く「塚崎・唐津往還を歩く会」が十周年一〇〇回目の歩く会を迎える節目に伊能忠敬研究会名譽代表渡辺一郎先生の十周年記念特別講演会を計画していましたので、渡辺先生にはご無理を言つて、この日程に合わせて唐津市での講演会、そして、唐津市長への陳情を引き受けいただきました。当時の渡辺先生の日程表を見ると四月二十日（土）八時一〇分東京羽田発、一〇時五分長崎空港着、長崎空港のある大村市から武雄まで約五〇km移動、十五時から講演会、一八時三〇分から歩く会十周年懇親会参加、宿泊。四月二十一日（日）起床朝食後、唐津市へ約四〇km移動、一四時から講演会、その後から塾関係者との会食、宿泊。四月二十二日（月）起床朝食後、九時唐津市長にフレア展唐津開催陳情。一〇時から長崎市へ約一一〇km移動、長崎市の入江正利様、宮川雅一様などとフロア展長崎開催の件で意見交換、一七時長崎市から長崎空港のある大村市へ約三〇km移動し、一九時長崎空港発、二〇時四〇分東京羽田着。という三日間強行スケジュールを熟していただき、結果、坂井市長から「子どもたちに見せてあげなさい」と快諾をもらつて唐津開催が決まりました。担当部署からは冠がないと説得力がないからしばらく公表は控えてということでしたが、いずれにしても市

長の言葉は重いものがあります。涙が出るほど嬉しかったです。長崎市役所へは以前、入江正利様と一度、フロア展開催のお願いで訪問していましてが、担当者段階での話にとどまり、実現出来ておりません。やはり、担当者の資質、力量が問われると思われます。佐賀市や唐津市の場合は担当者として窓口になられた都市デザイン課の武藤英海係長（当時）や文化振興課の坂口政江課長（当時）は趣旨をよく理解していただき、トップへの意見具申をして下さいました。ありがたいことで



伊能ウォーク・呼子地区弁天島にて記念写真

唐津市合併十周年記念事業として採択された「完全復元伊能図全国巡回フロア展 in 唐津」は平成二十七年（二〇一五年）一月二十七日より三月一日まで三日間、唐津市文化体育館で開催されました。合併十周年記念事業ということであり、私の得意分野である歴史街道を歩くことを提案して、フロア展を開催する前にして「伊能測量隊の足跡をたどる歴史探訪ウォーク」を行うことになりました。

合併前八市町村で二〇〇年前に伊能忠敬測量隊が実際に測量した各地域の道を歩くことで、正確な地図を残した伊能忠敬測量隊の功績と二〇〇年前と変わらぬ姿で息づく郷土・唐津を見直す機会になり、フロア展開催時には、会場に足を運んでいただき、伊能図を堪能してもらいたいとの思いで計画しました。数多くの参加者を得て、好評で

あつたと満足しています。

フロア展一日目、唐津市内の小学六年生は、バスを使って小学校ごとに決められた時間に入れ替わり立ち替わり会場に入り、伊能図の上を、関心をもって見て回り、走り回ったり、歩測大会に参加したりして楽しんでいました。二日目、三日目は子どもたちと一緒に家族連れで来場される姿や最後の開催地という文句に引かれて福岡県や長崎県から来られた伊能ファンなどで会場は終日満員の状態が続きました。主催者である唐津市が作成したフロア展仕様の「伊能大図」唐津地区を五種類に分けて作成したクリアファイルが来場者に配られて好評でした。また、地元の松浦史談会は『伊能忠敬日記』に詳しく記された鏡神社の「楊柳観音像」のレプリカを展示・解説されました。渡辺一郎名誉代表には健康状態に不安を抱えながらも特別講演会をしていただきました。また、木谷道宣氏のご紹介で「琉球国之図」も展示することが出来、話題は豊富にありました。

六、「全国巡回フロア展」終了後の動向

「全国巡回フロア展」は、全国三二十八番目の唐津会場が最後の開催地となり、二十八会場合計で十一万二千人を超す来場者にご覧いただきその役目を終えています。これまで使用されてきた中型トラック一台に及ぶ資材一式は、伊能忠敬ゆかりの香取市に移され、管理されることになりました。伊能忠敬研究第八十号（二〇一六年）の各地のニュース欄によりますと、平成二十八年（二〇一六年）八月六日（土）と七日（日）の二日間にわたり専修大学生田キヤンバスで「伊能忠敬の原寸大復元大図フロア展」が開催されているようです。その後、香取市では「伊能忠敬没後二〇〇年記念事業」の一環として、平成二十九年度、「伊能大図パネル全国派遣事業」を実施することになり、「全国巡回フロア展」で使われて来た「伊能大図の原



唐津市内小学6年生はバスで会場へ



楊柳観音像を舞台に唐津フロア展会場

来場者は当初目標をはるかに上回る六〇八〇名と多くの方々に来ていました。老若男女それぞれが伊能忠敬の生き方や伊能図の大きさ、測量隊の苦労や努力など、伊能忠敬の魅力や語りかけているものを感じ取っていただけたものと大変うれしく思っています。全国巡回フロア展の最後の会場として唐津で開催出来たことは、私の人生でも最高の出来事として輝き続けるものと思っています。

寸大複製パネル」二五五枚を七区域に分割して、全国各地にある香取市の友好都市へ貸出す事業を行っています。貸出先は茨城県つくばみらい市、埼玉県川越市、福島県喜多方市、栃木県栃木市、千葉県浦安市、愛知県安城市、兵庫県川西市、佐賀県鹿島市と九地区に及んでいます。この地区にお住まいの方は、ふたたび、伊能図を間近に見る機会を得て、そのスケールの大きさを体感され、郷土の一〇〇余年前の姿に思いを馳せられたことでしょう。

私の住んでいる佐賀県では、鹿島鍋島藩初代藩主鍋島忠茂公のゆかりの地である香取市と友好都市協定を締結した鹿島市に一年間貸出しが行われています。鹿島市での「伊能大図パネル展」は平成二十九年（一〇一七年）六月十七日（土）～十八日（日）、九月三十日（土）～十月一日（日）、十一月十一日（土）～十二日（日）の三回に分けて、鹿島市内三ヶ所で開催されました。

いずれの会場でも原寸大の中国西部、四国西部、九州部分五十九枚のパネルによる「伊能大図パネル展」、「江戸から明治時代の測量機器の展示」、伊能忠敬記念館の山口眞輝学芸員による「伊能忠敬講演会」「伊能忠敬の測量体験」等の内容で、伊能図を「歩いてみよう」「聞いてみよう」「作ってみよう」、「日本の歴史をつくった地図を見る最後のチ



鹿島市「伊能大図パネル展」

いの方は、ふたたび、伊能図を間近に見る機会を得て、そのスケ

ヤンス！」「伊能忠敬でつながる鹿島と香取の不思議な縁」と呼びかけ、多くの市民が伊能図の偉大さ、伊能忠敬の偉業に感心されていました。この間、十一月五日（日）には近くの杵島郡江北町で行われた「ビックリふれあい祭り」に貸出しが行われ、「伊能大図パネル展」が開催され、見られた方々すべてが感嘆の声をあげられています。

鹿島市への貸出期間終了前には、「全国巡回フロア展」の開催に意欲を示していました。やきものの町・有田町へ最後の開催を呼びかけた処、生涯学習の一環として「伊能大図パネル展」～一〇〇年前の有田を歩こう～を決定され、有田町教育委員会・有田町公民館主催により、平成三十年三月九日（金）～十日（土）の二日間行われ、私はパネル展示説明を買って出て、「伊能忠敬研究会」の黄色い帽子をかぶつて、会場を駆け巡りました。



有田会場・紙芝居を見入る小学生

この会場では町内小学校二校から四年生の授業の一環として、伊能図に触れる機会を作っていました。小学生が来場された際には、「紙芝居・伊能忠敬」で伊能忠敬の幼少期から地図づくりまでを紹介し、「やろうと決意したこと」を感じ取つてもらえたものと思つています。

香取市では、伊能忠敬没後一〇〇年にあたる平成三十年（一〇一八年）五月一～十日（日）、全国九

七・終わりに

最後になりましたが、全国各地の皆さんに体感型の巡回フロア展により伊能図の素晴らしさ、伊能忠敬の人となりを通して、多くの感動を与えていただいた「完全復元伊能図全国巡回フロア展中央実行委員会」の堀野正勝事務局長ほかメンバーの方々に深く感謝いたします。

また、伊能忠敬没後一〇〇年記念事業の一環「伊能大図パネル全国派遣事業」により、全国各地の方々に、伊能図を間近に見て、楽しんで、そのスケールの大きさを体感できる機会を提供していたいた香取市に対して敬意を表します。

伊能図に魅せられて入った世界ですが、「伊能忠敬肥前国測量から二〇〇年」、「完全復元伊能図全国巡回フロア展」、そして「伊能忠敬没後二〇〇年」と大きなイベントは終わりましたが、偉大な伊能忠敬の研究は道半ばです。これからも伊能忠敬の魅力や測量隊の足跡調査など伊能研究は続けてゆきたいと思つてやうと決意したこと」を感じ取つてもらえたものと思つています。



紙芝居・伊能忠敬

市町に貸出されていた「大図パネル」の帰着式を行い、伊能忠敬没後一〇〇年記念事業として「伊能大図全国パネル公開展」を五月二十五日（金）まで開催し、日本全国を一般公開しました。

完全復元伊能図全国巡回フロア展 in 唐津会場設営から撤去まで

体育館ではフロアパネル搬入作業



中型トラックで資材到着

フロアへ伊能図配置作業



屋外では会場案内板設置

第一日目オープニングセレモニー



会場設営完了・事前打ち合わせ

フロア展終了後、解散式



三日目終了後、撤去・トラックへ

各地のニュース

石川県支部ニュース

加賀藩測量の足跡をたどる

(越中 その二)

室山 孝

河崎倫代

はじめに

前号に引き続き、伊能測量隊の越中休泊地をたどる現地探訪の二回目である。この探訪も、竹内慎一郎氏の『地図の記憶—伊能忠敬・越中測量記』(以下『地図の記憶』とする)を道標に休泊地の現状を確認することが多かつたが、昨年測量隊に関する地元史料が再発見されたこともあり、新たな知見も加えることができた。

今回は、測量隊が享和三年八月朔日(一八〇三年九月十六日)に能登国から越中に入り、同月五日に富山城下を出て滑川宿に向かうまでの行程(越中測量の前半)で、氷見町(氷見市)・放生津町(射水市)・東岩瀬町(富山市)・富山城下(富山市)と辿った。

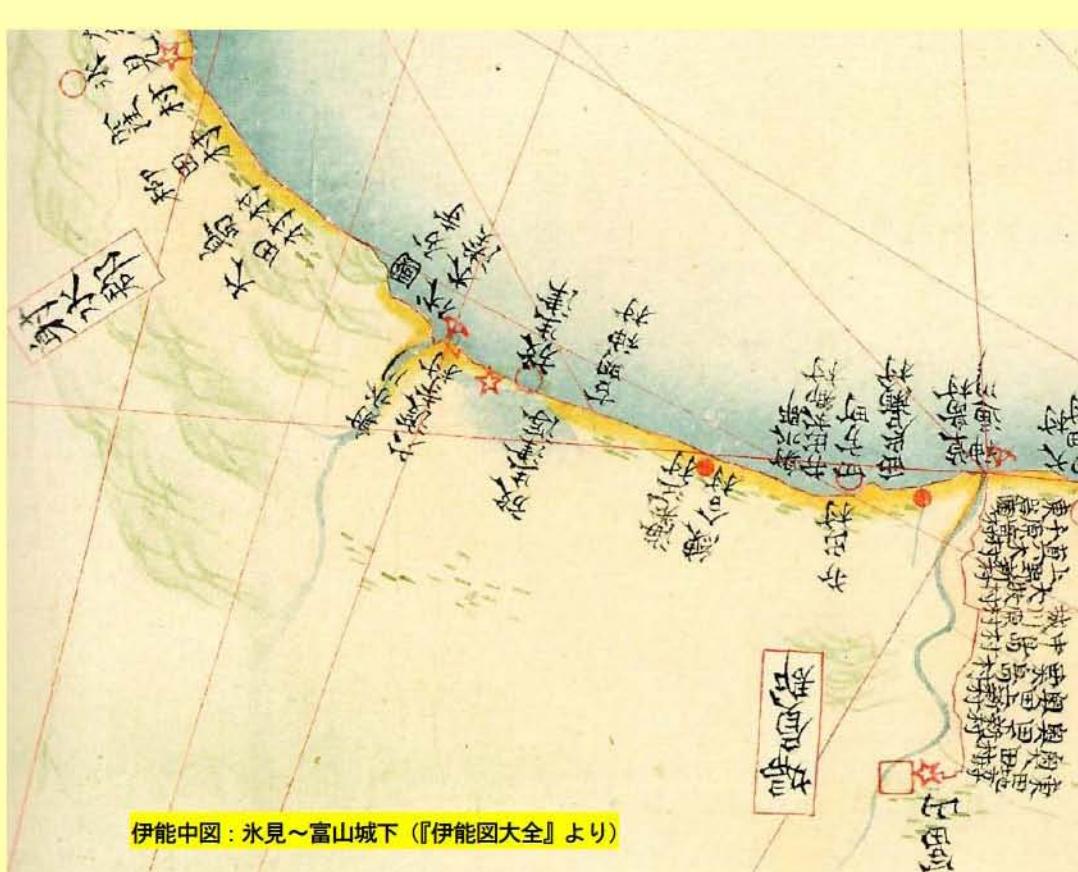
探訪は四月十四日(日)、参加者は河崎・相良・室山の三名で、さらに今回は富山県小矢部市で郷土の古文書を研究している小矢部郷土史会のメンバーである、牧野潤・佐野欣司・松田昭治の三氏のご協力により、住宅地図のコピーなど、地元ならではの事前準備をしていただき、当日も同行していただいた。

この日の朝、氷見市の商業施設「番屋街」で小矢部組と合流した。上空は晴れていたものの富山湾の向こうに雪を頂く立山連峰を仰ぐことはできなかつた。その後、次第に曇ってきて弱い雨が降り出したが、富山市中心部で探訪を終える頃まで、フィールドワークを妨げられなかつたのは幸いだつた。

一、氷見町・富山屋吉左衛門(8/2)

八月朔日、測量隊は能登国鹿島郡庵村を出立し、能登半島の東側付け根に当たるいわゆる灘浦沿岸を、佐々波村、黒崎村、東浜村、大泊村(以上加賀藩御預地、石川県七尾市)と南下。国境を越えて越中国射水郡に入り、脇村、中波村、中田村、姿村(以上加賀藩領、富山県氷見市)まで測量を済ませ、そこから船で東浜村に戻り、庄屋田畠太兵衛方に宿泊した。その夜は大曇りで子の刻(夜中の十一時)から度々降雨があり、天文測量は出来なかつた。

なお、『地図の記憶』によれば、忠敬の先触れの覚書に、庵村から追加先触を出したことが記されており、当初は東浜村まで予定し、進捗すれば宇波村あたりまで一日越しで測量したいの向かい、夜明けとともに測量を開始。忠敬は持病(痰、喘息)のため暫く東浜村の宿に留まり、六ツ半(七時頃)乗船して姿村に赴いた。そこで加納村(氷見市)の十村扇沢兵衛(十村上役)である無組扶持人十村扇沢権六の息子)の出迎えと挨拶を受けている。



伊能中図: 氷見～富山城下(『伊能図大全』より)

測量は姿村から大境村、小境村、脇方村、宇波村、泊村、小杉村、薪田村、阿尾村、間嶋新村（稲積村内）、池田新村（加納村内）（以上加賀藩領、氷見市）と進み、九ツ半後（午後一時過ぎ）氷見町に到着し、中町の富山屋吉左衛門方に止宿した。この夜は曇っていたが、わずかの晴間に天文測量を行つてい。当時の氷見町は家數千六、七百軒また一千軒ともある。

加賀藩の役人高畠厚定（今石動町等支配）の「職事日記」（金沢市立玉川図書館加越能文庫）に、町肝煎の加納屋平蔵・園屋理助と宿主の富山屋吉左衛門が羽織袴で町端まで出迎えたこと、氷見町の北部を富山湾にそそぐ上庄村に架かる北ノ橋の川口から浜通りの窪村境まで、鉄鎖を使用して測量し、肝煎兩人はその後に付き従つたことが書かれている。

宿所の富山屋吉左衛門方について、『地図の記憶』では現在の比美町の目抜き通り、県道415号線に面した岩崎自転車商会をその跡地としている。この家は間口は狭いものの奥行きは裏の通りまで続き、間口の広い隣家の田中薬局の奥は蔵になつていて。当時の富山屋の敷地規模はわからないが、田中薬局の敷地を含む広い間口だつたのかもしれない。

なお、高畠の「職事日記」に富山屋での食事の献立や木銭証文の写し



富山屋跡地とされる比美町・岩崎自転車商会

が載っている。昼食の「糸うどん」は氷見の名物で、現在も「氷見の細うどん」として伝統が続いている。木銭証文では、「上様（伊能忠敬）30文 御下一人17文」、「白米4升、1升58文」として計算している。

二、放生津町・柴屋彦兵衛（8／3）

三日の朝六ツ後（六時過ぎ）測量隊は氷見町を出立し、窪村、島村（以上、氷見市）、太田村、国分村、伏木村（以上、高岡市）と順調に進んだ。『測量日記』に伏木村は「能き川湊ナリ」と注記され、伊能大図では伏木村と次の六渡寺村（射水市）の間に「射水川」が太く描かれている。この射水川は現在の小矢部川と庄川が少し上流の古府村（高岡市）の上手と対岸の吉久村（同

【8月2・3日 氷見町での食事】	
落付	糸うどん 猪口（したし）
	向（おろし柚・塩なんばん・おろし大根）
夕食	向刺身（伊勢鮑）御飯
	平（すだれ麩・白身かまぼこ・大根うけ）焼物（一塩鯛）
	御汁（切魚、初茸）
	香之物（奈良漬・茄子漬）
朝食	向（鯛色付 白みそ）御飯 御茶
	平（卵とじなど）小皿（香の物）
	御汁（寄せ豆腐・葉付にんじん）

「高畠厚定職事日記」より

渡つたようだ。

六渡寺村からまもなく放生津町（射水市）であるが、測量はその先、放生津潟の向こうにある明神村・海老江村（加賀藩領、射水市）まで済ませ、戻つて放生津町に八ツ（午後二時）頃到着し、宿所の山王町柴屋彦兵衛方に入つた。この夜は曇つていたが、雲間に少し天文測量ができた。なお、伊能中

市）の南で合流して大きな流れとなり、大河口を形成したもので、湊はその地形を利用し、現在でも漁港として知られている。

伏木はかつて越中国府の所在地であり、射水川の名は『万葉集』にも詠われている。新元号「令和」の出典となつた「梅花の宴」を催した大伴旅人を父とする、大伴家持が国司として赴任していた。また六渡寺の渡しは、『義経記』においては、源義経一行がここで渡る際に、役人の目を免れるため弁慶が主君義経を打擲した舞台とされている。現在では、六渡寺の東側に庄川の新たな河口が造成され、かつての射水川河口は小矢部川河口となつている。測量隊は射水川を六渡寺村側へ船で渡つた。六渡寺村の注記に「此間

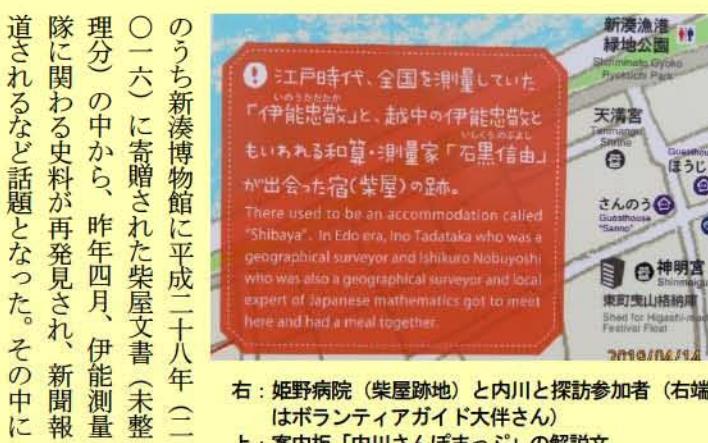
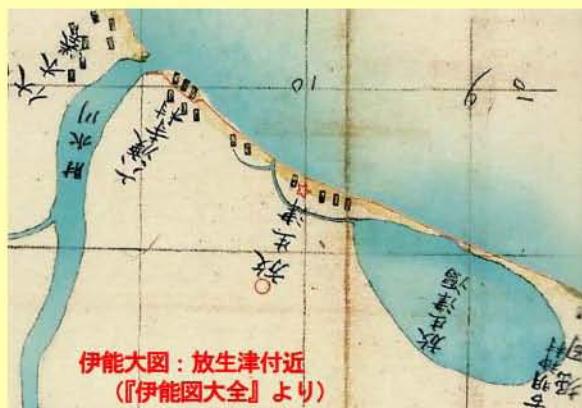
放生津の町中を東西に縦断するようく流れる内川（放生津内川）は、かつて町の東方にあつた放生津潟から岸流が運んだ射水川の土砂によって形成された砂州が入江を塞いででき

た放生津潟は、現在富山新港として開発され姿を消したが、伊能大図には潟と内川がしつかり描かれている。現在、内川は放生津観光の中心として遊覧船が往来している。

山王町柴屋彦兵衛方は、内川の北岸、現在の姫野病院付近であり、対岸にある観光拠点「川の駅新湊」から写真に収めた。その近くに設置された案内板の説明に「江戸時代、全国測量している。測量隊は射水川を六渡寺村側へ船で渡つた。六渡寺村の注記に「此間二三ヶ村アリ、海二丁斗」とあり、海の食事の献立や木銭証文の写し

柴屋の子孫は、現在金沢市在住とのことである。古文書は射水市新湊博物館（整理済三四五点、未整理一万点以上）・金沢市立玉川図書館近世史料館（一二五三点）・富山県立図書館（二五〇点）に分かれて所蔵されている。そ

柴屋彦兵衛は材木商で海運業も営んでいた。寛政八年（一七九六）より算用聞という町年寄に次ぐ町役人となり、米仲人・波除貯用銀才許・魚場主附などの役職を兼務した。文化十四年（一八一七）には町年寄となつてゐる（『放生津町年寄柴屋文庫目録』解説）。



【8月3・4日 放生津町柴屋での食事】	
落着 御所落雁	
夕食 御汁	（ふかしくずし・松茸・はり牛房なます（鯛・大根・きくらげ）京花海苔はり生姜 御飯 香物（奈良漬瓜・塩茄子）平（きんこ・ほどき卵・わさび）焼物（一塩鯛）
夜食 御飯 大猪口（けしあい・かも瓜・干蒟蒻）持椀（くり茸・くず生姜）しめもの（人参・煎りごま）	
朝食 御汁	（白味噌 大根・巻きす）向（くち焼物）香物（葉付大根）平（すだれ麩・松茸・ねいも）
「柴屋文書」より	

【7月27・28日 所口町和倉屋での食事】	
落着 御所菓子・百合根	
夕食 御汁	（白味噌小ふかし・角干竹・青柚）活盛（きす）向（はり大根・熊茸・花海苔）御飯 烧物（一塩小鯛）香物（味噌漬大根・早漬茄子）平（きくらげ・山の芋）
夜食 小皿（もみ鰯・花かつお）御飯 平（豆腐・松茸）香物（祇園漬）	
朝食 向（鯛切焼物）御汁（白味噌 京菜）御飯香物（木漬瓜）平（千かぶら・むし貝・大干竹）	
昼食 御汁（白味噌）立貝・青ミ）向（ぼら刺身）御飯猪口（煮酒・わさび）香物（酢漬大根）焼物（一塩小鯛）平（糸かも瓜・巻干瓢）	
夕食 うきふ	
「柴屋文書」より	

柴屋が能登所口町（七尾市）の宿所（阿良町和倉屋四郎右衛門）に問い合わせた献立や注意事項、測量隊を迎えるため種々の品物を買い付けた買上帳、などが申し送りとして記されていた。おそらく柴屋でもこれらに気を配ったことであろう。

柴屋での献立、木銭証文案もあった。メニューに測量隊が食べた柴屋の献立を模した御膳が期間限定で提供されていた。

- 宿の門口井溝から戸際まで砂を引いておくこと、門の戸の両脇に長い手桶を二つ用意すること
- 忠敬殿の御膳の椀は黒塗りの縁金入り、外の者は総黒塗り椀でよい。
- 床には懸物を掛ける、次の間には衣桁を用意する、忠敬殿は夜具は持参するが蚊帳を一張用意する、家来中には木綿の夜具を用意する。
- ・酒は出してはならず、家来中は格別である。
- ・朝は早く起床され、暗い中で燭台を点して朝食を召し上がる、遅くなるとことのほか機嫌がよくない、忠敬殿の御飯は格別に白く十分柔らかくする、料理にすまし（汁）と酒は出さないよう。

記憶』は、越中井波町の名産である「御所落雁」(今も名物である)のこととするが、果たして井波からわざ取り寄せたものだろうか。和倉屋の献立の「落着」には「御所菓子百合根」とある。「御所菓子」とは「御所(おんとこら、その土地)の菓子」の意ではないだろうか。なお、柴屋の『木錢証文』では、「上様(伊能忠敬) 35文、御下一人17文、「白米4升、一升51文」として計算している。

【伊能測量隊と石黒信由】

石黒信由(一七六〇～一八三六)は射水郡高木村(射水市)の肝煎の家に生まれた和算・測量家で、加賀藩に仕えて加賀・能登・越中三国の正確な地図を作成した。和算問題集『算学鉤致』(三巻、文政二年刊)は代表的著書である。

【測量日記】

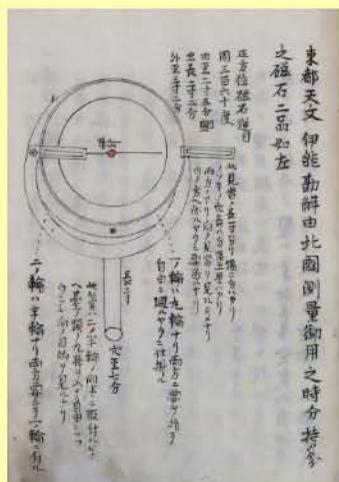
『測量日記』にも「此町に八幡宮あ
り」と記された放生津八幡宮に、信由が天明二年(一七八二)に奉納した算額があるとの情報を、「川の駅新湊」のボランティアガイド大伴せつ子さん(同宮宮司の母)から得た。早速一同で八幡宮に参詣し、算額を拝見した。しかし残念ながら信由の奉納したものは以前に盗難に遭い、今は『算学鉤致』に掲載されていた図から復元し、昭和四十二年(一九六七)に再奉納されたものが掲げられていた。『越中の

絵図』によれば、信由は二十三歳から十五年間、富山城下の算学者中田高寛(一七三九～一八〇三)のもとに通つて関流の算学を学び、その奥義を究めて高弟となつたという。

一方、天文・曆学・測量術については、同じ越中の城端(南砺市)に生まれた西村太冲篤行(一七六七～一八三五)に学んだ。太冲は大坂の麻田剛立(一七九一～一八五九)として金沢に出府した頃に信由が弟子入りし、書籍の貸借などを願い出ている。信由は測量用具・技術の改良に努め、それに基づき加賀藩領内を実測した。天保三年(一八三二)に『加越能三州測量図籍』(12冊)を著し、藩に提出している。

忠敬の北国測量を知った太冲は、加賀藩領測量の手伝いを忠敬に申し出した。『測量日記』享和三年五月二十一日条に高橋至時の紹介状とともに太冲の忠敬あての書状が載っている。しかし加賀藩は測量隊への警戒からそれを認めなかつた(『加賀藩史料』享和三年六月十五日条)。藩は忠敬との接触を防ぐため、太冲らを病氣と称して城端に禁足し、忠敬との通信・面会も禁じていた。

そうした中で石黒信由が測量隊に接觸することができたのである。その背景としては、『越中の絵図』によれば、



「測量用器之卷」(射水市新湊博物館 高樹文庫)

信由は寛政七年(一七九五)に「射水郡繩張役」、伊能測量隊の来る前年享和二年には「潟廻分間絵図下調役」となつており、伊能測量隊が来た頃、放生津周辺で測量に当たつていたことが挙げられる。『地図の記憶』では、太冲は信由に、新田開発や干拓事業に忠敬の測量技術の見聞が必要であると藩に嘆願するよう仕向け、藩も消極的ながらこれを許したのではないかと、大胆な推理を展開している。

忠敬と信由の出会いについては、信由に迷惑がかかってはいけないと配慮からか『測量日記』に記載しなかつたが、信由は前年の享和二年に測量用具について図解した「測遠用器之卷」の中に、増補する形で忠敬との出会いについて記録していた。その冒頭に、

東都天文伊能勘解由北國測量御用之時分持參之磁石二品如左、

とあって、忠敬が使用していた「彎竈羅鍼(ワンドカラシン)」に衝撃を受けたとあって、忠敬が使用していた「彎竈羅鍼(ワンドカラシン)」に衝撃を受けた夫されたものと感想を述べ、そのあと伊能先生ト我如何ナル因縁ヤアルラン、古明神村ヨリ婦負郡四方町マテ同道シテ、暫ク地理天文算学ノ事ヲ隔意ナク遊談シテ、互ニ名残リ別レケリ、

とあって、翌四日、古明神村(射水市堀岡古明神)から婦負郡四方町(富山藩領、富山市)まで、距離にして約6kmを測量隊に同道し、忠敬と地理・天文・算学について意見を交わし、別れに際し名残を惜しんだことが明記さ

のか、その実測図を示している。信由はのちにこれからヒントを得て改良工夫した「強盜(がんどう)式磁石盤・磁石台」を作つた。

忠敬との出会いについては文末に、亥(享和三年)八月三日、放生津四十物町柴屋彦兵衛方止宿、其夜雲暗シ、各座敷ノ庭ニ天文ノ道具ヲ飾リ所ヲ、我モ見物イタシケリ、とあり、柴屋で天文測量を見物している。「四十物町」とあるが、山王町の隣町であり、信由の勘違いであろう。

磁石の説明に、

右二品ノ内前ノ逆目磁石ハ弟子中コレヲ用ヒ、后ノ順目磁石ハ先生コレ用ヒ視ルナリ、右二品ノ磁石ノ製ハ享和三年癸亥八月四日、放生津浦測量ノ時、伊能氏ニ対面ノ上熟覽スル所ナリ、

れている。

石黒信由の遺した多くの資料は、現在射水市新湊博物館の高樹文庫（重要文化財）に保管されるが、我々は同博物館野積正吉氏のご協力により「測遠用器之巻」を撮影させていただいた。

三、東岩瀬・大村屋与四右衛門

（8／4 中食 8／5 朝食）

四日、早朝七ツ（四時）頃より半時ばかり（約一時間）降雨があつたが、測量隊は六ツ半（七時頃）放生津町を出発した。『測量日記』に記載はないが、放生津潟を過ぎた古明神村から忠敬は信由と共に歩いた。前日測量を済ませた海老江村を通り富山藩領の婦負郡飛地である練合村（射水市）に入り、この日の測量が始まった。先に引用した信由の『測遠用器之巻』に逆目磁石・順目磁石とあるのは、信由が測量を実見したものだったのである。測量は打出本郷村（加賀藩領）、打出村（以下、富山藩領）、四方町（以上、富山市）と進み小休止した。

富山藩の十村であった岡崎家（富山市）の「御触御用留」に、測量隊の四日朝の小休止は、「四方町彦左衛門方」とあり、また十村の花崎村伝左衛門と大泉村太右衛門が伊能測量隊の担当責任者として対応し、四日は四方新町の九右衛門方に詰めて西岩瀬町端ま

で出迎えること等が書かれている。

『測量日記』を見ると、富山藩領に入り村々の石高・家数が書かれていることに気が付く。加賀藩では、忠敬が村高・家数などを尋ねても答えないよう指示していたものの、支藩の大聖寺藩と富山藩では村高・家数については答えていたようである。因みに四方町は、「高四百六十七石壹斗、家四百七軒」とある。ここは漁業が盛んであったが、当時富山藩の大坂廻米の積み出し港となり町場化していたといふ。彦左衛門方で、忠敬は信由と別れの挨拶をし、また藩境に忠敬を出迎えた二人の十村とも挨拶を交わしたのである。

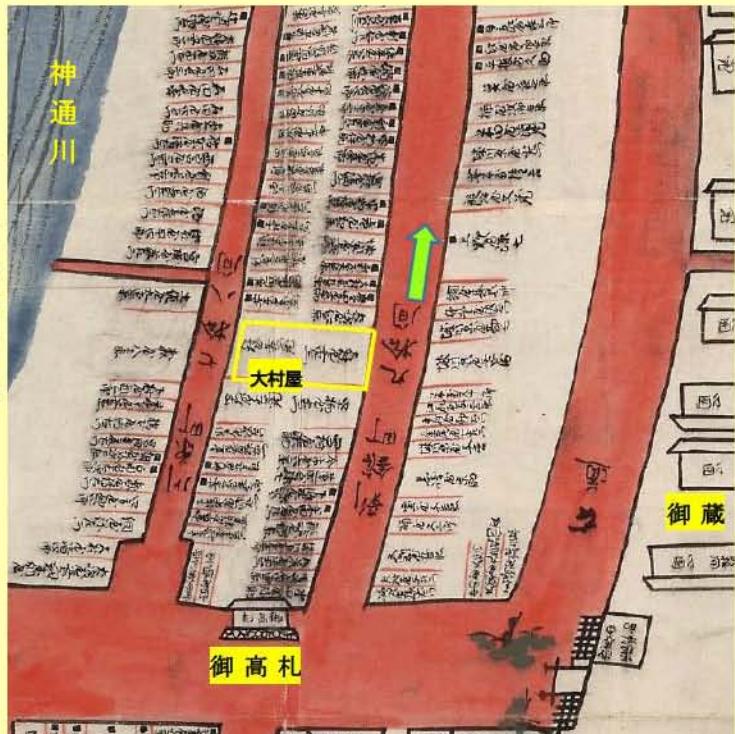
四方町から

すぐ西岩瀬村（現在、富山市四方西岩瀬町）となる。こそこはかつて神通川河口左岸の湊町として栄えていたが、万治三年（一六六〇）に神通川大洪水で大きな被害を受け、河道の主流も東へ遷

ったため、多くの船宿や民家百余軒が神通川対岸の東岩瀬へ引っ越したという。伊能大図では西岩瀬村のすぐ東に婦負郡（富山藩領）と新川郡（加賀藩領）の郡境が描かれるが、そこに記された川が神通川の古川である。

古川を超えると草島村で、測量隊は神通川河口近くを船で渡り、東岩瀬町に着き、ここで中食となつている。『測量日記』にこの日の中食宿は書かれていないが、おそらく翌五日にも朝食宿となる大村屋与四右衛門方であろう。東岩瀬は、神通川河口右岸に立地する湊町で、北前船の船主となつた。

『地図の記憶』も引用する文政十一年（一八一八）の「東岩瀬絵図」（富山



上：「東岩瀬絵図」（筆者加筆）（富山県立図書館所蔵）

左：測量隊の昼・朝食所となった大村家跡地付近

県立図書館所蔵)をよく見ると、「古道」の東側は「御藏」が建ち並ぶ広大な加賀藩敷地(現在、岩瀬小学校などがある岩瀬御藏町)となつており、その西側に、「新館町」「川原町」の通りが平行して並び、加賀藩御藏屋敷入り口の北側に、高札場が描かれている。川原町の家並みの裏側は神通川である。

大村屋与四右衛門の家は「新館町」通りに面し、間口は広く敷地は「川原町」通りまで続いており、「川原町」に面した奥は蔵になつてゐる。『地図の記憶』によれば、大村屋は伝馬問屋を歴代勤めた家とのことであり、「東岩瀬絵図」に見える広い間口は、馬繋ぎ場を備えた伝馬問屋の特徴を示している。

現在、東岩瀬の古い町並みが残る大町通り(森家・馬場家など北前船廻船問屋の建物があり、東岩瀬のメインストリートである)から南に真っ直ぐつながる新町通りは、大町通りとともに道幅も広く「岩瀬まち歩き散策路」として整備されている。この新町通りがかつて大村屋が店を構えた「新館町」通りにあたり、大村屋の蔵があつた「川原町」通りは、道幅も往時のままと思われ、多くが新町通りの家の勝手口や車庫・駐車場となつていた。

『地図の記憶』に「大村屋の跡」として写真が掲載された百塚商店は、現

在、主屋が古民家風の作りに変わつておらず、庭の築地塀や北隣りの建物はそのままであつた。話を聞くところと訪ねたが、留守のため叶わず、ほぼその写真のままである。岩瀬御藏町)となつており、その西側に、「新館町」「川原町」の通りが平行して並び、加賀藩御藏屋敷入り口の北側に、高札場が描かれている。川原町の家並みの裏側は神通川である。

測量隊は天候に恵まれた五日の朝測量隊は天候に恵まれた五日の朝《地図の記憶》では四日とするが、その日は雨があがつた直後で見通しが利かなかつたであろう、岩瀬浜で半円方位盤を据え、能登・加賀・越中・越後・信濃の山々の方位を測つてゐる。

『山島方位記』には、宮崎岬・駒岳・信州雪山・劍山・別山・立山・淨土山・有峰山・白山・城端山・荒山・石動山・百海山・輪嶋山・宝竜山・小木岬・二上山・宝達山の方位が記録される。伊能中図を見ると、描かれた方位線は、東(信州山)、西(宝達山)、南南西(白山)、北北西(法龍山)・宝立山)、北西(石動山)の五本である。

四 富山城下一番町・大和屋嘉兵衛(8/4)

八月四日、東岩瀬で中食後、測量隊へ向かった。千原崎村(神通川の渡し場があり、対岸の草島村と結んだ)、真木村、上野新村、城河原村、中嶋村、粟嶋村(以上、加賀藩領)、藩領境の赤井川(神通川に流れ込む支流で、現在の「赤江川」)。その後主流が南遷し、今

は城下町を流れるいたち川と、かつての奥田村の南で合流する)を越え、奥田新村(以下、富山藩領)、奥田下新田、奥田村、東田地方村と進んだ。途中、半円方位盤を立てて山々を測つたようで、伊能中図に東方(信州山)への方位線が描かれている。なお、十村岡崎家の『御触御用留』によれば、富山藩は測量隊の道案内等として、忠敬に附番代などの村役人を七名、隊員に同様く村役人等八名、一人の十村に附番代一人を指示しており、ほかに長持など荷物を運ぶ人々もいたであろうから、二〇名以上の人々が測量隊とともに移動したことになる。

次に、測量隊は富山城下町に入り、北新町、長町、先上立町、砂町、東四十物町、袋町、中町、西町(正札所)、二番町、一番町と来て、同町下の大和屋嘉兵衛方に止宿した(次頁の絵図参照)。この日は大曇天であったが、夜になると晴間も見え、雲間に天文測量を行つてゐる。

この日の午後、東岩瀬から富山城下までおよそ二里半(約一〇km)を測量した測量隊は、『地図の記憶』によれば、宿の到着時刻は『測量日記』に書かれていらないが、日没少し前の午後五時から日没直後の六時頃と推定している。また『測量日記』に町役人等の来訪者や渉外的なことについて書かれていはないのは、夜の宿所で隊員は測量記録

の整理、忠敬らは象限儀を据えて天文測量を行うなど多忙を極めたためであろうと推測している。

大和屋の所在地については、富山藩が天保十二年(一八四二)に城下の町人町の各町毎の由来や家数・男女別人数・番所・橋・有力町人・寺社などを書き上げさせた基本記録「富山町方旧事調理」(富山県立図書館所蔵)が手がかりとなる『地図の記憶』に「富山町旧記」とあるのは誤り)。これによると

一、江戸飛脚所式丁目中程北側、但し御提灯等相渡り、大和屋甚兵衛、

右之もの御使者宿等數代相勤候付、
諸役御免許、

と大和屋が書かれている。測量隊が宿泊した大和屋は「江戸飛脚所」を勤める御使者宿で、一番町の二丁目中程北側に所在しており、天保十二年には「大和屋甚兵衛」と代替わりしたことがわかる。一番町の位置を安政元年(一八五四)の「越中富山御城下絵図」(富山県立図書館所蔵)で示しておこられる。同町の二丁目は隣の二番町寄りである。

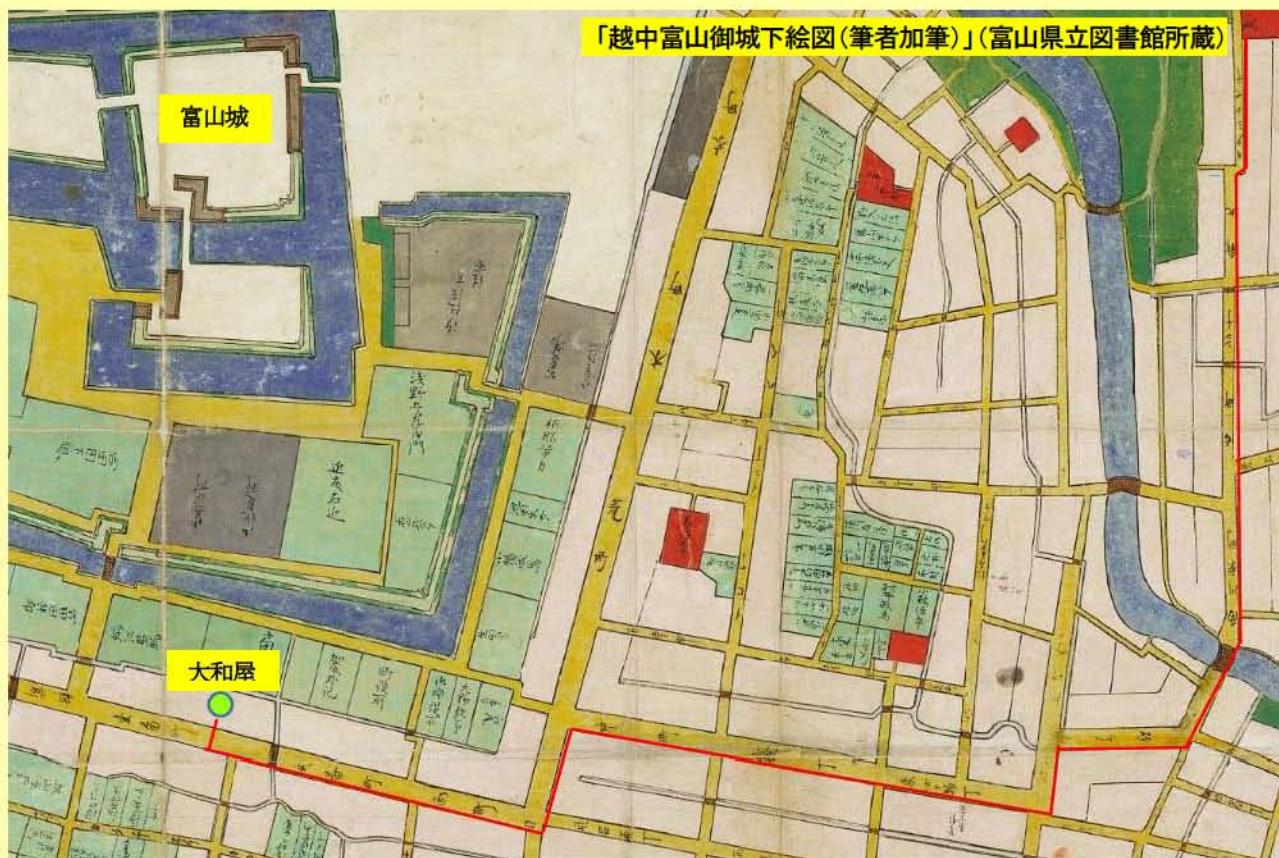
大和屋の跡地については、『地図の記憶』が昭和十四年(一九三九)刊行『富山県史蹟名勝天然記念物調査報告』(十三輯)に掲載された「近世日本」の英傑伊能忠敬先生の足蹟を検討する引用し、当時の「島倉洋品店」付近

と推定している。またその「島倉洋品店」の位置については、大田栄太郎氏の考察から、現在の一番町交差点（近代に新設の国道41号線とかつての一番町の通りである県道6号線が交差）の北東角と推定され、昭和五十年代頃の「松屋洋品店」から道路になつている辺りとしてその写真を示している。現在そこは「大和（だいわ）富山店」が入る「グランドプラザ」ビルになっている。

我々は富山市内随一の繁華街である総曲輪通り近くの駐車場に車を止め、歩いて交差点に向かつた。かつての「大和屋」跡地は「大和富山店」の通用口となつていた。また西町交差点から越前町交差点にかけての県道6号線には、近年、丸の内方面と結ぶ市内電車の軌道が敷かれ、現代的なトラムが走つていた。交差点の横断歩道を渡り、一番町交差点を写真に收め、本日の探訪を終えた。



大和屋跡地:一番町交差点の大和富山店ビル付近



測量隊は、上絵図の北東から入り、——に沿って測進して、一番町「大和屋」に止宿した。

おわりに
今回をもつて、伊能測量隊の加賀藩領における休泊地探訪は一通り完結した。今後、石川県支部では、加賀・能登・越中（石川・富山両県）における伊能測量隊の足跡をまとめる企画を進めたいと思っている。「伊能忠敬没後二〇〇年記念誌」が都道府県別のページを設けたように、市町別のページを盛り込み、また史料編によつて地域の重要な史料も紹介したいと考えている。それにより、伊能測量隊が身近な地域にもやつてきて足跡を遺したこと、地域の人々に知つていただきたいからである。

【参考文献】

- ・高瀬重雄『越中の絵図――文化史への抒情』
巧玄出版、一九七五年
- ・高瀬保(編) 照古会(解説)『富山町づくし●天保十二年「富山町方旧事調理帳」』桂書房 一九八九年
- ・竹内慎一郎『地図の記憶』伊能忠敬・越中測量記』桂書房、一九九九年
- ・河崎倫代「加賀藩天文暦学者西村太冲」
(一)～(三)『会誌』二八号～三〇号、二〇〇一年
- ・金沢市立玉川図書館近世史料館(編)『放生津町年寄柴屋文庫目録』二〇一六年
- ・伊能忠敬 日本列島を測る―忠敬没後二〇〇年 前編』伊能忠敬研究会 二〇一八年

「伊能忠敬・五国の足跡フォーラム in 笹山領」開催される！

資料提供 兵庫県篠山市 加賀尾宏一氏

会員の加賀尾氏から表題のフォーラムについての資料提供を頂いた。

その一部を紹介したい。

伊能忠敬 笹山領探索の会新聞 8

号は前号87号で紹介されていたが、会員の玉造功氏から、「ネットで偶然見つけたブログに『高齢者講座のこの1年を振り返って』と題する10回のブログがあり、内容は兵庫県地域高齢者大学の丹波OBの方々が、丹波市内の伊能測量隊の足跡をたどり、丹波市内への伊能測量隊の足跡を作成し、地域貢献に繋げた記録で、会報で全国に紹介したい内容ではないかとの情報を見た。今回、たまたま河崎会員からも、同フォーラムの情報が寄せられ、加賀尾氏からは関連資料が送られてきた。

「伊能忠敬・五国の足跡フォーラム」は「伊能忠敬 笹山領探索の会」が主催し、平成30年9月23日（日）・24日（月）の2日間にわたり篠山市で開催された。「兵庫県政150周年記念県民連携事業」として多くの支援・協賛・後援を得て行われたものである。

23日（日）160名参加。



（編集部）

映画「伊能忠敬—子午線の夢—」
五国の活動報告、意見交換、交流会。

24日（月） 48名参加。

笹山領街道筋12地区に建てた
標柱「伊能忠敬 笹山領測量の道」
をめぐるバスツアー。

「五国」とは兵庫県を構成する旧国名五國—摂津・播磨・丹波・但馬・淡路のことである。フォーラムでは、これまで別個に活動してきた「五国」での諸活動が順次報告され、有意義な交流の場となつた。本会員にとっても参考とすべきことが多く、主催者の許可を得て、概要を会報に転載させていただくことにした。

（編集部）

伊能忠敬但馬を測る 測量隊の見た 風景の復元に向けて

私が伊能忠敬に興味を持ったのは、平成6年に行われた、但馬の祭典で「但馬国分寺展」を担当した際、「測量日記」に

国分寺跡の礎石のことが書かれているのを知り、伊能忠敬記念館で実見させていただき、感動したのがきっかけです。

伊能忠敬や「大日本沿海輿地全図」は教科書等でも紹介され、よく知られています。しかし私たちの住んでいる村々や近くの街道を歩いて測量したことは殆ど知られていません。できれば

そのことを地域の人たちに知つてもらい、郷土への愛着や誇りを感じたい、と思い、次のことを進めています。

- ①「測量日記」と「伊能大図」（国土地理院複製）をもとに明治時代の5万分の1の地形図に測量のルートを復元、探索用の地図を作成。
- ②測量隊が歩いた道を歩きながら、実際に見た風景や宿泊地等詳細を記録する。
- ③但馬測量時は、幕府直轄事業であったため地元の多大な支援を受けていた。そのことは庄屋文書などからもわかり、新出の史料もあり、再調査を実施。



公民館講座での出石城下測量風景

④退職までは（今年3月末）、歴史講演会や市内の小学校、各地区に出前授業や出前講座として普及活動を実施。今後は、姫路城下から湯島（城崎温泉）までのルートを歩くことと、これまでの調査を基に伊能忠敬測量隊（地元支援含め）の功績を後世に伝えるため、解説書の刊行を目指します。
（元豊岡市立歴史博物館長）加賀見省一



和田山町にある
「右ハリマ左イセ追分碑」
(測量の印として使用)

忠敬丹波測量の跡を 巡つて学んだこと

発信したこと
活動記録を観光ガイドマップとした。

私たちの取組は、兵庫県の高齢者向け大学院の活動でしたが、地元の観光資源の発掘をねらいとして始め、伊能忠敬の活動を題材にした。

忠敬は第8次測量の中で、1814年、今の丹波市内を歩き、各本陣に延べ9泊している。そのルートに沿って旧宿場町や山裾の旧道、寺社、史跡や石碑、古い峠道を実地検証することになり、事前の下調べや調査予定計画を練り上げて進めて行った。

① 測量の実地体験と測量具製作忠敬の測量に合わせた行動に倣い、出来るだけ当時の測量に倣うことにして、測量器具を自作し、距離や方位の測定の仕方を検証した。

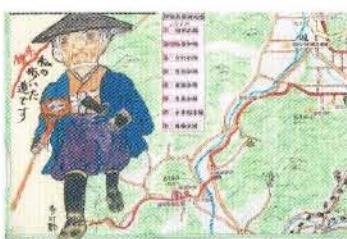
② 宿泊地や測量起点などの重要場所(忠敬測量時代)の旧跡や遺構を検証して廻った。そして当時の地域や産業の様子を憶測した。

③ 国境の峠道は行ける所まで登り、往時の行動に倣った。また、主要な寺社と境内の巨木等を見、地区の歴史を探った。城下町や商家の史跡等を廻つて地元の宝を確認した。

④ 江戸時代の物流は、運搬手段が人力や牛馬と高瀬舟であって、その産業遺跡(道標や牛馬の水飲み場や米や塩・乾物の荷上げ場跡の船座)を初見で見た。



市内足跡調査



観光ガイドマップの一部分

丹波の活動だより その2

ふるさと再発見、篠山の足跡「伊能忠敬篠山領測量の道」
—史実を後世に伝え、遺産を活かすために—

ねらい

- 郷土の歴史文化を育み、生きた教材づくり
- ふるさとを愛する人材づくりにつなげる
- 人と人の出会いが新たな交流へと広がる

標柱(石柱)

- 標柱4地区まちづくり協議会と
- 標柱8地区まちづくり協議会と
- 7小学校8基除幕式



ふるさと教育

- 平成28年10月28日～平成29年1月27日

Step 1 史実の掘り起し

篠山市の内の街道を探索

○活動の下調べ

(平成22年10月9日～平成23年2月末)

○市内全域41回延べ150km探索

○今田市原～播州清水寺2.6km探索

Step 2 伝え、広める

出前授業

○地域団体14回

(平成24年7月8日～平成30年5月12日)

○小学校8校12回

(平成24年7月10日～平成30年1月19日)

○歴史ウォーク

○地域団体8回

(平成24年9月10日～平成27年10月24日)

伊能忠敬ミニフロア展

○伊能大岡フロア展(国土地理院借用)、講演「伊能忠敬の全国測量と篠山領の測量道」星埜由尚氏(元国土地理院長)(平成26年3月29日～30日)

探索の会新聞

○1号～4号(掘り起し広める)5号(4基設置)6号(8基設置)7号(交流促進)(平成24年10月20日～平成30年1月1日)

伊能忠敬篠山領測量ガイドブック

○市内まちづくり協議会用、学校向補助教材用(平成29年4月～)

- 市外歴史爱好者から入手方法について問合せ(平成30年1月15日～)



Step 4 遺産の活用

交流促進

○伊能忠敬ファンの仲間と市内を越えての広域交流

(平成29年11月24日、平成30年3月8日
・14日、4月14日、5月9日、6月2日)

○歴史街道ウォーキングマップ
○標柱「伊能忠敬篠山領測量の道めぐり」ガイド
(平成30年2月～)

伊能忠敬篠山領探索の会

播磨の活動だより その1

① 伊能忠敬の足跡にまつわるご縁
文化2年10月より文化10年12月まで
4回にわたり、彼らが測量日記に当時
見聞きしたことや記述している内容を
我々の目線で見、それを今昔物語風に
三現主義で観察してまとめた。
② 石造物にまつわるご縁
播磨一帯は「石の宝殿」に代表され
るよう石の特産地で石仏、道標、石棺
仏等石に刻まれている地域遺産が多い
ことから記録に残すこととした。

忠敬まかり通る播磨路

私達のグループは、県開催事業の「ふるさとひょうご創生塾」で構成され、地域リーダーを育成して、県内ネットワークを構築する創生マイスター資格を得たチームです。

2005年に彼らが播磨の地に測量で足を踏み入れて200年になるのをござりながら、山河や路傍に忘れられつつある有形無形の遺産を歩くことによって、ふるさとの魅力を再発見し、其の成果を製本（1500部）にして記録に残し、後世にまで伝えることが出来ればとの思いで取り組みました。対象地域は、本のタイトルにもなりました「伊能忠敬の歩いた播磨みち」です。

③ 出前授業で生き方学習の「縁」
忠敬の生き方に共鳴し、生涯学習の元祖、人生二山説、中年の星として第二の人生の生き方の模範になる人物紹介として「出前授業」を行っています。気軽に声をかけてください、喜んで授業致します。



播磨の活動だより その2

播磨の活動だより その2

開催し、地域活動にかかわりたい人材の掘り起こしを図っています。従来のボランティアという概念にとどまらない、新しい働き方の創造につなげていきたいとの思いを強く持っています。伊能忠敬は、全国に測量の足跡を残しておますが、私たちの播磨地域にも、旅行で1回、測量で3回、訪れていることがわかっています。

播磨のどこを歩いたのでしょうか。その時の播磨地域はどんな風景やくじらだったのでしょうか。そのとき測量隊が見たものが、今はどうなっているのでしょうか。

ぐり石とは大きな石と石をつなぎ、重要な働きをする石の実ぐらいな小石のことです。

が持っている知識、技能などを地域社会に役立てたいと考えている人と、それらのサービスを受けたい人を結びつけ、需給の関係を円滑にする住民活動サポートシステムづくりをめざしています。

（ふるさとひょうじ創生塾）「縁ぐくルーブ」と同好会）と連携して、200年前の播磨地域の歴史や風習、暮らしを丹念に掘り起こされた成果を楽しく学ぶ機会を多くのひとびと地域住民に提供したいと考えています。

加古川の輝く地域再発見 ～伊能忠敬の歩いた播磨みちに学ぶ～編



「伊能忠敬・多可の道」プロジェクト活動報告

このプロジェクトは「伊能隊が多可町を通りたことを、多くの人に知ってもらいたい」という思いから、伊能忠敬没後200年の今年、町図書館と文化財部局の那珂ふれあい館が中心とな化財部局の那珂ふれあい館が中心となり、2月に発足し、33名のスタッフと忠敬翁に関する学びを深めてきました。

一般的の参加者もまじえた4月講座「測量機器を作ろう」では、伊能隊が使用していた「鉄鎖」「御用旗」「梵天」「象限儀」の4つを作成。中でも測量の要となる鉄鎖は、長さの違いが地図作りに影響するため、慎重に取り組みました。なお、この講座に先駆け、2名のスタッフが丹波市の伊能研究の先輩のもとで鉄鎖作りに必要な道具の作り方を伝授してもらい、それを複数台製作してくださっていたため、スムーズに作業を進めることができました。

このように、自らプロジェクトを盛り上げようと奮闘してくださるスタッフの協力もあって、充実した2回の講座となりました。



事前に、スタッフの1人である現役の測量士さんが、測量地域へのピン打ちや、あらかじめ完成図を作製してくださいましたため、当日は、実測による地図作りの喜びも味わうことができました。

伊能忠敬、三田測量の道を辿る

「歴史文化財ネットワークさんだ」では、年に数回、郷土の歴史を探索する「歴史ウォーク」を実施している。

今年は伊能忠敬没後200年に当たる5月30日、「第一回、伊能忠敬三田測量の道を辿る」という企画を実施した。

伊能忠敬の測量隊は三田市（旧三田藩）には1811年（3泊・天体観測1回。三本峠より上相野から広野村・三田中心地を通り湯山町へ）と1814年（2泊。草野から藍本町経由広野村まで）に2度訪れている。

実測による日本で初めての精度の高い日本地図を完成し、偉大な足跡を残した実績は、いまだに多くの人に感銘を与え現在に語り継がれていることは、当地でも変わらない。

開催当日は、雨の中にもかかわらず、50名弱参加があり、忠敬の根強い人気と関心の深さに驚かされた。

ルートはJR藍本駅周辺の日出坂峠（いまは高速道路が通り閉鎖）へ至る街道筋の宿泊地や忠敬も手を合わせたであろう酒滴神社・その他、周辺の歴史的建造物を見学。

また、篠山市との国境の記念石碑、そして篠山市草野地区の忠敬・測量の標柱（篠山市伊能忠敬笠山探索会建立）まで足を伸ばした。その標柱から南方の三田側を望むと、日出坂峠が際立つて見える。古くから交通の要所で酒造りの村氏も、また忠敬もこの峠を越している。往時が偲ばれる。

伊能忠敬を通して、参加者には新たな歴史・地理発見の気づきが心に刻まれたであろう。

次回は、11月中旬



を予定。上相野の宿泊と天体観測をしたところを主に辿る。時代の流れとともに当時の街並みが今は無いところもある。宿泊されたであろう場所は跡形もなくなっている。場所の特定もままならない。街道筋も見学用には適さない部分もあるかも知れない。そんな中を伊能忠敬の困難な測量の苦労を感じながら歩いていきたい。

往時の足跡の感動を参加の皆様と共に味わいたいと思っている。

また、5月講座「測量しながら歩こう」では、雨の中、4月に作った鉄鎖や御用旗などを使い、伊能隊が歩いた町内の道を一部測量しながら歩きました。

「伊能忠敬・多可の道」プロジェクト

播磨の活動だより その3



忠敬翁に関する学びを深めてきました。

一般的の参加者もまじえた4月講座「測量機器を作ろう」では、伊能隊が使用していた「鉄鎖」「御用旗」「梵天」「象限儀」の4つを作成。中でも測量の要となる鉄鎖は、長さの違いが地図作りに影響するため、慎重に取り組みました。なお、この講座に先駆け、2名のスタッフが丹波市の伊能研究の先輩のもとで鉄鎖作りに必要な道具の作り方を伝授してもらい、それを複数台製作してくださっていたため、スムーズに作業を進めることができました。



このように、自らプロジェクトを盛り上げようと奮闘してくださるスタッフの協力もあって、充実した2回の講座となりました。

摂津の活動だより



このように、自らプロジェクトを盛り上げようと奮闘してくださるスタッフの協力もあって、充実した2回の講座となりました。

このように、自らプロジェクトを盛り上げようと奮闘してくださるスタッフの協力もあって、充実した2回の講座となりました。

このように、自らプロジェクトを盛り上げようと奮闘してくださるスタッフの協力もあって、充実した2回の講座となりました。

このように、自らプロジェクトを盛り上げようと奮闘してくださるスタッフの協力もあって、充実した2回の講座となりました。

歴史文化財ネットワークさんだ
NPO法人

淡路の活動だより

「方文書の残存数の少なさである。」
「研究」の蓄積は多くはない。その原因は、伊能忠敬来島時の様子を伝える地図は和算や町見術（測量術）を研究していた在野の知識人である。

ただ、最近淡路地方史研究会の中に新しい動向も生まれている。伊能忠敬の淡路測量への対応として藩から「人馬割本」を命じられ、来島時の人馬の手配などを勤め、終始隨行したのが、柳沢村組頭庄屋廣田直道であった。直道は和算や町見術（測量術）を研究していった在野の知識人である。



忠敬來島頃の福良浦（「淡路浦夕図巻」個人蔵）



忠敬來島崎の岩屋浦（「淡路浦夕図巻」個人蔵）

淡路島における 「伊能忠敬研究」の 現状と今後の動向

文化5年（1808）3月4日、午後一時過ぎに舞子の浜を船出した伊能忠敬一行は、比の風に恵まれ頂風のう

新しい動向は、島内の伊能・廣田の新史料を探索しながら、和算学者廣田直道の視点から、淡路島での伊能忠敬の具体的な足跡を明らかにしようとす るものであり、「人馬割本」を勤めた廣田直道の子孫である本研究会の会員が研究を進めており、今後の成果が期待されるところである。

日本天文学会が今年創設した日本天文遺産に、会津藩校日新館天文台遺構と超新星や日食などの天文現象を書き留めた藤原定家の日記「明月記」が平成31年3月13日「日本天文遺跡」に認定されました。

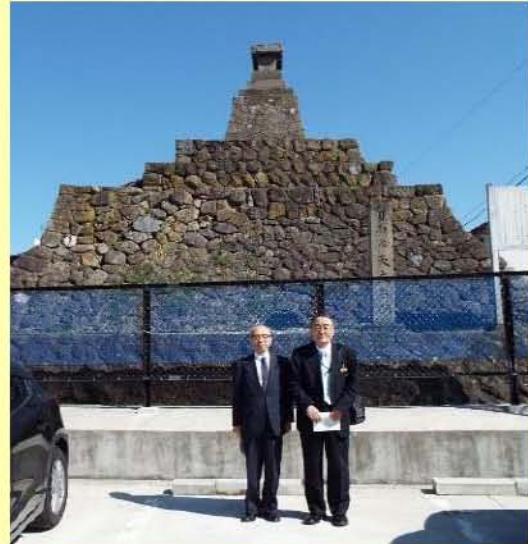
島民報) 約6.5Mと伝わっています。(要旨福島天文台の設立には、貞享暦の生みの親・渋川春海、諏方神社、会津藩主・保科正之公の「会津暦」が出発点と思われます。日新館は戊辰戦争で焼失し、現存するのは会津若松城趾西側に残る天文台遺構のみです。天体観測の史料は残つていません。

ぼ同時期に建設されました
江戸時代の天文台遺構としては国内唯一と云われて
います。

会津藩校日新館
日新館天文台遺跡訪問記
伊能忠敬研究会東北支部長
松宮



日新館正面



天文台遺構の前で日新館長、宗像精先生（左）と筆者

日新館は昭和62年、会津若松市河東町に完全復元されました。

（敷地8万坪、学舎、天文台、孔子像、馬場、射撃場、水練場）

去る平成31年3月18日、日新館を訪問しました。

会津藩校日新館長、宗像精先生、会津若松市教育委員会文化課文化財グループ主査近藤真佐夫先生に面会し、伊能忠敬関連の史料を提供いたしました。

会津若松市広報5月号に、伊能忠敬会津城下測量と日新館天文台との関係が掲載されました。

会津街道の天体観測

（二代村（郡山市湖南町））

伊能忠敬は福島県内16か所に泊

まり里程の測量をしています。

「東都以北及蝦夷地北極出地度方位裡測量」によると三代村本陣一瓶又右衛門屋敷で享和2年（1802年）6月24日（陽曆7月23日）9個の星座を観測しています。

江戸時代、当時の星座名は中国語で記載されています。

日新館天文台は、天体観測機器、天体観測の技術など、伊能忠敬の天体測量、幕府天文方（浅草）の指導があつたものと思われます。



日新館全景、天文台頂上より



日新館水練場（プール）



孔子礼拝堂（昌平黌と同じ大きさ）



日新館校舎内天球儀（模型）

新入会員自己紹介

兵庫県豊岡市 加賀見省一



私が伊能忠敬に興味を持つたきっかけは、平成六年度に奈良時代に建立された但馬国分寺の発掘調査成果の展示を担当した時です。伊能忠敬の『測量日記』の文化十一年正月十九日に「国分村（左国分寺旧跡田地中に柱の敷石三ツあり）」と但馬国分寺跡の礎石の記述があります。また同日「山本村右田中に法花寺尼寺旧跡あり。柱礎七ツあり」と書かれていることを知ったことです。展示及び図録に『測量日記』の写真掲載さ

員会に文化財担当として就職し、昨年三月末で退職をしました。時間ができたので、興味を持っていた伊能忠敬のことを調べたいと思い、伊能忠敬研究会に入会させていただきました。

出身は兵庫県加古川市で、大学で考古学を専攻しました。卒業後、同じく兵庫県日高町（現豊岡市）教育委員会に文化財担当として就職し、昨年三月末で退職をしました。時間ができたので、興味を持っていた伊能忠敬のことを調べたいと思い、伊能忠敬研究会に入会させていただきました。

最初は第五次測量の時で、文化三年八月二十日に因幡国から但馬国に入り、海岸線を測量しながら、湯島に滞在し、円山川（『測量日記』では丸山川と表記、さらに下流域を豊岡川と呼んでいたことがわかります）の下流域を測量しています。

二度目は第八次調査で、文化十一年正月を姫路城下西中町で迎え、同月三日に出石藩の役人の御用聞きを受け、翌四日に姫路城下を出立して無測で文化八年三月三日に書写山円教寺から姫路城下大黒町迄を測量した際に東中島村（現姫路市白国）の出石街道と増井道の追分に残した印から、伊能忠敬を隊長とする本隊が丹波街道、永井甚左衛門を隊長とする別手が但馬街道とに分かれて測

せていただきたいと思い、伊能忠敬記念館にお邪魔し、伊能忠敬の直筆を見て大きな感動を受けました。

また、同展示で神戸市立博物館所蔵の伊能小図（レプリカ）を借用し、実際に、沿岸部だけでなく内陸部特に姫路城下から湯島（現豊岡市城崎町湯島）までの内陸部の測量が詳細に行われて繋がれること、自宅前に測量していたことも知り、大変驚いたのとは非地域の人たちに伝えたいと思ったようになりました。

伊能忠敬の但馬測量は一度行われています。

今年に入り、数回姫路城下と出石街道と増井道の追分付近の現地を調査し、④の位置を確認しました。これからは、文化三年に湯島の湯之前橋前に残した①印に繋ぎ、さらに出石城下を経て丹波、丹後の両国へ測量を進めた街道や風景を「伊能図」、「測量日記」、「山島方位記」などから復元を試みると共に、地元に残る古文書から伊能測量隊の測量を支えた人たちの様子を調べたいと思っております。

量を行っています。

写真2は、同日、和田山村（現朝来市和田山町）にある「右はりま左いせ道」の道標（追分碑）に④印を残します。そして、同月十四日に丹波街道を測量した本隊がこの④印に繋いだ道標です。



写真1 えびす橋

写真1は、但馬街道を測量した別手が正月十二日に朝来郡内の竹田城跡の麓を測量した際に渡った石橋です。『測量日記』には「竹田町、字新町、小溝石橋二間。右夷松というあり」と書かれています。この橋は今も「えびす橋」と呼ばれる方たちに大切に守られています。



法花寺旧寺の柱礎（最下段の石）



写真2 道標

できれば今後、伊能測量隊の但馬測量の調査成果を『伊能忠敬研究』でご紹介できればと思っています。先日のみなさま方のご指導、ご鞭撻をよろしくお願いします。

2019年度定期総会

6月2日(日)に東京深川の富岡八幡宮で会員43名が出席して2019年度定期総会が開催された。

議題は、2018年度事業報告、決算報告及び監査報告、2019年度事業計画、予算案、会則の変更、役員選出で、全ての議案が承認された。

新理事には、菱山剛秀(代表)、河崎倫代(副代表)、前田幸子(事務局長)、新沢義博、高安克己、玉造功、宮内敏、山本公之の8名。監事には清水靖夫氏が選出された。

顧問は新たに伊能楯雄、伊能洋氏、特別顧問は鈴木純子、星埜由尚の各氏に就任いただき、理事会に助言をいたぐことになった。

理事の会務分担
会員担当(河崎倫代)
総務担当(前田幸子、山本公之)
編集担当(高安克己、玉造功、菱山剛秀、宮内敏)
行事担当(新沢義博)

その他、会則の変更は、これまであいまいだった特別会員と名誉顧問・顧問の位置づけを明確化するためのものであった。

改定後の会則はホームページに掲載しているので確認いただきたい。



一、福智町広報「FUKUCHI」 (2018年11月号)

始めたのでお読みいただきたい。
ここでは、福岡県田川郡2町の自治体広報紙を紹介し、身近なところでのどんな活動ができるか、とともに考えるきっかけにしたい。

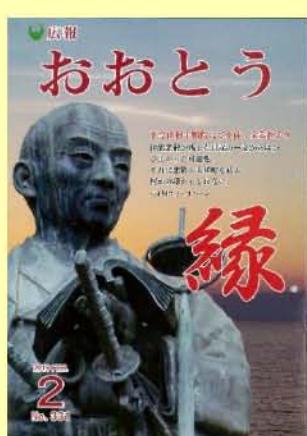
「没後二百年」伊能忠敬の生き様と偉業に迫る」と題した、12ページにわたる特集である。忠敬の人物像、測量機器、田川地区を記した『測量日記』等を紹介し、田川郷土研究会会長で当会会員である中野直毅氏が、「努力積み重ねる忠敬の価値観を次代へ伝えたい」と語っている。

自治体広報紙らしく、忠敬の「一身一生」にちなみ、「人生の途中で一念発起し、次のステージへと歩みを進める」町民を紹介し、「カラダづくりに効果大、今から始める伊能ウォーキング」を勧めている。当会会員の奥永渚さんが愛犬とともにウォーキングモデルを務めている。



二、大任町広報「おおとう」 (2019年2月号)

『測量日記』の「下今任村十輪院にて小休、宝蓋松あり」という一文に町との「縁」を見い出して、特集が組まれた。忠敬が記した宝蓋松は約50年前に枯れてしまったが、1923年の写真には樹高十数メートルのみごとな松が写っている。また、図書室では没後200年にちなんで「伊能忠敬特集コーナー」が設けられ、町民に利用を呼びかけている。



■新コーナーの原稿募集

「伊能忠敬と私」、「伊能忠敬との出会い」という内容(タイトルは自由)で原稿を募集します。原稿の長さは、本文・写真を含めて1ページとします。今号最後ページの投稿要領に従って投稿してください。皆さまのご協力ををお願いします。

『伊能忠敬研究』投稿要領

① 原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。
*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。

② 原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。手書きの場合は、原稿用紙に楷書で記載してください。

・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なもの用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真的場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによつて5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真是無理な場合があります。

わからぬ場合はレ判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG形式またはTIFF形式）にしてください。手書きの場合は、そのまま印刷原稿となるよう製図したものをお送りください。

③ 原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものをお送りください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

送り先

・電子メール添付の場合 kaiho@inoh-ken.org
・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6日本地図センター2階
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④ 注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取つておいてください。
・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があつた場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとつておいてください。

次号（第89号）は2019年10月発行
原稿〆切は8月30日の予定です。
皆様からの投稿をお待ちしています！

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行つております。

- ① 会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ② 例会・見学会の開催
- ③ 忠敬関連イベントの主催または共催
- ④ その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール mail@inoh-ken.org
郵便振替口座 〇〇1HO大-〇七一八六一〇

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○伊能忠敬e資料館 「Innopedia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料

<http://www.inopedia.tokyo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/~koko>

編集後記 ◇今号は令和での初号となつた。改元祝賀ムードもあつて、後半は天候にも恵まれ、「〇連休はどここの観光地も大混雑だった」という◇年に数度しか来ない孫たちは、それを察知してか今年は我が家を選んでくれた。突然、普段の日常は戦場と化し、あつちが痛いことを痛いなど言つていられない。帰つた後は疲れと幸せ感が微妙に混在して、まるでねむばかりだ。老いや世代交代を嫌でも実感させられる◇編集作業での悩みの種は慢性的原稿不足だ。今もそれは解消されていないが新入会員の投稿が目立つてきている。どしどし投稿していたとき、新風を吹き込んでもらえたと願う◇会誌は会員の発表の場であり会員相互の交流の場です。先ずは上段の投稿要領をご覧いただき、めんどうがらず、身近な話題の投稿から始められては如何だろうか。会誌デビューをお待ちしています。（S・M）